
英雄伝説

カイラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説

【NNコード】

N4002V

【作者名】

カイラ

【あらすじ】

「ゴーデリック・グリフィンドール……今はホグワーツの“創設者”としてあいつらと同様、有名な俺だが当時は別の意味で有名だった。これはその当時の俺が忘れてしまった“記憶”からあいつらと出会つてやんちゃに暮らし……俺が死ぬまでの物語。

『英雄後談』の創設者世代です。

原作設定? んなもんは知らねえよ! ってな感じで無視をしている所があります。お陰で“迫害”所ではありませんし、人バタバタ死んでます。

前回ほど毎日更新出来ない……かも？

設定（前書き）

皆様、おはようございます！

あらすじより注意書きが多くなつてしまつた“英雄伝説”です。
これは設定ですが、何分めんどくせ……いえ、執筆、執筆と考えいたせいでゴドリックの分しかありません。

まあゴドリックの分も以前のをコピーして少し加工しただけです
で……後で書き加えると思います。

まあ見ている方も少ないと思いますし、へー……程度でお願いします。

設定

主人公

ゴドリック・グリフィンドール
(ラクス・ファーファス)

年齢 ?

誕生日 ?

血液型 自称O型

身長 148 (伸びなかつた)

性格

後世には勇猛果敢と残っている。…が実際には他の創設者には時々逆らえなかつたりする。

基本ネガティブで考え無し、悪戯好き。サラザール・スリザリン曰く馬鹿で単細胞。しかし思考が分からぬなど掘みにくい性格。創設者と居る時ののみ性格が変わる。

追記

ゴドリック・グリフィンドールの容姿は赤髪に青い目、後に赤髪まじりの黄色の髪の毛に蒼い目。

髪型は後ろ髪を少し取り、強制的に結ばられた。その結んだ所だけを伸ばし、他は長くなつたら切つてもいい。(ヘルガカロウエナに)

右目には布、後に眼帯がしてある。しかし蒼い目になつてからは実は左目も見えていない、盲目。

左手には指貫き手袋をしており、手の甲には魔法陣が描かれてある。額には見えないよう眼帯の紐で隠しているが暗殺戦闘奴隸の印しがある。

ちなみに得意な事は暗殺。

プロローグ（前書き）

始まりました、創設者世代！

無計画な子世代と矛盾が起きないようこ頑張ります……

あ、後このプロローグの下の方は子世代を読んでいる方には分かる……と思いますが『英雄後談』の謎のプリンスに掲載していた続きになっています。

え？ 何それ？ つて方は暇な時間にどうぞ読んでみて下さい。
あ、でも読まなくてこの『英雄伝説』に支障はありません。……
多分。

プロローグ

夜とは違う暗闇。

暗い、暗い闇。

そんな暗闇の中力チャリと扉の開く音が響いた。
バタンと扉が閉まる音が聞こえた後にカツカツと足音が定期的に響く。

そしてピタリと足音が止まった。

「さて、今年も頼むぞ。大切な『先見の巫女』よ
「……今年は例年通りの何ら変わりません」
「……ふむ。ならばいつが“豊作”なのだ」
「……今から、数年後の新生児……です」

「そうか」

嬉しそうな男の声が響いた後にジャリと鎖が動く音が聞こえた。

「……貴様には何も出来んよ」

嘲ける様に男は告げた。

「……」

「それではまた、我々が来た時にはぜひ頼むよ」

『先見の巫女』よ、と男は締めくくりカツカツと離れて行つた。
バタンと扉の閉まる音が聞こえ、静寂が広がる。

「つ……すまない」

巫女は辛そうにそう言つとガシャリと手に付けられた鎖を鳴らしながら自身の首へと動かした。

あれから数年後、月に照らされながらも夜道に赤い髪をした子供を抱え荒れた地をジャリジャリと進む人間がいた。

「……このあたりで十分か?」

そう言いキヨロキヨロと辺りを見回すと近場にあつた子供が横になるには少し大きめの石の上に子供を置く。

「さて、今日の仕事は此処までだつたな」

子供を置いた人間はそう言つとパチンと『姿くらまし』をしてその場を去つて行つた。

その場に残つたのは月明かりを浴びながら今だ目を閉じて寝ている子供だけであつた。

プロローグ（後書き）

「えーと……『英雄伝説』において作者の勝手に作った設定や、此処から初めて読む方への詳しい設定説明を此処でゴドリックにしでもらう」…………えー「

俺はガサリと受けとつた紙を丸める。

「めんどうせーな…………」

大体、作中でもするんだし此処いらぬいだろ、と俺は吐き捨てながら丸めた紙を投げ捨てる。

「大体俺一人なんだ」

「いいや、違うぜ？」

「…………！」

「…………誰だ」

俺の言葉を遮り、バサリと侵入者は俺の前に現れた。

「今回からオマフと一緒にやる事になった同業者だ」

そう言って奴はニヤリと笑つた。

一話（前書き）

……何だか無理矢理感が拭えない。

しかも短いですし……

うーん……

毎回このくらいになるなら、頑張つて毎日更新した方がいいよなあ

……

でもオリジナルだから前回程はスイスイ書けないし……

悩みビリビリです……

暗闇からゆつくりと浮き上がる感覚で意識が戻り俺は目を開いた。

(……ここは？)

此処はどこなのだろう？

目の前には荒れた大地とかさかさな草、葉っぱがついていない木々、そしてとても遠い人がいる。

(……こ、こは)

頭に浮かんでは消える何か。それは此処が“荒れ果てた荒野”だと教えてくれた。そしてさらに何かは続していく。

“荒れ果てた荒野”には職を失った無職の人や親に捨てられた子供が暮らす場所。無法地帯だ

(ショク？ ことも？ むほーちたい？)

しかし頭にはそれらについては浮かばなかつた。浮かんだのは別の事。

今、世界には魔法使いとマグル、スクイプがいる

(まくる？ まほーつかい？ すくいふ？)

マグルとは魔法使いでない者の事。魔法使いとは魔法を使う者だ……スクイプとは魔法使いの元に生まれたが魔法が使えない者の事だ

(まほう？)

しかし俺の疑問には答えずに淡々と教える。

今魔法界は身分制になつていて

一番上が三家……スリザリン家、ハッフルパフ家、レイブンクローフ家、だ。

次に偉いのは魔法大臣。その次が魔法省……役人だ。それからは色々複雑に入り組んでいる

(?????)

俺は何が何だか分からなかつた。

だが人……マグルや普通に働いている魔法使いより身分が下がある。まずマグルや魔法使いより上から没落した家だ。その下が孤児……親に捨てられた子供や無職な人々。そして魔法生物だ

(まほー…せいふつ?)

……その魔法生物より下がある。人として見られていない、奴隸だ。奴隸には三段階ある

(……)

一般型奴隸、戦闘奴隸、実験中の暗殺戦闘奴隸だ。奴隸の中では上の一般型奴隸は……そうだな。人にこき使われる、とでも言おう。真ん中の戦闘奴隸はそれに戦闘……金持ちの娯楽の為の奴隸同士の喧嘩に入る。最後、下の暗殺戦闘奴隸は……戦闘奴隸にもつとも罪が重い“殺し”が入る

(こ…れし?)

殺し、だ

俺は何一つ分からぬまま浮かび上がっていた何かは消えていった。教えてくれた内容は何一つ分からぬが忘れる事は出来ずに、漠然と周りの荒れた大地を見渡す。

(……おれは?)

不意に湧きってきた感情。

「おれはたれ?」

「だああれだらな?」

周りを見ていた俺の後ろから野太い声が聞こえた。

俺は後ろへ振り返る。

「……たれ?」

そこには真ん丸な頭に傷がついた顔の男が立っていた。

男はニヤリと笑う。

「捨てられたガキか。オマエにや悪いが……」

男は腕を上げる。

「死んでもらう」

男は腕を振り下ろした。

俺はあるで当たり前のように前……男の方へと走った。

「あ、あ？」

俺は男の足元までつくとおもいつきりジャンプをした。

「ぐうあ……」

俺の頭が男の急所に当たり男は急所を押さえながら「ロロロロ」とのたうちまわっている。

男は涙目になりながら立ち上がり話す。

「オマエ、やるじやーねえか……」

俺はそう言つた男に聞いた。

「なんてこりこりしているの？」

男は目を丸め、口をこれでもかと開き、驚いていた。やがてゆっくりと詰り。

「無意識かよ……」

男は睡然と言つた。

「めいしき？」

「……む・い・し・き・だ」

「むめしきー」

男は額に手を当てた。そしてしゃがみ、俺の目の前でハツキリと言つた。

「む・い・し・き・だ、ガキ。遠くなつてるわ」

「むしき」

「ねえワザと?ワザだよな?ガキ」

俺はキヨトーンと傾げる。

「わざと?」

男はガクリと肩を落とした。

「誰だ……こんな言葉もろくに話せないガキを捨てたのは「

「す……てた?」

男は俺を見る。

「……はあ。」のまま置いておくのはな……ガキ、名は?」

「な?」

「……ないのか。俺はエスター・ジオだ。エスター・ジオ・ニーランド。エスター・ジオって言つてみる」

「え……えすた」

男はゆつくり大きく言つた。

「エスター・ジオ」

「えすたすを」

「……エスターだ」

「えすた！」

「……ああ。それでいい」

何やらエスターは涙目だ。

エスターは立ち上がり手を差し出した。

「おら」

「……？」

「つたく」

エスターは俺の手を取り繋いだ。

「今から俺が使つて いる家へと行くぞ」

「えー！」

「……妙なのを拾つたな」

「？」

「何でもねえ」

エスターは俺をグイグイと引つ張つて何処か検討もつかない場所へと連れて行つた。

「俺の名前はエスター・ジオだ」

まあ作中でも出てたからここんくらいでいいよな、とエスター・ジオ……だったか？はそう言つ。

「さて、おいーそこ」の同業者ー。」

エスター・ジオは俺を指差す。

「今日の設定は何だー！」

すげえ偉そうに喋る奴だな、と思いながらも俺は貰つた紙を広げる。

「魔法使いとマグルについて……」

説明よろしく、と紙には付け加えて書いてあつたが……まあこれは言わなくていいだろ。

「簡単だな。魔法使いは反則的なもんを使う。呪文を唱えて木の棒を振り回したり、円の中に変な模様を書いただけで炎やら水やら物を変えたり、動けなくする奴らを魔法使い、それらを出来ない普通な人を魔法使いが見下したようにマグルと言つてはいるだけだ」

「…………」

いや、見下している以外は間違つてはないけど……説明の仕方が他にあるだろ？

俺はため息をつく。

「何だ？ため息なんてついて

んなもんはつくもんじゃないぞ、とエスター・ジオは言つ。

「…………そうだな」

……もう、いいか。

どうにでもなればいい。ついでにこのコーナーも終われ！！

俺は貰つた紙を丸めて投げ捨てた。

「此処が家だ」

「いえ？」

「……発音が違うな。い・えだ」

エスターは俺を引っ張りながら机に座る。

「いえ？」

「……よし。そん調子だ」

エスターはグシャグシャと俺の頭を撫でた。

「ぐえ……」

力が強すぎて変な声が出てしまった。

「ああ？……わりイ、強すぎたな」

エスターは頭の手を退けた。

「むう……」

エスターは退けた手を顎へ持つて行き何かを考えているポーズを取つた。

「さて、お前の名前だよな……」

エスターはうへん、と唸りながらブツブツと言こ始める。

「ラルク…アルフォード…ジョン…」

俺は寝転んで空を見上げる。

空では白い雲がゆらりゆらりと揺れていた。

「……へらへ

無意識に呟いた。

「ラク？お前の名前か？」

「う？」

「……」

エスターは俺を見てニヤリと笑いピシリと指を指した。

「お前の名前はラクだ！」

「…………」

「…………」

「…………」

「あのな、黙るの止めよ。な？」

「あい！」

俺は元気よく答えた。

「ラク、喧嘩をやるぞ」

「カーしゃ？」

「…………喧嘩、だ。行くぞ」

エスターは俺の手を掴み岩を下りる。

エスターは“家”から離れ、草地が多いところへと連れて行った。

「此処でいいな」

エスターはパツと手を放し、俺から離れた。

「ラク、今から喧嘩を教えてやる。これから此処で暮らすなら必要になるからよく覚えておけよ。」

エスターは一息なり走つてきて蹴りを繰り出す。

「！？」

俺は避ける事が出来ずにもう一歩、後方へとぶつ飛んだ。

「…………つか…………うえ」

ダラダラと涎を垂らす。

「…………何だ？ 向かつて来ないとお前が死ぬぞ？」

エスターはニヤリと笑つた。

「…………おほーしょで！」

俺はエスターにビシッと言つた。

そんな俺にエスターはハツキリと言つ。

「…………わりイ、何て言ったのかわからねえ」

ブツリと何かがいつた俺はエスターに囁つ。

「いつはーしゅくらわあせーす！」

エスターを見るとニヤリと笑つていた。

「今のは何となく分かつたぜ…………一発食らわせてやる、だろ？ やつ

てみるよ

「……おほかしょでよ。」

エスターは何やらスッキリしたような顔で言った。

「ああ！覚えておけよ、か？口は言いから来いよ

俺はエスターに向かつて走り出した。

夜、俺はエスターと薪を焚いている岩の上に座っていた。

「むう～……」

「俺に勝つのはまだまだ早い。十年どころじゃ足りねえな」
日が暮れはじめた頃まで俺はエスターと“喧嘩”をした。……エスター
の一方的なボコ殴りの蹴り放題、やりたい放題だったが。
俺はエスターにやられた腕を見ていた。

「ああ？痛むか？」

「……」

俺はムツスリとして答えなかつた。

そんな俺を見てエスターは豪快に笑つた。

「クク……そんなに負けたのが嫌か？」

「……」

聞かれてもなお答えない俺にエスターの笑い声の音量は上がつた。

「ラク、オメエはこれから伸びるぞ。ほら、これを当てとけ

エスターは夕食に食べた獣の肉を投げた。

俺はビチャという音を立てながら顔で受け止めた。

「にいく？」

「肉だ。まあその肉には何も効果ないが……当ててないよりマシだ

「うづ

「？」

キヨトンと俺はエスタを見ていた。

「あー… こつち来い」

俺は立ち上がりトタトタとエスタに近づいた。
エスタの元へ行くとエスタは俺の手を掴み、無理矢理エスタの膝の上へと座らせた。

「おら、押さえとけ」

エスタは俺の腕の上に先程顔面で受け止めた肉を赤黒く変色した腕に乗せた。

「おさえ？」

「ああ、もう片方の手で押さえるんだ。こりやつてな」

エスタは実際に押さえるとこをしてくれた。

「真似してみる」

俺はエスタの真似をして押さえる。

「そうだ。俺が外していいと言つまでしておくれんだ」

エスタはこう言つて押さえる真似を止めた。

俺はエスタに言われた通りに押さえ続ける。

「それと、返事はしろ」

「へーし?」

「返事だ。返事は先程のよくな感じで問われた時に使う。はいってな」

俺にはまだ難しく分からなかつた。だからいつものようにエスタの言葉を繰り返した。

「あい!」

「よーし、いい子だ」

エスタはいつもニヤリじやなく、ニコニコッと嬉しそうに笑つた。

俺の頭をグシャグシャにしながら。

「今日使つたからな……」

エスタは横に置いていた剣をスラリと抜いた。

俺は剣を見ながらキヨトンと首を傾げる。

「見たことないか? 剣だ。もっともこれはナマクラもんだがな」

「つー牠」

「剣、だ。動くなよ、ラク」

エスターは剣をなるべく薪の近くに持つていく。

剣は真っ赤な明るい炎に照らされてどす黒い赤色が映っていた。

「おなし…」

俺は剣のどす黒い赤色を指しながら肉を置いている腕と交互に指す。

「同じ? いや、違うな。血の色は痣なんかとは違う。もつと暗い

…?」

俺は首を傾げる。

「ようするに違う色何だよ、それとま

エスターは俺の腕を指した。

「んー…同じならお前の髪と炎が同じだ

エスターは俺の腕から髪を指し、それから真っ赤な炎を指した。

「おなし?」

「ああ、同じだ。メラメラと真っ赤に燃える。……オマエと一緒にだ」

エスターは笑った。ニヤリでもニコニコでもない笑いで。

「ああ、後はお前の目と空も同じ青さだな

「そら? おなし?」

「ああ。どこまでも青い」

エスターは剣に布を被せて手で押さえゆつくりと剣を動かしていく。布から出て来た剣は先程みたいなどす黒い色ではなかつたがまだ少し赤かつた。

「ホントはもっとちゃんと手入れが出来れば良いんだがな…此処では仕方がないな

エスターはポイッと布をそこら辺に投げた。

「さて… オマエさんの勉強といきますか

「へんきゅー?」

「……まずは正しい言葉からだな」

エスターは剣をスラリとしまい、同じように隣に置いた。

「ラク、オメエはまず正しく発音をしねえと今のままじゃ誰も理解

出来ねえ。……俺も含めて、な」

エスターは真剣に、真つすぐと言つた。

「だからまず発音をどうにかしねえとな。そつだな……」

エスターはガシガシと頭をかく。

「オメエは何が……いや、殆ど言えてねえな」

エスターはふと、田の前にあるたき火を見た。

「ラク、炎つて言つてみろ」

「ほのあ」

「……え? 言えてんな、オメエ。じゃ薪だ」

「たたき」

「おー……?」

エスターは何やら考えこんだ。そしてこいつ言つた。

「ラク、空を言つてみろ」

「そら」

「足はどうだ」

「あし」

「じゃ剣はどうだ?」

エスターは剣を指しながら聞いた。

「つーき」

「……成る程な」

エスターはうん、うんと言いながら頷いていた。

「オメエは濁音があるとまるでダメだな。後長かつたり難しそうな
の。じゃそれからやるれば良いんだな」
んーとエスターは言つた後にこいつ言つた。

「ラク、スクイプはどうだ?」

「すくいふ

「スク・イ・プ」

「すくいづ」

「……何か遠くなつたな? じゃあ……動物

「とーふつ」

「ど・う・ぶ・つ

エスターはゆっくり¹口切って言った。

「とうふつ

「……近く、はなつてゐるな。動物

「とうふつ

エスターは頭を手で覆つた。

「はー……。ラク、棒はどうだ?」

「ほう

「ぼ・う

俺はゆっくりとエスターの言葉を繰り返す。

「ぼつ

「……ぼーって言えるか?」

「ぼー?」

「ぼー」

俺はエスターのをじっかり聞いて、言った。

「ぼー?」

「そうだ! それでぼ・う

「ぼー……う

「……あまだまだ改善しないとダメだが……」の調子で行くか。

今度は「

エスターの勉強は俺のまぶたがくつつきそうにならないながら²クラクラ³クラ⁴頭が動くようになつてようやく終わりを告げた。

「またあるのか……」

俺は渡された紙にウンザリしながらも聞く。

「えーっと“荒れ果てた荒野”について？」

……面倒だな。

「オメエ知らないのか？荒れ果てた荒野は……まあ作中と同じ、職が無くなり独りになつた奴や捨てられたガキ、離縁された奴や物好きな奴ら、後は……犯罪を犯した奴らが来る土地だな」

まだ毎日殺れば良いだけの楽に暮らせる場所だ、ヒュースタージオは胡座をかきながら言いつ。

「へー……そんな所でよく子育てなんか出来たね？」

「俺が天才だからな」

「……それでは、またなー」

俺は何も見ていない。あんな……自慢げに笑うと犯罪者にしか見えない笑顔なんて見てはない。

「あ、何勝手に終わつてんだ！ テメエ！」

朝日が昇り俺は田を覚ました。

（……ね、む）

ゴシゴシと田を擦る。

「起きたか」

エスターはすでに起きていた。
剣を持つて俺を見ている。

「……」

「まずは朝飯を取りに行くぞ」

「……」

「おーい、起きてるか？」

「……あい

「クリと頭が揺らぐ。

「ダメだな。しばらく待つか」

エスターはよつと、と言いながら腰を下ろした。

「なあんて拾つたんだろうな……」

頭がボーとしていて何も処理されていない。そんな中でエスターの独り言を右から左に聞き流していた。

「この俺が言葉分かんねえガキに言葉教えて、飯食わせて……あけぐにあ“喧嘩”を仕込んで……」

「ホント、人生何処で変わるか分からねえな、親友」

「……」

「……いい加減起きる！」

エスターは俺に寄ってきて頭を叩いた。

「うつ……あ？」

「やつと起きたか

行くぞ、とエスターは言い出していく。

俺は立ち上がりエスターの後を追いかけた。

エスタは昨日出会った場所へ来ていた。

「……？」

俺はキヨトンと傾げる。

「……よく見ておけ！食料はこいつやつて得るもんだあ
エスタは左側の草むらから出てきて襲つて来た奴をその場でクルリ
と一周回り、襲つて来た奴と向き合つたかと思えば瞬時に首を跳ね
ていた。

ブシャヤアと赤い液体が吹き出す。

赤い液体はどんどんと吹き出し地面を赤く染めていく。

「……えすた、これ？」

俺はエスタを呼びながら赤い液体に触る。

「ん？……ああ、血か？」

エスタはアツサリと教えてくれた。

「ち？」

「ああ。それはな人間には必要なもんだ。それがいっぱい、そうだ
なあ……今と同じくらい流れたらもう生きる事は出来ねえ」

「……？」

「まだ分かんねえか……」

エスタは俺の顔を見て笑つた。

「よつと……」

エスタはヒヨイと首がない体を抱えた。

「ちょっと川があるところに行くぞ」

エスタはスタスタと歩いて言った。

（あ……）

俺は置いていかれないようにエスタの後に続いた。

しばらくすると俺よりずっと先を歩いていたエスタが急に立ち止ま
つた。

「着いたぞ」

エスタの横に行き前を見ると青くすんだ川がサラサラと流れていた。

「わあ……」

「気に入つたか？」

「うい！」

「……今度はうかよ」

「……？」

「まあいい。飯が先だ」

エスタはこう言つて体を抱えたまま川へと向かつた。
エスタは川でジャブジャブと剣を洗い、その洗つた剣を使って体を
別けはじめた。

「えすた……？」

「人間つてのはな、食えるんだ。よく見とけ。いずれお前にも必要
になる技術だ」

エスタはこう言つてザクザクと切り進める。

エスタが切れば切るほど周りが赤い血に染まつていった。

「よし、こんくらいか」

エスタは切り分けたいくつかの肉を側に置きながら言つ。

「後は剣を洗つてすぐに離れるぞ」

獸や他の奴らが取りこぼしを狙いに来るからな、とエスタは言いな
がら剣を洗つていた。

エスタは何度もうん、うん、と言い振り返つた。

「ラク、行くぞ」

エスタは俺の手を掴む。

「走るぞ」

エスタは駆け出した。

「！？」

俺は急いで駆け出す。

「ハア……ハツ」

エスタはとても早く俺がエスタの元へと着いた時には息が切れてい
た。

「此処まで来れば平氣だろ、」

エスタは俺を見る。

「……大丈夫か？」

「ハア……ハツ……」

俺は隣で座り込む。

「……少し休憩するか」

エスタは腰を下ろした。

「飯、食い終わったらまた“喧嘩”やるからな」

俺はコクン、と頷く。エスタを今度こそ一殴りしてやる！

「で、その後は勉強な」

「…………やた」

「ダメだ。今もきちんと話せてないし、分からぬ言葉も沢山あるのだろう？」

「…………」

エスタは立ち上がる。

「まだ座っていていい。だが動くなよ？俺は薪を拾つてくる」

エスタはタツタツと走つて行つた。

（はや……い）

俺はゴロゴロと寝転がる。

「そ……ら」

俺の目の前には青く透き通る空。そして青い空にフワフワに白い雲が浮かんでいた。

「…………」

ボーと俺は空を見上げる。けれど暇だとか暑いとかそういうふうには思わずただ、ただそうするのが当たり前……みたいに感じていた。

いつまでそうしていたのかは分からぬ。ただユックリと進んでいく雲をいくつも見ていた時に不意に声がかけられたのだ。

「おり、起きろワク」

ゲシッと軽く足で頭を踏まれる。

「むう……」

俺はエスタが足を除けるとすぐさま立ち上がる。……また踏まれた

くないし。

エスターは片手を薪で一杯にし、もう片手で肉を掴んでいた。

「……戻るぞ」

エスターはこう言つた後にクルリと背を向けて駆け出した。

（わ……と……）

俺は置いて行かれないように急いで駆け出した。

いくつもの朝と夜が経つたある日、俺は地べたに顔をくっつけていた。

.....?

俺は目の前にあるギザギザな葉っぱを根っこから取り、トタトタとエスターの元へ向かった。

「えすた！」

「んあ？ どうした？」

卷之三

「あー……そりや毒のある草だよ」

備が分かぬとはアミエノヒでレルトハスダハニヤニと笑へ言ふ

「食べてみれば分かる」

(たべる?)

俺はしばらく手に持っていない草を見つめ、それからハクリと食べた。

エヌタは呆て氣味に言ひ。

「ええ」

(ま づ)

草を食べてから舌がピリピリとし、何だか体が動きにくい。

「それは毒草だ。毒草つても舌がピリピリし、体が少し痺れるくらいの怪こちがうづな

「むかし」

「体の痺れがとれたら薬草探してこいよー」

エスターはゴロン、とまた寝転がる。

(むら～～)

絶対エスタが驚くようなのを取つてきてやる！

トタトタと俺は“家”から離れた。

(なにかあるかな?)

キヨロキヨロと注意深く周囲を見ながら俺は歩いていく。
(あれはちがつたし……)

この辺りは全て終わつたか?

(ほかのくさは……)

遠出しないとないかな?

俺は更に奥に行くために駆け出した。

何で俺がこんな遠い所までウロウロとしているかと言つとHスタガ

一言……

「腹痛いから薬草取つて来い」

から始まつた。

それで俺は片つ端から田についた草を抜いてはエスタに届けたのが
が……見事に全て違つた。

この辺の草は全て渡したので俺は今遠くの森へと向かつているのだ。
(うわあ……)

森はまた荒れ地とは違う植物で溢れていた。

(このどれかに、あるかな?)

俺はキヨロキヨロと周りを見渡しながらガサガサと進んで行く。

『クウウウ……』

「……え?」

「……ち……?」

俺は声の主がいるだらう場所へと足を向けた。

ガサガサと草を分けていくと不意に少し開けた場所に着いた。

(ひる……)

キヨロキヨロと周りを見回すと開けた場所のちょうど真ん中くらい
にこの世にはいないだらう、と思うほどの不思議な色をした鳥が血

まみれで倒れていた。

俺はパタパタと駆け寄つて行く。

(えー……と?)

とりあえず赤い液体をどうにかしなければ、と思つた俺はその近くにあつた草を沢山抜いていきそれらを地面に引く。

そしてそつと鳥を抱え引いた草の上にゆっくり乗せる。

(んー……?)

しばらく考え、思い出した。

エスターが同じように赤い液体を流していた俺に深い緑色をした葉っぱをギュッと握つてポタポタと出てきた汁を塗ると血が止まつた気がする。いや、痛みが引いただけだつたか?

(どつちかはわからないけど……)

やってみるか。

そう思つた俺は怪我をした鳥から離れ、あの深い緑色の草を探した。

「…………あ」

あの鳥から大分離れてしまつたが、俺は湖の中にある深い緑色の薬草を見つけた。当然、その薬草が生えている場所が水の中なので取るには潜らなくてはならないが。

「…………」

俺はポチヤンと先に足を入れ、スルリと水の中に入る。

スウ……と息を入れ、止めてからバシャと潜る。

水の中は澄んでいてヒヨロリとしていたり、ブクツと膨れていたり、大きいものから小さいものまで見たことのない生物がそこには住んでいた。

俺は見知らぬものばかりでキヨロキヨロと周りを見ていたがそうするとあまり息が持たなくなり、何回か浮上するということが続いた。だが、やがて学習しキヨロキヨロと周りを見るなどをせずに探していた薬草を探しはじめる。

(あつた!)

一生懸命に手を伸ばし、ブツリと薬草を抜いた。

俺は薬草を握りしめながら浮上する。

「ふはつ……はあ、はつ」

少しだけ息を整えてから陸に上る。

（こそがないと……）

俺は陸に上がつてからあの鳥の元へ走り出した。

（……いた）

俺が鳥を見つけた場所へ着くとそこは俺が見つけた時と何一つ変わらない今まで弱つて いる鳥がいた。

（こつしてつと……）

俺は取つて きた薬草を搾り、出てきた少ない液体を鳥にかけた。

（…………えーと）

俺がどうするか分からずについついていたと鳥がクウ……と今

だ弱々しくではあるが初めよりかは力強く羽をばたつかせながら鳴いた。

（…………どつじつ）

これをとめなこと、と俺は流れ出る血を見ながら叫びつ。

『いや、大丈夫だよ』

鳥のクチバシが動き、幼い子供のような声でそつ答えた。

『…………え？』

『君が取つて きた薬草は血止めの効果があるやつだ。だから少し時間が経てばこの血は止まるよ』

（とつ…………と…………つ……）

「う…………」

『…………』

「つわやああああああああ……」

俺は悲鳴を上げながらズザザアと急いで鳥との距離をあける。

そんな俺に不思議そうに鳥は聞いてきた。

『おこおこ、どうした?』

「…………はなしてる」

えすたがどうぶつははなさないっていつてた、と俺は付け加える。

『ああ……成る程』

納得したように首を縦に振りながら鳥は言った。

『確かに動物は話さない。だが、全てが動物とは限らないんだよ』

『…………？』

『うーん……そうだねえ』

キヨトンと話している事が分からずに首を傾げると鳥はうーんと唸りだす。

やがて鳥は唸り声を出さなくなり、クチバシを開いた。

『似てている姿をしててからって同じ種族ではないって事だよ』

『…………？』

『…………うん。あれだ……皆には秘密だけれど中には会話が出来る優秀な動物がいるんだよ』

『ほかにもいるの？？』

勢いよく聞いた俺に鳥はスッパリと言った。

『ああ？』

『…………』

(…………なに、こいつ？)

俺は不信の目で鳥を見る。

『…………そんな目で見ないでくれる？』

『…………うそつき』

『え？ 何処が？』

『いるつていつたのにいなつていう』

『僕が見たことが無いって言つただけだろー。』

『えすたはみたこと、かんじたことをしんじろつていつてた』

『喧嘩』をした時にエスターはよく言つてる。

『ぐう…………仕方ないなあ』

不確かな事を言つたのは僕だし……と鳥は呴いてからバサリと羽を広げる。

『うん、飛べなくはないね。…………さて』

そう言いながらバサリと鳥は羽を動かして飛んで浮く。

『君に…… そうだな、贈り物でもしよう』

「……おへりもの?」

(おへりものってなんだ?)

後でエスターに聞こつ。

『そり、贈り物。でも今すぐじゃないよ』

君が一番必要な時に必要だと想つた物をあげる、と鳥は告げる。

『手当てをありがとう。僕は行くよ』

またね、と言つてバサリと羽ばたいたかと想つと鳥は消えた。

(あ……れ?)

「……」

キヨロキヨロと辺りを見回すが地面に血が残っている程度で鳥がいた氣配はもう無かった。

「……?」

俺は風が吹き抜ける中ただ呆然としていた。

「……もう無くなつたと思つたんだが」

俺は出された紙をパシリと受け取る。

「前回は作者が忘れただけだからなー」

「……そのまま忘れればよかつたのに」

ガサリと紙を開きながら俺は呟いた。

「で、なんだつて？」

「……奴隸についてだつてや」

「あ？ 奴隸？」

じゃ俺はノータッチだな、とヒュスター・ジオは言ひ。

俺は眉を潜め、紙を握り潰す。

「俺も知らないな」

それにどうせ作中で説明あるだろ？

俺は握り潰した紙を無言術にて燃やした。

俺が鳥に会つたあの日よりも大分、……いや、会話が成立するよつになつたある日、エスタが昼飯を食つ終わり窓いでいる俺に「ひつひつた。

「常識講習第一回開始！」

「……じょーしき？」

「そうだ。オマエも大分言葉を理解しているから、これからはこの世界の常識を教えよつ。」

「まず、ここの世界には魔法使いとそうでない者に分けられる」

「まほう……つかい」

（それ、あのこえがいつてた……）

確かマグル……とかも言つてたな。

「ああ、魔法使いだ。魔法使いとは魔法が使える。魔法は……」

そこまで言つてエスタはポリポリと頭をかく。

「んー……魔法使いに会つたら嫌でも見るからな。そん時に教えてやる」

エスタはそんで、と話しがを続ける。

「魔法が使えない者……俺やオマエの事をマグルと言つんだ」

まあ、あいつらがそう呼んでいるだけだかな、とエスタは眉を潜め嫌そうな顔をしながら言つ。

「魔法界の事は詳しく述べ知らんが……知つていてる分を教えてやる」

知らないよりはマシだろ、とエスタは吐き捨てる。

「魔法界はどうやらトップに偉い家があるらしい。んでその次に魔法使いを管理している魔法省があるんだそうだ」

そう言つた後にエスタはため息をついた。

「だが、風の便りだとどうやらそのトップも形式的なだけで魔法省が一番偉いらしい」

「…………じゃあ、えらいのは?」「

「魔法省だ」

エスターは迷わず言い放った。

「後は……奴隸がいるとも聞いたな」
だが、とエスターは眉を寄せて続ける。

「多分、嘘だろう。黒人なら分かるが同じ白人を奴隸にするなんて
考えられん」

エスターはそう言って眉を潜めたまま黙り込む。

(…………どれい?)

奴隸とは何だ?

奴隸が何かを知るために俺はエスターに質問をする。
「えすた、どれいって?」

「…………」

しかしエスターは余程考え混んでいるのか返事をしない。

「え~す~た~!」

俺は気づかせる為にペチペチとエスターの足を叩きながら名前を呼んだ。

「ん?あ……どうした?」

やつと俺に気づいたエスターが慌てて問いただす。

「どれいってなに?」

「あー……奴隸はな自由がない人の事だ」

「じゅづ?」

「ああ。何も出来ないんだよ。一人で遊ぶ事も、昼寝をする事も、
好きな時に物を食べる事も出来ない」

何で、だろう?昼寝をしたいのならばすればいいし、食べたいのなら
ば食べればいい。

自由が効かない理由が分からぬ俺はエスターに問う。

「なんで?」

「あー……きつびしいー奴らが居るからだな。もし勝手に昼寝なんか
したら蹴られたり殴られたり……飯は確実に無いし、場合によつて

は大人の世界を無理矢理つて事もある「

「……おとのせかい？」

「……それはまだ知らなくていい。いや、知るな」
エスターはポンと俺の頭に手を乗せながら言った。

「後は……ああ、この土地の事も知つとかないといけないな」
エスターはスウと一息し、話し出す。

「此処は“荒れ果てた荒野”と呼ばれている。この荒れ果てた荒野
は……そうだな」

エスターはうーん……としばらく唸つた後に口を開いた。

「皆、身寄りが居ない。一人だ」

オマエみたいに捨てられたり、職が無くなり離縁されたり、犯罪者
とかな、とエスターは眉を潜めながら言つ。

「そういう奴らが居るから当然治安も良くない。殺し合いなんて毎
日だ」

オマエは嫌でもそんな毎日になる、とエスターは言つ。

「ま、俺が死なない程度には鍛えてやる」

そう言つてエスターは頭に乗せていた手を離した。

「ラク、常識講習第一回はこれで終わりだ」

今からはと言いながらエスターは距離を空ける。

「“喧嘩”の時間だ！」

エスターはそう言つて走つて来る。

「つ……」

いきなり始まつた“喧嘩”に驚きながらも俺は何時でも動けるよう
に体勢を低くする。

俺の元へと近づいて来たエスターはビュッと右手で殴りに来る。
俺は少し右に動き、エスターの殴りを避けてからエスターの足元を狙い
蹴る。

しかしエスターは俺の足に気づき僅かに飛んで交わす。

そしてエスターはニヤリと笑いながら着地し、俺を目掛けて腕を振り
落とした。

「ぐつ……」

蹴り終えた体勢のまままでいた俺はもうにその攻撃を受ける。「まだまだだな。一撃目を喰らわなくはなつたが、攻撃し、交わされてからの一撃目が甘い」

だが成長としては速い方だ、とエスタは呟つ。

「次、行くぞ」

わざわざ立ち上がりとエスタは言つて俺から距離をとつた。

「むう……」

“喧嘩”が終わつた時にはエスタは何事もないのに対し、俺はボロボロなのがいつもだつた。

「まだまだ甘い」

そう言いながらエスタはクシャクシャと俺の頭を撫でる。

「さ、飯を取りに行くぞ」

そう言いながらもエスタは俺を見ながら笑つていた。

（…………せつたい）

せつたい、いっぱいなべつてやる！

俺はいつの間にか先に歩いているエスタに向かつて駆け出した。

「エスター・ジオ」

俺はふんふん鼻歌を歌いながら絵を描いていたエスター・ジオに問いつ。

「なんだ？」

「作中の“喧嘩”ってあれは格闘を教えていたんだよな？」

「あー……まあそうだな」

だが、まあ傍から見たら喧嘩っぽいからかいつ呼んでいたんだ、とエスター・ジオは言つ。

「別に実技練習でも良い……よな？」

「…………あ」

それもやつだな、とエスター・ジオは呟く。

「でも、まあ、喧嘩の方が覚えやすいし」

どつでも内容に変わはないからな、と黙つてからペタペタと絵を描きはじめた。

「あ、ところでオメエは誰だ？」

「…………今更？」

「教えない」

俺はニヤリと笑いながら告げる。

「教えたって別に」「じゃ、またなー」おい！オメエ！－

(…………あれ？) ジンジンと太陽が照り付ける中、俺はエスタと一緒に食料（動物か人間）を探している時だった。

(…………きのせいかな？)

ちこさくて、きらきらして、つすごいそらをはなす、なんかぼわぼわしたかんじがつたわる。

それはビュンビュンと不定期に、しかし物凄いスピードで飛んでいる。

そして、あらあらとしているそれには嘘があった。

(…………とり？)

俺は隣でキヨロキヨロと辺りを見回しているエスタの服をグイグイと引っ張る。

「えすた、あれ」

なに？とビュンビュン飛ぶやつを指しながら聞く。

「ん？…………何の事だ？」

そう言つてエスタはキヨロキヨロと指差した辺りを見る。

「あれ！」

俺は指を飛んでこるとこを的確に指差す。

「…………何もないぞ？」

暑いから何か幻覚を見たんだな。少し木陰で休もう、とエスタは言って俺の左手を掴み木陰へと歩く。

(…………えすたにはみえないのかな？)

あんなにもきらきらしているのに。

ドサリ、と木陰に着いたエスタは座る。

「ほら、ラクも座れ」

俺はエスタの言つ通りに座るが、田ばずつとあのキラキラを追つていた。

(.....あー！)

キラキラがジンジンと俺の近くへとやって来る。

(1 2 3 4 5)

（アリス）

俺はあと僅かなキラキラへと必死に手を伸ばす。

あ
「

「ひぎぢちやつた……」

(あと、すこしだったのに)

マサニラの四百九

「いたのににげた」

「そいか」

閉じた。

(つかまえたかつたな……)

とモヤモヤした気持ちのまま二口二と横になる

横になつてから、上を見上げた時だつた。

いた

生に於ては、いわゆる「シナリオ」の類に、

(……でもどうかない)

精一杯手を伸はしても全然足りなくて
空を切るばかり

奄はレーベの腕を下す。

「さわりたいな……」

備はホリヒと咲く

それがあのキラキラにも聞こえたかは分からぬがビュンビュンと

もうスピードで下りてきてちゅーん、と俺の手の上に留まつた。

「うわあ……」

手に乗つたキラキラはよく見て見ると羽は長いが体は小さくて丸く、鋭く嘴が伸びてゐる鳥だつた。

俺の手に乗つたキラキラの鳥は先程みたいに逃げる事はせず、長い嘴を長い羽へと当てて羽を整えていた。

（触つても……大丈夫かな？）

そろそろと手を伸ばし鳥に近づける。

そして、そつと触るとフワリとした感触が伝わつた。

「うわあ……」

その感触が気持ちよくて、一度、二度と撫でて行く。

俺が二コ二コと笑いながら撫でていてもキラキラの鳥は嫌がる様子を見せせず羽を整えている。

「きれい……」

綺麗なキラキラの色に見とれながらも俺は満足するまで撫で続けた。

「またねー！」

隣でいびきをかき始めたエスタを無視し、満足するまで撫でた俺はキラキラな鳥から手を離す。

キラキラな鳥は手を離した瞬間にビュンと何処かに去つて行つた。

「えすた……」

俺はクルリと振り返りエスタの元へと向かう。

「えすたー！」

エスタの元へと着くなり俺は大きな声を出しながらブンブンとエスタを揺する。

「えーすーたー」

「…………んあ？」

ああ、ラク……と言いながらエスタは目を擦り、起き上がる。

「寝てたのか……」

ボリボリと頭を搔きながらエスタは言つ。

「まだ陽はある……か」

空を見ながらエスタは「」と呟いた。

「ラク、行くぞ」

そう言つてエスタは立ち上がつた。

「今うるつけば鳥か鬼くらいはいるかもしけん」

最も、陽が暮れるまでだからな、とエスタは続ける。

「陽がオレンジ色で一部が沈み始めたら“家”まで戻つて来い」
迷子になつたら動くなよーとそう言つてエスタは駆けて行つた。
(はやく、いかないと)
じゃないとかえれなくなる。

俺は食料を見つける事と同時に帰る事を意識しながら駆け出した。

「今回あいつは休みだそうだ。えーっと今回は……」

「作中にあつたキラキラについて?」

俺は紙を見ながらああ、と貰つた作品を読み始める。

「多分……エスター・ジオが見えていないからスニージェットだと思つけど……」

俺はペラリと貰つた作品をめくる。

「丸くて羽が長い。くちばしも長くて素早い……スニージェットの特徴と同じだね」

「……スニージェットは魔法生物で親・子世代にはもついない生物だ。スニージェットは丸い鳥で動きが素早いためマグルに見る事は出来ない」

だからエスター・ジオには見えなかつたんだよ、と付け加える。

「……俺らが死んだ後からはスニージェットはスニッヂの代わりとしてクイディッチに使われたりして滅んだ。因みにスニージェットはとても脆いから握り締めるだけでブチリと死んだんだよ。だから俺も何回か聞いたんだけどスニージェットを握り

パラリと紙が落とされる。

「“それ以上は止めて欲しい”
“まいや。またなー”
一番これから楽しいんだけ

「……ん？」

俺がエスタと暮らし始めてからかなりの時間を共にしたある日、エスタは目を細めながら言つ。

「エスタ？」

俺はもう、綺麗に話せるようにもなつたし、獲物を取る事も、最近は人を殺せるようにもなつた。

「……いや、何だか今日は人が多いなと思ってな」

「……人が多い？」

俺は眉を潜めながらエスタが見ている方向に顔を向ける。

（百……近くは人がいるかな？）

“荒れ果てた荒野”に人が来ないわけではない。しかしそれは此処に住むことになる奴らしか居ないので一月に一、二人くらいしか居ない。

（あんな人数で来るなんて……）

まるで何かを駆除するみたいだ。

「まだ、遠いが……」

ポツリとエスタは言った。

（…………あれ？）

よく見れば全員が緑やら青やら赤やら色々な色を纏つていてズキズキと鋭く感じるのもあればコラコラとしたのもある。

（…………？）

これは……何なんだるう？

「おい、ラク。行くぞ」

俺の思考を遮るように不意にエスタが声をかけた。

「行く？」

「今は遠いがこっちに来るかもしけん」

そうなればあの人数に殺られるだけだ、とエスタは言つ。

「オマエも強くなつたが……一人ではダメだ」
だから逃げるぞとエスタは言つ。

「少し北に行く。あそこなら人が僅かに居る」
それに奴らがそこまで来ないだろう、とエスタは言い立ち上がる。
「分かつた」

俺は立ち上がり、すでに先を歩いていたエスタの元へと駆け出した。

「此処なら大丈夫だ」

エスタはそう言つて立ち止まる。

「さて……ラク、今日の食料はオマエに任せる」

俺は薪やなんか燃えそうな物を取つてくる、とエスタは付け加えて言つ。

「陽が暮れる前には此処に集合だ」

そう言つてエスタは地面に大きく丸の印しを書いた。

「ほら」

そしてエスタはポイッと剣を投げて寄越した。

「…………つと」

俺はそれをガシャンと両手で受け止める。

「じゃ、またな」

そう言つてエスタは駆け出して行つた。

（……今日は何にしよう?）

兎か鳥か……魚でも良いし、人間を捌いてもいい。
(出会つたものでいいや!)

俺はエスタとは逆の方向へと駆け出した。

（んー……）

ガサガサと音を立てながら俺は森の中を歩く。

（……動物がない）

いつもならよく見かける動物が今日はパツタリと見かけない。

（……人でも良いんだけどなー）

動物とは違い、殺すさいに煩く喚き場所が見つかりやすくなるがこの際それでもいい。

（……あれ？）

チラリと僅かに人影が見える。

俺は目をこらしそれを見てからニヤリと笑った。

（一人だ！）

一人ならば楽に殺れる。

俺は足音と気配を消ながらユックリと獲物に近づいていく。

「何なんだ？ あいつらは……」

近くにつれ、獲物が息を切らし苦しそうな表情で言つ男性だと分かった。

（男……）

俺は僅かに眉を潜める。

（男の肉つて固いんだよね……）

でも、お腹はいっぱいになるけど。

俺は隠れられる草むらで足を止め息を最低限にまで殺し、獲物が近づいて来るのを待つ。

「信じられねえ……何であんな事を……」

こっちの上は何をしているんだ、と男はボヤキながら隠れている俺の近くへと来る。

「あれじゃ、まるで

（今だ！）

俺はガサリと草むらから出て首を撥ねられるように剣を構える。

「俺達を……うわあ！」

男は草むらから出た音でこちらに気づいたのか驚いた表情をする。しかしそうさま警戒し、体勢を整えた。

俺はそんな男の懐へと向かうふりをし、男へと突つ込むが直前でクルリと回転し男の真横を通り抜ける。

だが、俺は通り抜けるさいに体重をかけ男の足を踏む。

「つて……」

男は眉を潜めそう呟いた。

俺はその隙を見逃さず、すぐさま心臓へ向けて突く。

「ぐつ……」

それは見事にグショリと心臓を貫いた。

俺はズルリと剣を抜く。

男は支えていた剣を抜いたからかドサリと地面に崩れた。

（確認しないと……）

俺は男に近づき首に手を当てる。

（…………うん）

ドクン、ドクンと脈が動いている様子は無い。

（殺れたね！）

俺は首から手を離し、スルリと方に男の手を俺の肩に回す。

「捌くのは……エスタに頼もう」

ズルズルと引きずりながら俺は歩き始める。

「重い……」

人は死ぬと体重が増えるのかな？

「むう～……」

あまりの重さに俺は肩から俺の手を下ろし、腕を掴む。

「よし！」

そしてそのまま俺は引きずつて集合場所まで歩いた。

「俺が休みから帰つて來たぜ！」

バターンと扉を煩く開けながらエスタージオは言つ。

「あー……派手に登場した所悪いけど今日はネタが無いから特に何もしなくていいって、作者からの伝言」

ペラリと本をめくつながら俺はエスタージオに向える。

「はああああああああああああああ

(……すゞ(こ音量)

「俺が此処へ來た意味は！？」

「無いな

スッパリと俺はエスタージオに告げる。

「嘘だろー！」

「嘘じやない。またなー」

俺はヒラヒラと手を振る。

「俺の出番がー。ー！」

「 もう充分出てるよ 」

「……エスタ?」

昨夜は俺の企み通りにエスタに持ち帰った材料を捌かせて食べた。
ちなみに朝食は昨夜の余り物だ。

「……ラク」

そんな朝食を食べ終わってからエスタはずっと眉を潜めている。

「あそこを見てみろ」

オマエならよく見えるだろう、とそう言しながらエスタは指を指す。

「……分かった」

俺はエスタの指指した方向を見る。

（あ……れ？）

そこは昨日と同じ様な集団がこちらに向かっていた。

（あの色も同じだ）

纏っている色も感じるのも同じ。

「エスタ、あれ昨日の……」

「……やつぱりか」

そう言ってエスタは俺を見る。

「今からなら間に合つか……」

「エスタ……？」

ポツリと呟いたエスタの言葉に俺は不安が過ぎる。

「ラク、オマエだけでも逃げる」

「……え？」

エスタは、どうするの？

俺がこの言葉を出す前にエスタは告げる。

「俺が此処の奴らと共に時間を稼ぐ。その間にオマエは逃げる」

「……やだ」

俺は、一人だけ逃げたくない。逃げるならエスタも一緒だ。

「ダメだ！！」

エスターは眉を潜め、鬼の形相で声を荒げる。

「今ならまだ間に合つ！－逃げろ！」

「嫌だ！－」

大きな声で怒鳴るエスターに俺は引かない。

「俺一人逃げるなんてしない！！」

「ちつ……我が儘もいい加減にしろ！」

今は一人でも逃げるのが先だ！とエスターは怒鳴る。

「それに昨日よりもあいつらは上へと上がつて来ている。恐らく奴らは一時的な殺しみたいなもんじゃなく、此処にいる俺ら全員を殺す予定だ」

子供だらうが容赦ないだらう、とエスターは言つ。

「…………それでも、やだ」

俺は震えながらもハツキリと言つ。

（だつて……俺が逃げても……）

エスターが言つたように皆殺しに来たならばエスターは死んでしまう。

（それは…………嫌だ）

「…………震えながらよく言つもんだな。いいから早く…………」

エスターは急に表情を変え舌打ちをする。

「やけに早いな。もう無理か」

そう言つてエスターは俺をつまみ上げる。

「いいか？もうオマエが逃げる時間もない。逆に逃げてる間に殺される」

エスターは真剣な顔で、話す。

「だからオマエが出来る事は声を出さずに、気配を消すだけだ」
いつもと同じようにしていれば運が良ければ気づかれずに助かるだろう、とエスターは付け加える。

「…………いいな？何があつても出でてくるな。声を出すな。気配を消せ！」

そう言つてエスターは横の茂みへと俺を投げた。

「ふきゅ」

ズシャと俺は顔から地面に着地する。

（痛つ……）

涙目になりながらも俺は草影で見つかりにくそうな場所を探す。

（あつた！）

その場所へと俺は座り、エスタ達が見えるように草むらを少しだけ分ける。

（エスタ……）

俺は搔き分けた小さな隙間へと顔を向けた。

「……来たか」

エスタはポツリと呟いた。

「部長、此処で最後ですかね？」

「ああ。あちらの大臣から聞いた話ではこの集落で最後だ」
全く、何で俺達がこんな事を、とあいつらはエスタ達の存在がまるで無いように話していく。

「つたく……力があるからつて仕事を回し過ぎだろ」

「…………力だと？」

力、という単語にエスタの眉が寄せられ不機嫌そうになる。

「ぶーちょ、とりあえず……先にこいつら殺りません？」

エスタ達に気づいたのか先程とは違うやつが部長とやらに聞く。

「…………そうだな。ただし、向こうの要望で一人は残す事だ」

「「「了解」」」

部長、という奴以外が一斉に言つた次の瞬間にはあちらこちらに緑の閃光が広がつた。
そして緑色が収まつたかと思えば周りいた人間はバタリバタリと倒れていた。

「オマエら……魔法使いか……」

エスタは先程よりも憤怒した真つ赤な顔で叫ぶ。

（魔法……使い）

ならばあれが魔法か？

「死の呪文だ。最も、貴様は向こうからの要望で死の呪文では死な

ないが。Hスター・ジオ・ニー・ラング」

部長はそつ言つて、纏つてゐる薄い縁とは違つ薄い青色で田を書いていく。

「貴様には燃やすよつて言われてゐる」

最もその前に前座があるがな、と言ひながらも田は完成し中に変な模様を書いていく。

「前座？それよりも、何故俺の名を知つている」

エスターは不思議そうな顔をする。

「それ以上は言えないな。向ひつからのストップがかかつてゐる」始める、と手を振りながら言ひ部長の声で奴らは杖を振り下ろしながら一斉に駆け出した。

「つ……何をした」

普段のエスターならヒヨイヒヨイと避けるなり動くのに今はただ上半身をモハモハとしているだけだった。

(………… Hスター?)

「つ……何をしやかつた!」

「少し動きを止めただけさ」

逃げられないようにな、と部長は言ひ。

「魔法陣も完成したし……ちよつと良かつたな」

「何が……」

しかし、エスターが言い終わる前にあこつらはこつの間にか持つていた剣で四方八方から刺した。

「ぐつ……」

エスターは「ゴボリと血を吐き、周りの地面は赤い血へと染まつていく。

「……ではな、エスター・ジオ・ニー・ラング」

そう部長が言つた後に書かれていた変な模様は消え、代わりにエスターの足元から「オオオと炎が現れた。

「ぐ……つ、あああああああ」

エスターの、苦しそうな叫び声に俺はビクリと反応する。

(エスターつー)

俺は立ち上がりうつとし、立ち止まる。

「何があつても出てくるな。声を出すな。気配を消せ！」

（エスターは、こう言った）

俺だけでも、生きて欲しくて。

（~~~~~つ）

俺は、涙目になりながらもストンと座る。

「さて……一人だけ残さなくてはいけないんだつたな

残りは殺せ、と言い放たれる。

「「「了解」」」

そしてあいつらは剣を持ったまま、近くにいた奴らを斬つていく。

目の前には見慣れた赤い血が舞い、地面は赤い色で染まつっていく。

「うわあああ

そして斬られた時の叫び声が響き渡る。

（エスターは……）

エスターは生きると言つた。ならば俺は気配を、呼吸を殺さなければいけない。

だが俺の思いとは裏腹に力タカタと体は震えていく。

「……これで残り一人、か」

すでに地面は赤黒くなつてしまつた時に部長が言つ。

「お前ら、一人残つたからこれで仕事は終わりだ」

向こうも文句言わないだろう、と部長は疲れた表情で言つ。

「よつしゃーー！ぶーちょ、今回頑張つたから何か奢つてくれない？」

そう言いながらあいつらはザクザクとこの場所を離れていく。

「俺ん家の篳でいいならやる」

「えー？ぶーちょのところの篳、乗りにくいんだよなあ

「貴様……良い度胸だな？」

「わつ……すみません、ぶーちょ」

「大体その、ぶーちょってのは止めるー！」

「ぶーちょはぶーちょです」

ギャンギャンと響き渡るくらいな大声で言いながらもあいつは見え

ないところまで去つて行つた。

「こんなっ……こんな事を！」

魔法が使えるからつて、と生き残つただろう人が言つ。

「……許さない。たかがマグルでも、許しはしない」

ザクリと立ち上がる音が聞こえ、やがて殺氣を纏いながら去つて行く気配が伝わつた。

「…………エスター」

俺はフラフラと、エスターが居た……今はただの黒焦げな何かへと向かう。

そしてその近くでペタリと力無く崩れる。

「魔法使いつて……あんな事をするの？」

何も抵抗出来ない俺達に、と震え、涙目になりながらも言い続ける。

「ねえ……！ エスター、答えてよ！」

もう、生きれない事も分かつていい。

だって目の前にある黒焦げな何かはどう見ても人間ではないから。けれど俺は赤黒い地面へとだらけた手を土を削りながらも握りしめる。

「エスター…………！」

カラカラになりかけな声で、俺はエスターの名前を呼び続けた。

八話（後書き）

「あーーもう俺死んでんじゃんねーか

部屋に入ってきたエスター・ジオは叫び出す。

「もう此処でしか出番がない……」

ガクリと肩を落としたエスター・ジオ。

「……俺、此処でもエスター・ジオの出番後少しつて聞いたんだけど」

俺は渡された紙を見ながらポツリと告げる。

「…………は？」

エスター・ジオは信じられないのか間抜けな声を出す。

「まあ、噂だし……気にするなよ」

俺はポンと肩に手を置きながら適当に慰める。

「俺とオマエしかいないのに噂なわけないだろー！」

ガウと噛み付いてくるエスター・ジオに俺は自分が思っている事を告げた。

「本編で死んだから此処でも解雇されたんだろ」

「解雇されないじゃねえええええ」

「…………はつ」「
エスターが殺されてから数日後、俺は“荒れ果てた荒野”から出る為に歩き続けていた。

「…………もう、少しだよね…………？」

辺りを見回しても異臭を放ち始める死体と赤黒い地面しか見えず何処までが“荒れ果てた荒野”なのか分からぬけれど。

「でも…………此処から出ても…………」

何をして良いのか分からぬよ…………

「…………まあ、出てからでいいや！」

今はとにかく臭い此処から出ないと！

俺はそう意気込み、駆け出した。

「はつはつ…………ぐえ…………あれ…………は？」

田が暮れ始めた頃、ずっと走つたり歩いたりしていた俺の前には今、地面に印されている赤い線があつた。

「…………？」

この赤い線は何だろ？

俺はポリポリと頭をかきながらじつと赤い線を見る。

（…………まあ、いいや）

俺はヒヨイとその赤い線を越える。

（…………行こう）

俺は振り返りもせずに駆け出した。

日が暮れ、夜になつても敵を警戒しつつ進んだお陰か日が上り人々が活動する時間に俺は初めて“街”へと来ていた。

(……………人がいっぽい)

こんなにも集まつて何をするのだろう?

キヨロキヨロと見回しても人しかいない。

「うわっ…………汚つ」

「何処の子供よ…………」

周りからはポツリポツリと汚い、や親は何をしているのかしら?…と言ひながら俺をジロジロと見てくる。

(……………に?)

何で俺をジロジロと見てくるの?

俺はジロジロと見てくる人間達を恐る恐る見ていく。
皆、エスタやあそこに居た人達とは違う目で……異物を見るような目で俺を見下ろしている。

(つ…………ん…………で?)

俺はジロジロと見られている理由が分からず、ジリジリと後退していく。

「おい、誰だ?こんな所に餓鬼を置いたのは
後ろから聞こえた怒りを含めたような低い声と共に襟首を捕まれ足
が地面から離れる。

「…………此処にいる奴らではないか」

「ウ、エルトさん!」

俺を捕まえている奴がめんべくそつて言つた後に大声が響いた。

「……………フィルか。どうした」

「荒れ果てた、荒野でつ」

茶色の髪で灰色に近い黒の目を持つた男性が息を切らしながらも告

げる。

「あそこにいた皆……殺されているのです」

「…………何だと？」

「どうこう事だ、と俺の襟首から手を離す気配を見せずにそいつは問う。

「“荒れ果てた荒野”の向こう側の村へ行っていたんですが……そこに“荒れ果てた荒野”から血まみれの奴が来たんです。そしてそいつは『俺は荒れ果てた荒野から来た……お前達からしたら落ちこぼれだ！だが、今は関係ない！なぜなら……俺達はマグルだからって魔法使いに皆殺されたからだ！』とかツラツラ話していました。そして最後に共に復讐しようとも言つていきましたね」

「そいつの言う事は正しいのか？」

「…………そう思いますよ」

思う？ 確実ではないのか？ とそいつはザワザワと周りが騒ぎ出したなか問う。

「そいつも殺されました。復讐どうたら言つた後に縁の閃光で呆気なく……」

今、向こうの村ではあいつが言つた事を真実だと受け止め、殺氣立つています、と茶色髪は眉を歪めながら言つた。

「…………こりあそこに居た奴らが落ちこぼれだとして、殺されたのは同じマグルだからな」

それに微かに家族なり縁を持つていた奴もいる、と聞いたしなと近くに居たせいか小さくポツリと言つた言葉も聞こえた。

「…………こんな事をしている場合ではない

そつ言つて俺を掴んでいた手を離す。

「ぶつ……」

結構な高さから落とされた俺は変な声を上げ顔から地面にぶつかる。

「向こうを止めなければ……魔法使いと殺るなんて無駄に死ぬだけだ。ファイル！」

「分かつてます」

俺が涙目になりながらも顔を上げた時には周りはバタバタと駆け出していく誰も俺を見てなんかいなかつた。

（誰も、見てない）

俺はホツと胸を下ろしながらも立ち上がり、いち早くこの“街”から出るために駆け出した。

九話（後書き）

「今日は結構遅かったな」

ズズッと紅茶を啜るよつに飲みながらエスタージオは言つ。

「作者が話しが思い付いかないつて言つて逃げていたからな」

紅茶は啜りながら飲むのではない、と軽く注意をしながらも俺はペラペラと本をめくる。

「あ、そうだ」

「あ？」

「エスタージオ、お前の解雇が確定したつて作者からの伝言だ」

俺はペラリと貰つた紙をエスタージオに見せる。

「…………嘘だろ？」

「交代は…………外伝あたりだつて」

「…………」

黙つこんでしまつたエスタージオに俺は一ヤリと笑つて聞こえるよう口にさわる。

「次は誰だうね？」

それを聞いたからかどうか分からぬがいきなりエスター・ジオが叫びだす。

「……何で解雇おおおお」

「煩い……」

俺は耳を塞ぎながらエスター・ジオを蹴り飛ばした。

あれからあちからこちら色んな街へと入ったけれど“親”といつもの居ない俺は奇妙な目で見られる事が多かつた。また、邪険に扱われる事も多かつた。

「ほらっ、行け！」

そう言いながら僅かにパンをくれた人は俺の背中を押す。俺は何も言わずに僅かなパンを貰つた人に促されるままその場を去つた。

（今日は何処で食べよう？）

俺は街から出てキヨロキヨロと周りを見渡す。

「あそこにしよう！」

俺が目に止まつた場所、それは人間ならば近づかない切り立つた崖だつた。

「よつ……と」

ゆっくりと進んだその崖の先端近くに俺は腰掛ける。俺は足を布拉布拉とさせながら貰つたパンを取り出す。

「またこれえ……」

取り出したパンは、先端に向けて細くなり、かなり固いパンだつた。

「今日は……昨日よりは大きいかな？」

昨日よりは指一本分くらい大きい気がする。広げた手の平と見比べながら俺はそう思う。

「いつただきまーす！」

ニコニコと笑顔が漏れながら俺はパンにかぶりつく。

「んぐっ……ふあた」

グイグイ引っ張つたりギリギリ歯を左右に立ててやつとブツリと噛み切つた。

「…………」

そこからはひたすら噛みつづけパンを咀嚼していく。

「ねえ！」

「うう、

幾度となく咀嚼しやつと飲み込んだ頃、

真横から声をかけられる。

— — = h ?

(.....真横?)

真横からの声に驚き、俺は顔を向ける。

そこには俺よりもかなり大きい女の子が俯いてた。

たの
せして！

〔?〕

ホツリと咳したかと思へと鬼の形相で顔を上げ叫んだ。

ドンッと俺の背中を押した。

「……え？」

俺がそう呟くがその時は既に遅く、体はぼうり出されていた。

俺の叫び声と共に矢か矢と風を切る音が聞こえる中俺は先程戻った

場所へと目を向いた

(.....)

そこには嬉しそうに「元気」しながら去つて行く女の子が居た。
スウ…と体の何かが冷めていくような感覚がする。

(笑つて、た)

人が、落ちて いるのを見 て笑つ て いた。

()

「ウウウと風を切る音の中、俺の気持ちに恐怖はなかつた。

卷之三

卷之三

「ロジック一本が走面に沿つて掩はプロトコル機能を

「……と俺が北西に進む」と意図を失ふ。

(…………此処、は？)

少しずつ瞼を開けていくと、すらと青色が見えてきた。

(ああ…………そういえば)

何者かに落とされて……落とされて？

(何でそうなつたつけ？)

…………分からぬ。

(“荒れ果てた荒野”が何とか言つてなかつたつけ？)

いや、それはまだ前な気がする。

(んー……マグルがどうとか)

誰かが言つてた……よーな……

(…………誰だつけ？)

「…………分からぬ」

俺はゆっくりと起き上がる。

「知識ならあるけど……俺の名前とか」

今まで何をしていたのかが、綺麗に分からぬ。

(…………つ)

記憶を思い出そうとしたからかズキリと頭が痛む。

(いつ…………)

ズキリズキリと痛む頭に同じく痛む右手を無理矢理動かし抑える。

「あちらこちら痛い…………」

しばらく動くのは無理そつだな。

俺は右手がヌルリと血に染まっている事にも気づかずにただ空を見上げていた。

「うわあー……」

貢つたばかりの内容を読みながら思わず言葉が漏れる。

「女の子に落とされてる……」

「そいつあ間抜けだな」

フンッと鼻で笑いながらエスター・ジオは言つ。

「落とす奴もどうかと思つが落とされた方は間抜けだ」

そいつの気配に気づかなかつたって事だしな、とエスター・ジオは付け加えながら言つ。

「…………」

その言葉に俺はただ、黙るしかなかつた。

「ま、記憶を無くした様だしラクはもう無理だ」

俺も交代するし、後は文句言いながら残り少ないのを見るだけか、とエスター・ジオは言いながら寝転ぶ体制に入る。

「さて、寝るか」

「寝るな」

「お休みー」

俺の言葉も虚しくヒュスター・ジオは睡魔へと入ってしまった。

「……間抜け、かあ

俺は突き落とされたシーンをボンヤリと見ながら呟いた。

外伝・情報屋（前書き）

短いですが十話で一幕終わりです。

あ、一幕とはプロットに書いている一区切りみたいなものです。確か四幕+プロローグとヒローグだったかと。

また、外伝（この話しが含む）を一つ投稿した後に十一話を載せます。

「んー……?」

ただ今、エスターに言われて薬草を取つて来るよつに言われ森にいる

俺……ラクです。

「これは……なに?」

現在、俺の前にある物……白い、フワフワした物体。

(……食べ物?)

俺は手を伸ばし、ギュッと握りしめる。

『キヤンン!』

(キヤン……?)

甲高い声が聞こえたかと思えば、グルル……と威嚇をする声が聞こえガサリと立ち上がり白い物体の先が見えた。

「あ……」

俺が現在進行で握っていた物は白く、大きい犬の尻尾だった。

『グルルルウ』

俺はパツと犬の尻尾を離すが時は遅く、犬はこれでもか、ヒシワを寄せ警戒をしている。

『ワンッ!』

大きく吠えたかと思えば白い犬は噛み付かんばかりの勢いで俺田掛けて走つて来た。

「ごめんなさいいいいい」

俺は謝りながらも白い犬から逃げ出す。

『バウワウ!』

犬は許す気はないのか、スピードを落とさず追い掛けてきた。

『え……エスターアアアアアア!』

俺はエスターの名前を叫びながらエスターの元へと向かつた。

「エスター アアアア！」

最近やつと会話が出来るようになつたラクが俺の名前……いや、あだ名を叫んでいる。

（何をしたんだか……）

正直、自分が子供を拾うなんて天地がひつくり返るくらいに有り得ない事なんだが更に拾つた子供は何かと問題を起こしたりして正直疲れていた。

（やつと薬草を取つて来るつて事で離したんだが……）
俺はため息をつく。

（別にあいつを嫌つてはいるわけではないんだがな……）

ただ大人には一人になりたい時もあるのだ。少し前まで独りだったのによけいに。

「エスター アアアア」

たすけてー……と叫びながらラクはドタドタと俺の元へと来た。

「ラク？」

どうした?と俺は付け加えながら問う。

「い……いぬ」

「…………は?」

こいつ…………もしかして犬ごときで逃げてたのか?

俺は呆れながらも、あれ…………と言つてラクが指差した方を見る。

「…………でかいな」

白くてかなりの大きな犬がグルルルウと獲物を捕らえんばかりのスピードでこちらに来ていた。

（…………ん?）

あの犬、前もどこかで見かけたな……

（何処だつたかな……）

俺が昔の記憶を引き出そうとしている最中にラクが俺の後ろに回り

俺を盾にする。

「…………　おい」

俺はラクに問い合わせる。

「おれじゅむりい！」

ブンブンと首を横に振りながら俺の背中を押す。

（…………俺にしろ、と）

ため息をつきながら俺は犬を見る。

「…………さて、あれだけ肥えているなら」

晩飯に出来るな。

「ラク、今日は贅沢に犬肉だ！」

俺はニヤリと笑いながらラクにそう告げる。

「ちょ…………ちょっと待つて！」

（…………あ）

突如響いた声。だが俺はこの声を知っている。

「お前のだつたか。セーシュ」

「セーシュ？」

ラクが不思議そうに聞いてくるが俺は無視をする。

（あいつのなら食うわけにはいかないな）

俺は迫つて来た犬の体を掴みその上に座る。

『ギュル…………ウ』

苦しそうに鳴く犬に対して俺はニヤリと笑う。

「うわ～相変わらずな極悪な笑い方」

つてか、ボクのボスターに乗らないでくれる？ そう言つながらセーシュはゆつくりと俺達の元へと来た。

「…………お前、何処に居た？」

「ん～？ 少し左にある高台だよ」

エスター・ジオも知つてゐるでしょ？ とニヤリと笑いながら「こつは言う。

「エスター、このおんなのこだれ？」

ラクのこの言葉にブフウとセーシュは吹く。

「お、女の子……」

もう、そんな年齢じゃないのに、とか言っているが俺は無視をする。

「いっぽセーショ、情報屋だ」

だからここには気をつけや、と俺は付け加えながらラクに伝える。

だがラケは情報屋が分からぬのがコテンと首を傾げる。

卷之二

今にもラクの側に行きそうなセーシュに釘を刺す。

「え？…可愛い物には抱き着きたいじやないか？」

「だから話したんだ。…………いや、嫌われても良いなら抱き着け」
マリーナが俺を抱きしめる。

「それは嫌だなー」

そういうながらゼーシュはラクと距離を置く。

三

だからこいつは俺とオマエが一緒に居ても何も言わないんだよ、と俺は付け加える。

「そうそう！ 大抵は驚く君の知り合いでもボクだけは知っていたから驚かないんだよ！」

でも君が何処から来たのかまでは知らないけどね、とセニシエは咳いた。

（……これっても知らないのか）

（知らなーとなると……）

魔法界の者かも知れねえな。こいつは。

アーティストによるアートの発表や、アーティストの紹介など、アートの世界をより身近に感じてもらいたいという想いから、アートの発表場所としてアートギャラリーを運営するアーティストの活動を紹介する企画です。

「ここをどうにかしろ」
そう言いながら俺は指を今だ座っている犬へと指した。

「あ～……分かつたよ」

とりあえず下りてくれる?とセーシュが言つので俺は立ち上がり犬から離れた。

「ボスター、ステイ」

襲いかかるうと起き上がった白犬はセーシュが放つたその言葉にすぐ従つた。

「すごーい!!」

「でしょー?お姉ちゃんは凄いの!!」

キヤイキヤイ何やら話しながらもセーシュはラクの相手をし始める。(相変わらず仲良くなるのは上手いな)

あいつは誰だらうと仲良くなるのが上手い。それが老人であらうと、幼い子供であらうと変わらない。

俺はラクと馴染みつつあるセーシュに声をかける。

「おい、オマエは飯はどうする気だ」

自給自足なのだ。そんなにラクの相手は出来ないはずなんだが……そう思つて声をかけた俺に対し、あいつはこう言つた。

「え~…せっかく君に会えたし、こ馳走になるよ」

「あ、あ?」

ふざけんな、と言う俺にニヤリと笑いながら告げる。

「なんなら今日一日この子の面倒見るけど?」

君ならば食料取るの苦労しないし、自由な時間が出来るんじゃないかな?と奴は言い放つ。

「今日一日ボクが増えても問題ないでしょ?」

ラクも一緒に居たいよねー?とセーシュは笑顔でラクに問つ。

「うん!!」

ラクは笑顔でこう言つた。

「……仕方ないな。そのかわり一日じゅうよ」

俺はため息をつきながら告げる。

「もつちろーん」

セーシュはしてやつたり!と言わんばかりの笑顔で言つた。

(……この糞女)

狙つてやがつたな？

俺は殺意が立ちながらも食料確保の為に一人から去つて行つた。

外伝・情報屋（後書き）

「よつしやー俺のターンが来たぜーーー！」

「そしてこのコーナーでも消える、と」

ガツツポーズをしていたエスター・ジオは、ギロリと俺を睨む。

「確かにそうだが引き継ぎの奴はまだ来ていない」

「いや、来るけど」

「ポポと紅茶を注ぎながらも俺は答える。

「…………は？」

「確かにもう来るはずだけ」

「来るんじゃねええええええ」

エスター・ジオが煩く叫ぶ中、コンコンとノックが聞こえる。

「入つて良いよ」

俺がそう告げると失礼しまーす、と良いながらもカツカツと「ひらりへ向かう足音が聞こえた。

自分の記憶が無いまま数ヶ月、俺は一人であちこちを移動していた。
(…………さむつ)

今まで何をしていたのかは分からぬが、戦闘や薬草、動物・人の殺し方や捌き方などの変な知識だけはあつたので一人でうろついても死ぬ事は無かつた。

(…………風が出てきた)

季節は冬に入ろうとしているのがビュウビュウと聞こえる風は冷た

い。

「…………町に入らないと」

町に入れば建物があるから少しは風が防げる。

「今度の町で冬を越さないといけないかな?」

最近、薬草が見かけなくなつてきた。

(無いわけじゃないけど…………)

夏よりも数が少ないので。

「急がないと…………」

日が暮れるまでには街に入りたい。

俺は街に向けて歩くスピードを上げた。

「つ、疲れた……」

ヘナヘナと無事日が暮れるまでに入れた街の入り口で脱力する。

(後は…………今日の食料だけ)

「人が良さそうな人が居れば…………」

食料を惠んでくれるんだけれど。

(誰か居ないかな)

俺は気力を振り絞り辺りを見回しながら歩き始める。

(うーん……見る限りは)

居ないようだな……

そう思いながら視線を左側から前へ戻した瞬間だった。

ドンッ

(あ……)

周りに気を向けていたせいか前の人物に気づかずにはぶつかってしまった。

「す、すみません!」

俺は慌ててぶつかった相手に謝る。

「あ、あ？どうしてくれんだ？ガキ！」

そう言いながら相手は俺の胸倉を掴み持ち上げる。

(う、わっ……)

急な浮遊感に驚きながらも持ち上げられた事により相手の顔が見える。

(男……?)

ぶつかった相手は顔が整っていて、一見女人に見えなくはないが、何となく俺の勘が男だと告げる。

「てめえみたいな汚いガキにぶつかったせいで服を洗濯しなきゃならねえじゃないか！」

俺は洗濯が一番嫌いなんだよっと男は言い捨てる。

「ちやーんと、責任取るよな？」

男はそう言いながら怪しく笑っていた。

「ぐつ……」

バキイと嫌な音が辺りに響く。

「おーつと？ 今ので何処か骨が折れたかもな？」

「悪いね、 と言いながらも男はニヤニヤと笑う。

「大分スッキリしたし、 次で終わらせてやるよ」

そう告げた男はニヤリと笑いながら俺のお腹めがけて蹴りを繰り出した。

（これで……最後）

普段なら避ける蹴りも、 男から言わせればばぶつかつた代償らしい。

そう言われば避けるわけにはいかなくて、 今まで大人しくやられていたのだ。

ドゴオと見事に当たつた音と共に俺は吐血する。

「げほつ……」

吐血する俺を男は見下しながらこう告げる。

「こんなものか。 次はぶつかんじゃねーぞ」

そう言って男はクルリと俺に背中を向け去つて行つた。

「いつ……」

ズキリと痛む体を僅かに動かし俺は横になる。

「とんだ災難……」

ぶつかつてしまつたせいで今日は飯抜きになつてしまつた。

（血業自得だけど……）

はあーと傷にさわらないようこ息を吐く。

「…………あ」

いつの間にかどんよりと灰色になつていた雲からふわりふわりと白い点々が下りてきた。

「…………？」

下りてきた白い点々が頬に当たるも当たつた感触はなくただ冷たい小さな水となつていた。

「…………綺麗」

灰色の中から次々と現れる白。

それは俺がこの数ヶ月には見た事のない景色で、俺は思わず両手を伸ばす。

「…………うわあ

俺の伸ばした手にも次々と白が降り注ぎ、まるで汚れている俺を白で染めるかのようだつた。

それからどれくらい時間が経つても、俺は灰色の空を見上げ続けた。

外伝・雪（後書き）

「こんにちわー、今日付けで配属されたアルフォードです」

赤い髪に青い目の少年がそこに居た。

「ニックネームはアルです」

……何だかつい最近蘇った記憶にいたな。こんな奴。

「アル？ オメエラクに似てるな」

「ラクを知ってるの！？」

「あ、ああ。少しだけ一緒に暮らしたが」

「……ラクは双子の弟なんだよ」

今はビリじているんだろう？ と言つアルの言葉に俺は目を逸らす。

「…………アルが来たからエスタジオはこれで御役目御免だな」

正直アルの方がやりにくいが……仕方が無い。

俺は一人を遮りエスタジオに花束を押し付ける。

「一幕からは俺とアルでのパートナーを担当だ」

「みんな、よろしくねー」

「俺、これだけええ？」

煩く叫ぶエスター・ジオを俺は蹴り飛ばした。

日を覚ましたら記憶が無くなっているという驚くべき体験をした日から数年、俺はブラブラと各地を移動している。

俺の日常はこれと言つたような目的も何もなく、ただ一日中食料を探して（盗んで）その日をやり過ごす。けれど冬近くになれば別だ。冬近くになると薬草や動物が減るため、その日の食料とは別に冬までに持つような乾燥食を集めなければいけないのだ。

そうしなければ、凍え死ぬだけではなく餓死する確率も高くなってしまう。

俺はそれを当たり前の様に知つていて、理解もしていたしちゃんと実行もしてきた。そうでなければ今生きてはいないし、実際に餓死してしまった子供や大人を見てきてもいる。

「…………」

冬がどれ程厳しいのか分かつていた、はずなのに……

「何も、無い……」

（ああ……俺の人生短かつたな……）

たつた数年しか生きてないのに……

町中を歩き回り、疲れてしまつた俺はフラフラと人気がない脇道へ入り膝を抱える。

（そもそもこの冬が予想外だつた）

こんなにも、早く冬が来るなんて……

冬の始めこそはまだ余裕があつた。けれど冬が早く来たつて事は冬の期間はいつもより長いつて事だし、食料もいつもより少なかつた。（ここ数日何も食べてないな……）

最早感覚が無くなつた膝をボンヤリと見ながらそう思つ。

（餓死が先か、凍死が先か……）

俺が今いる町は周りから“風の谷”と呼ばれている。

聞けばこの場所はその名の通りによく風が吹くらしい。それが夏だ

ろうが、冬だらうが変わらない、とも。

（凍死が先……か）

ビュウビュウと容赦なく吹く冷たい風を受けながら俺は目を閉じる。

目を閉じてからどれくらいの時間が経ったのかは分からない。長かったのかもしないし、短かったのかもしない。俺は突然声をかけられたのだ。

「……生きてるのかな？」

まだ何とか意識があつた俺はスッと目を開く。

「あ、生きてた」

最初に飛び込んで来た景色は白い髪に、灰色の目。ヘルリと笑った顔、だつた。

良かつた、と言いながらひょいとそいつは立ち上がる。

（…………男？）

「た…………れ…………？」

掠れた声で俺は問う。

「うん？俺はスーパーだよ」

そう言いながらスーパーは俺に背を向けしゃがんだ。

「…………？」

これを、どうしろと？

俺はキヨトンとスーパーを見る。

「乗つて？」

スーパーは振り返り苦笑しながら告げる。

「乗…………る？」

「あー……分からぬいか」

そう言つたかと思うとスーパーは俺に背を向けたまま俺の手を引つ

張った。

「うわっ……」

俺は引っ張つられ、スーザーの背中とぶつかる。

「よし！」

(…………?)

スーザーがそう言つたかと思つと俺の足を持ち、俺が背中にいる状態で立ち上がつた。

「！？」

「あ、ゴメン、ゴメン」

ビックリした？とスーザーは聞いてくる。

「…………なんで？」

けれど俺はそれに答えず、問う。

「ん？」

「なんで、こんな事をする？」

「あー……それはな

ザクザク、と音を立てながらスーザーは歩き始める。

「捨いたいから拾つたんだよ」

「…………は？」

思わず俺は口が開いたまま固まる。

(今、なんて言つた？)

捨いたいから拾つた？

(…………頭がおかしいのかもしね)

“何処の子供か分からぬ”俺を拾うなんて、頭が壊れてる。

「だつてさ、お前こんなに冷えてるし、きっと結構長い時間あそこにいたんだろ？」

固まつて何も答えない俺にスーザーは一人、話していく。

「…………今の大人達は孤児だなんて見向きもしない。子供が殴られようが、蹴られようが、一人でポツンと座つていようが見て見ぬ振り。まるでそれが当たり前のように通り過ぎて行く

「でも、それは全員じゃない。俺がそだつた様に運よく拾われる

子供もいる

孤児だつた俺は拾つて貰つてから180度世界が変わつた、と思つとスーザーは続けていく。

「凄く今の両親には感謝している。それと同時に俺は自ら決めている事がある」

「見て見ぬ振りをする奴らとは違つて俺は、『見て見ぬ振りをしない』だ」

「見知らぬ子供が一人いる。ならば“無視”ではなく、俺は手を差し延べる」

お前はそれの一人目だな、とスーザーは言う。

（……何だろ？）

俺はフンワリと、寒いはずなのに暖かい何かを感じる。

「あ、お前名前は？」

「…………ない」

「…………そつか」

名前無いと不便だよな、とスーザーは呟く。

「まあ、両親と一緒に考えるか。そろそろ家に着く頃だし」

見えるかな?と言いながらスーザーは右斜め前方にある雪に覆われた家を指差した。

「あそこだ。帰つたら先に風呂だな」

こんなに冷えてるしね、とスーザーは白い息を吐きながら言つ。

「…………ふろ?」

俺がスーザーの言葉を繰り返すとスーザーは少し驚愕したよつて聞いた。

「…………お風呂、知らない?」

「うん」

「じゃあ俺も一緒に入らないとね…………」

何もかも知らないだらうなあとスーザーは呟く。

「まあ楽しみにしててよ

そう言いながらスーザーはニヤリと笑った。

十一話（後書き）

「今回から」の「パートナー」に入るアルです

ペコリとアルは頭を下げる。

「それで……君の紹介をしてくれるかな？」

その言葉に内心面倒だな、と思いつつ口を開く。

「ゴドリック・グリフィンドールだ」

よろしく、と言しながら俺は手を差し出す。

「よろしく……」

ガシッと凄い勢いで掴んだ後に、ゴドリック呼んでいいよと言しながらアルは言った。

「……構わないよ、アル」

「良かつた」

アルがやつを言つたといひで俺達は手を離す。

「とにかく、この話しあは？」

アルはペラペラ本編の紙を揺らしながら書つ。

「……………」

全くもつて主旨がないアルに俺は聞き直す。

「だから、」の話は誰の話?」

「俺だけど」

今更ながらの質問に若干引きながらも俺は答える。

「え、ええ～！！」

アルの叫び声が煩く響いた。

「ただいまー」
そう言いながらスーザーは辿り着いた家の扉をドカッと蹴つて開けた。

「「お帰りーー」
ズカズカと上がつていくスーザーは先程声が聞こえたどこのへ向かつて声をかける。

「母さーん、お風呂入れるー?」

「入れるわよ?」

その声とともにバタバタとこちらへやって来る音が聞こえる。
「珍しいわね。スーザーがすぐにお風呂に入るな……」

そう言いながらひょつひとつと薄い紫色の髪に青色の皿をした女性が現れた。

「…………?」

女性は俺を見るなり固まる。

「母…………さん?」

どうしたの、とスーザーが恐る恐る声をかける。

「あ、何でもない。お風呂ね?入れるわよ」

その子も一緒?と女性は俺を見ながら尋ねる。

「うん。孤児らしくて風呂とか分からないうて言つ」

「…………そつか」

(あれ…………?)

今は二口一口と笑つているけれど俺を見て一瞬だけ、悲しい顔をした。

(…………何かした?)

何処かで会つても…………ないし。

俺がコテン、と首を傾げている間にスーザーは二つの間にか風呂場へと入つていた。

「はい、脱いでー」

「？」

「いや、服を脱ぐんだよ」

キヨトンとしている俺に、スーザーは俺の服を掴み脱がそうとする。

「…………え？」

脱ぐ 脱ぐ 脱ぐう！？

（それはつまりこの体を見せるって事だよな……？）

「心地悪しかしながらなくてはいいよ」

「はーはー、脱ぐだけ

「六」 効サニ流元

俺の叫び声がお風呂場で虚しく響いた。

「暑い……」

初めての風呂から上がった俺はモクモクと湯気が上がり体が暑かつた。

「あー…悪い。長く漫からせてたみたいだね」
そう言いながらスーザーは俺の後ろに立つた。

「どうして、着ないと湯冷めするよ？」

「ぶう

「あ、悪い。俺の子供頃なんだが……大きかつたみたいだね」

「あ、悪い。俺の子供頃なんだが……大きかつたみたいだね」

モゾモゾと落とされた洋服から俺は脱出する。

「えーっと、俺のは……」

俺はキヨロキヨロと見回しているスーザーを横田で見ながら貰った洋服を見る。

(……大きいな)

バサリと上着だらう洋服を広げてみるが……明らかに俺が着たらダボダボになるだろう。

「スーザー、俺の服は？」

「ん？ ああ、母さんが洗濯するから心配するな」

捨ててないから、と言つてスーザーは「onsoonso」と着替えを続ける。

(……上着だけでいいや)

ズボツと大きい洋服に俺は頭を突っ込む。

(……やつぱり大きい)

ゴソゴソやつて上着を着るてみると足は膝まではいかないが隠れているし、手は袖から出でていない。

「……上着だけで良かつたみたいだね」

スーザーは苦笑しながら俺の方を見て言ひ。

(俺がチビみたいに言ひ)

「……」

モヤモヤした俺は何も言わずに眉を潜める。

「じゃ、行こうか」

しかしスーザーはあつさつと言つてひょいと俺を抱える。

「い、行く？」

(何処にい？)

スーザーのその言葉にモヤモヤは飛び去り俺はスーザーに再度問いつ。

「父さんの所だよ。まだ会つてないでしょ？」

「…………あ」

「やつぱり」

これから一緒に暮らすから顔くらいは合わせておかないと、とスーザーは言つ。

(…………あれ?)

なんだか一緒に暮らすなんて聞こえたんだけど。
疑問に思った俺は聞き返す。

「暮らす?」

「うん。拾つたからね」

サラリとスーパーは言いながらトントンと移動していく。

「まあ……反対はされないだろ? し、気楽に考えていいよ」

そう言つてポンポンとスーパーは俺の頭を軽く叩いた。

「君がスーパーが拾つた子供?」

スーパーと共に部屋に入った俺は席に着いた瞬間、スーパーの父親
だろう夕焼け色の髪で薄い緑色の目を持つた男性に二コリと笑顔で
言われる。

俺はいきなりの笑顔で驚きながら怖ず怖ずと頷く。

「……………あ」

男性はフンワリと先程との笑顔とは違つ優しい顔でそつと囁く。

(……………あ)

フンワリとした感覚と同時に、薄い赤色が溢れ始める。

(これ、何だろ?)

「……………どうした?」

コテン、と首を傾げた俺に男性はそう問いかける。

「……………なんでもない」

「そ……………うか」

そこからスーパーと父親、母親で俺の話をしていた。

俺はこの家族の中に無理矢理入った感じなので黙つて見続けていた
が……ウトウトと瞼が下がってきていた。

（こんな、ところで……）

せめてこの家族の話し合いが終わるまでは起きておかないと。
だが、一人でいた俺は眠い時に寝てお腹すいた時に食べる生活だつ
たので我慢など出来るはずもなくどんどん顔は下がっていく。

（お……きて、ないと……）

けれど俺はぼやけた三人を最後に暗闇へと身を任せた。

十一話（後書き）

「ハグの過去ーー?」

アルは驚いた様に問ひ。

「うん?」

何か問題でもあつたつけ?

確かに俺の過去はグロこと言つか、悲惨と言つか、残酷と言つか…まあ、あまりいいものでは無いけれど。

驚くようなものか?と俺は首を傾げながら問ひ。

「だつてあのホグワーツを建てたハグの過去だよー?」

書類も何もない、貴重な過去なのにー?とアルは問ひ。

(……あの?)

あのホグワーツ?

(一 体ど のべら い 美化 し て いる ん だ ら つ)

「うわーー。」れ初めてある。

読まないとーと物凄く嬉しそうにキラキラしながらアルは言ひ。

「探しはあるとゆつ子」

俺はそんなアルに引きながりも答える。

「ありがとーーー。」

ウキウキと探し始めたアルを横目に俺は今回の分を破り捨てた。

ふ、と目を覚ますと天井が目に入った。

(…………天井?)

ギシリと音を立てながら俺はベットから起き上がる。

(…………ベット?)

確か話し合いをしている最中に寝たん……だよね?

俺はキヨロキヨロと周りを見てみると今使っているベットとは違う
空いたベットが隣にあり、部屋のすみにはおもちゃ……だらう物が
置かれていた。

(スーザーの部屋……だったのかな?)

俺はトーンシとベットから足を下ろす。

「あ、起きたー?」

ガチャリとドアが開く音と共にスーザーが部屋へ入って来る。

「結構睡眠時間長いんだね」

今もう毎だよ、と言いながらスーザーは近づいてくる。
俺は気になる単語を繰り返し聞く。

「…………毎?」

「うん。下りて来ない君を心配して俺が来たんだよ」

父さんと母さんも心配していたね、とスーザーは言しながら俺の頭
を撫でる。

「ま、起きたからいいや。毎ご飯があるから下にやせんと下りて來
るんだよ?」

そつ言つてスーザーは手を話し部屋を出て行く。

(毎、ね)

まさか毎まで寝てるなんて。

ギシリ、と音を立てながら俺はベットから下りる。

(とつあえず顔は出さなこと)

トンと立ち上がり俺は部屋を出て行った。

「起きたんだね。おはよう」

いや、もう毎だからおはようではないかな、と言いながらも父親はむしゃむしゃと毎飯を食べていた。

「はい。これで足りるかしら？」

足りなかつたら言つてね、と言いながら料理を置いてくる母親。今までとは180度違う態度に俺は一瞬固まる。

（……あ、そうか）

これがきっと“家庭”と言つもんなんだり。

そう納得した俺はユックリと昨日座つた席へと向かう。カタンと椅子を引いて座り、田の前の料理を見る。

（えつ……と）

これはどうやって食べるのかな？

（今までみたいに手で食べていいのかな？）

でもそれならこの黄色い水みたいな物は……ん？

（これ、さつきも見た……）

黄色い水の隣にあつた銀色の物を見た俺は顔を上げて父親を見る。

「ん？ 食べても構わないよ？」

遠慮なんてしなくて良いから、と言う父親の手元を俺はじつと見る。そこには先程見た銀色で丸い奴が握られていた。

（これを使うのか）

俺は同じ丸い銀色を持ち、料理を見る。

（えーっと……？）

これを使って何を食べれば良いのかな？

「これはこのスープに使うのよ」

ひょいと薄い紫色の髪を揺らしながら母親が黄色の水を指しながら

言つ。

「スー……プ？」

「そ、そのスープですかって飲む食べ物よ」

美味しいから食べてみて、と母親は付け加える。

俺は言われた通りに持っているスープ……だけ？それをスープの中に入る。

スープにスープが入るのを確認してから恐る恐る口へ運ぶ。

(……………あ)

フンワリと甘くて美味しい。

「美味しい？」

母親が二口だと微笑みながら俺に問つ。

「……………美味しい」

俺はポツリと呑んでからスープへと手を伸ばしていった。

時間がかかつたが見よが見真似で昼食を食べ終えた俺は満足感に浸つていた。

「あ、昼食食べ終えたんだ？」

ひょっこりとリビングに入つて来たスーパーは俺を見ながらそう言つた。

「じゃあこれから暇だよね？俺と遊ばない？」

(……………遊ぶ？)

たつた数年間だけれども、その中でも初めて聞いた単語だった。

(……………遊ぶって何？)

俺はキヨトンと首を傾けた。

「うう……」

涙目になりながらも結構苦労しているんですね、と言つアル。

俺は何も言わずに横目で見ながら積み重ねた本へと手を伸ばす。

「…………」

新しい本を読みはじめて五分経つたくらいにバンッと机を叩きながら俺の名前を呼ぶアル。

「あんなの悲しすぎるよー何でエスター・ジオは殺されなきやならなかつたの？魔法使いってそんなに偉いの？俺、そんなに知つている訳じゃないから教えて！馬鹿でも分かるようにな！後……」

まるでマシンガンのように次々と話していくアル。けれど、少し頭を前に戻して欲しい。

先程アルは机を叩いた。

そしてその叩いた近くには俺が積み重ねた大量の本。

それらは今、怪しくグラグラと揺れていた。

「出来れば一から良いかな？」

「…………アル」

「何？」

「今、凄くこの積み重ねた本が危ない」

「うわあ！？」

グラグラとしている本を指差して教えて上げれば驚くアル。

「でも、何もしなければ平氣だから今のうちに席を」

……聞いていないのか、血迷つたアルは手を伸ばして上の数冊を持ち上げた。

当然、少しは持ちそうなバランスだった本はバランスを崩して俺の方へと落ちて……いや、降つてきた。

ドサササ……と落ちる音が埋もれかけている俺にも聞こえるくらい響いていた。

キヨトンと首を傾げて いる俺をいきなり引つ張つて外へ出たスーザー。

「今日は此処から少し離れている場所に行くけど……大丈夫?」
散々引つ張られた後に幼いからかスーザーは気遣うように俺に聞いた。

「大丈夫」

伊達に今まであちらこちらウロウロしていない。子供ではあるが、体力ならばそこら辺の子供よりはある……はず。

前を進んでいるスーザーはそっか、と呟いた後に言つ。

「辛かつたら言つてね」

(……え、辛い?)

それ程までの場所へと行くのだろうか?

「ねえ、スーザー。辛いってそんなに」「ああ、行こうか……」

「……」

俺の言葉を遮つた挙げ句に急ぐよつて歩き始めるスーザー。

(崖とかあるのかなあ)

俺はスーザーに気づかれないように小さくため息をついた。

「此処だよ

スーザーが辛かつたら、とか言ったからてつくり崖があるかと思つていたのにただ平坦な……いや、坂はあつたが結構な距離を歩いただけだつた。

「うわあ」

スーパーが俺を連れて来た場所は“風の谷”が一望出来る高台だつた。

「綺麗でしょ？此処は町を一望出来るけれど町からは見つけられないよう上手く隠れている場所だよ」
まあ、隠れている分狭いし生い茂つているけれど、とスーパーは話していく。

「町を見る分には支障はない」

俺はスーパーの話を聞きながらも眼下に広がる景色に見入る。

「…………凄い」

「気に入ったみたいだね」

良かつたと言いながらスーパーはドスンと座る。

「ほら、座つて見たら？」

そう言って俺の腕を引っ張り無理矢理座らせる。

「うわっ…………」

俺は引っ張られるままにドスンと尻をつぶ。

（いつ…………た…………）

俺は怪我をしていないか振り向きながら腰を摩る。

「スーパー、別に引っ張らなくても」

怪我が無い事を確認した俺はスーパーに話しかけながらひょいと顔を戻すとそこにはニヤリと何かを考えているような笑顔でスーパーがいた。

「綺麗なのは町だけじゃ無いんだよね」

そう言ってスーパーはドスン、と俺に乗つかかってきた。

「…………え？」

俺はいきなり突っ込んで来たスーパーに耐えられるわけもなく、ドサッと倒れる。

「スーパー「ほら、上見てよ」…………」

ニヤリと笑いながらスーパーは俺の言葉を遮り言いつ。

（…………上？）

俺は渋々スーパーへと向けていた顔を空へと向ける。

(..... あ)

見上げた空は雲一つない快晴。

「青い.....」

「今日は快晴だからね。寝転がって見るのも綺麗だと思つたんだよ。いつ.....と、と漏らしながらもスーパーは俺の上から下り、隣に寝転がんだ。

「今日は仕掛けを確認して遊ばつかと来たんだけど.....まあ、ノンビリするのも良いよね」

スーパーは顔を横に向けニッコリと笑いながら言った。

「あ、いたいた！」

あれから太陽が真上に来たくらいにそろそろ仕掛けを確認するか、とスーパーは言つて起き上がつた。

俺も何時までも寝転ぶわけにはいかないからスーパーと共に起き上がり、座つた。

俺が座ると同時に立ち上がつたスーパーはスタスタと仕掛けを見に行つていたのだ。

「今日は豪華になるよ！」

仕掛けにウサギがいたからね、と掘まえているウサギを振り回さん勢いでスーパーが駆けて来る。

「ウサギが死にかけるよ？」

俺は横目でそれを見ながら声をかけた。

「大丈夫だよ。死なないと食べられないし」

「.....」

(..... 大丈夫？)

それは食べるから死んでも良いと言つ事なんだろ？

キヨトンと首を傾げる俺に対しスーザーはあーーと何かを思い付いたのかこう言つた後に俺に告げた。

「君も仕掛けを作りたいの？」

どう捕まえたのか仕掛けが気になるんだよね?と言しながらスーザーは俺の手を掴む。

「なら、一緒に仕掛けよう!」

仕掛け場所は少し先だからね、と言つてグイグイ引っ張つて行く。

「スーザー、俺「大丈夫、俺も一緒にから失敗しないよ!」……」

スーザーはキラキラな笑顔で俺の言葉を遮る。

反対に俺はキラキラな笑顔で言い切るスーザーに対してブチリと青筋を立てていく。

「スーザー、少しばは人の話を「あ、着いたよ」……」

……うん。決めた。

(絶対に今度は俺が振り回してやる!)

人の話を聞かない苦労を味わえ!!

そう決め込んだ俺は怪しく笑いながらスーザーを睨みつける。しかし俺を見たスーザーはさらにニッコリと笑つて言つた。

「そんなに楽しみにしていたんだ!」

なら大掛かりな仕掛けでも作ろかな?と言つてスーザーは短刀を取り出す。

「まずは……枝を鋭く削つて貰おうかな?」

そう言いながら短刀を持つスーザーは極悪人みたいな顔で笑つていた。

十四話（後書き）

「だ……大丈夫？」

アルが心配そうに眉を潜め、言つ。

「……誰のせいだこうなつたと？」

ついわつき、本の山から脱出出来た俺は不機嫌に告げる。

「……ごめんなさい」

「…………別に外傷はないみたいだし、良いよ」

素早く告げなかつた俺にも非はあるかも知れないし。

「それよりも」

「……？」

俺はションボリと落ち込んでいるアルにサッと先程貰つた物を見せる。

「これ、なーんだ？」

「最新の！！」

ガバッと先程とは180度打つて変わりまるで犬の耳と尻尾がついていてフリフリ振っていてもおかしくないくらいに喜ぶ。

（俺の過去の何が楽しいんだか……）

正直、過去の印象は八割と言わずに人をひたすら斬りまくつただけなんだけど？

（……他に何かしたつけ？）

サラザール達ならばまた別の回答が来そうだが俺は斬りまくつた、しかない。

（まあ……人それぞれ、と言づから）

俺は早く、早くと言づアルに最新の奴をため息つきで渡した。

シユツと素早く受けとったアルはすぐさま読み始める。

「……紅茶でも飲むか」

特に興味がない……いや、全てを知っているから「かも」もつ見たくない俺は紅茶の用意をする。

「今日は……カモミールがダージリンか」

他には……アッサムとかも良いかもな。

「ん……」

確か、茶葉も貰つたよな……

「緑茶、にしようかな？」

普段あまり飲まない物だけれど……美味しかったっけ？

「ま、飲めば分かるか」

俺は貰つた緑茶の茶葉をつまみ、容器へと入れた。

此処数日、俺はスーザーを連れてあちいらじめらへと引つ張つて行つた。だが、流石に俺よりもスーザーの方がこの近くの地理は詳しく何時も俺が振り回される毎口だつた。

（そう、だから……）

ブツリと頭にきながらも俺は別の方法で仕返しをすれば良いことに気づいた。

（今日こそこは仕返しを……）

何だか少し目的が変わつた氣もするが今はもうスーザーに一泡吹かせる事にしか頭に無かつた。

ゴソリと俺は近くで作った泥団子を手に持つ。

「スーザー、今日で仕留めやる！」

俺はそう言いながらバタンと扉を蹴り飛ばしスーザーの部屋へと入つて行く。

「……ん？」

最初はキヨトンとしていたスーザーだったが俺の手に持つて泥団子を見てニヤリと笑つた。

「今日はお出かけじゃないんだね」

そう言いながらもスーザーも周りにあつた本を手に持つ。

「振り回すのは無理そつだつたから」

だから近所の子供をヒントに作ったんだ、と付け加えながら俺はジリジリと足を動かしながら適度な距離をとる。

「たまには人の苦労を味わえ！」

「振り回さないと家から出ないだろ……」

スーザーの言葉を最後に俺は泥団子をスーザーに向かつて放つ。しかしスーザーはひよいと本を泥団子の予想した軌跡上へと持ち上げる。

その予想は当たりバンと泥団子は本へと当たる。

「甘い……」

そつ言いながらもスーザーはブンツと俺へ向けて本を投げて来た。それを見た俺は瞬時に左へと避けながら泥団子をスーザーの足元へと投げる。

スーザーはニヤリと笑いながらもひょいとジャンプしながら重そうな本を投げて来る。

俺の投げた泥団子がビシャと床についた音が響く中俺はスーザーの投げた本を避け泥団子を投げた後にスーザーの元へと走る。スーザーは着陸した途端にひょいと泥団子を避けながら走つてくる俺へ顔を合わせた。

ベシャリと不発した泥団子の音を聞きながらも俺は床に泥団子を一つ落とし、もう一つをスーザーへと投げる。

（これで、全部使つた……）

スーザーはひょいと顔を動かしてそれを避け近いて来る俺をニヤリと笑いながら迎える。

俺はニヤニヤするスーザーをひょいとジャンプをし男の急所目掛けで蹴り出す。

「残念」

スーザーは短くこう言いガシリと俺の頭を掴む。

「体重が軽いから持ち上げやすいんだよね」

そう言つてギリギリ頭を掴みながら俺を持ち上げていく。

「此処に来て初の悪戯は失敗だね？」

スーザーは俺を顔の前まで持ち上げたと同時にニヤリと笑いながら告げた。

俺はその言葉に舌打ちをする。

（スーザーがあの落とした泥団子を踏めば……）

でも、スーザーは踏まないだろう。あんなに分かりやすい罠にかかる奴なんていない。

（正々堂々と、じゃダメだね）

今みたいに繰り返しになるだろう。

(頭を使わなきゃ)

正直、頭を使うのは苦手だけれど、そうしないとスーザーに仕返しが出来ない。

俺がグルグルと考えている間、スーザーは俺を掴んだまま扉へと向かっていたらしい。

「大体正面から来たら簡単に勝て」

しかしスーザーは最後まで言わなかつた。いや、言えなかつた。なぜならズルリとスーザーの体が傾いたから。

「…………あ」

ポソリとスーザーが言つた頃は遅く、スーザーはドスンと派手に倒れた。

（…………え）

いきなりスーザーが倒れた事により俺の意識は脳内から現実に戻る。

（…………？）

俺はスーザーの上に乗りながらも倒れたスーザーの足元を見ると駄目元で置いた泥団子が潰れた姿があつた。

（馬鹿？）

内心少しスッキリとしながらもスーザーの馬鹿さに思わずため息を漏らす。

「い、たた……」

ムクリと頭に手を当てながらスーザーが起き上がる。

俺は痛そうに少し眉を潜めながら起き上がつたスーザーの顔を見て思わずニヤリと笑う。

「お前…………こんな勝ちに入らないからな」

「なら、今度も悪戯？でスーザーに仕返ししてやる」

「今度も？いや、今度で、だろ」

お前の悪戯にひつかかつたりはしないから、と鼻で笑いながらスーザーは言つた。

「大丈夫。スーザーは馬鹿だから」

「…………馬鹿？」

誰が、馬鹿だつて？とスーザーが脅すように言つた瞬間だつた。

「ちょっと、二人とも！！」

扉の方から大声が飛んで来た。

「仲良く遊ぶのは良いけれど、こんなに汚してどうするつもりかしら？」

俺が扉の方へと顔を向けるとそこには眉をこれでもか、と言わんばかりに吊り上げ手を組みながら如何にも怒つている様子である母親が立つていた。

「こんなに部屋を汚して……誰が掃除をするのかしら？」

その言葉と共に俺はキヨロキヨロと部屋を見回す。

部屋は泥まみれの本まみれだつた。壁には何箇所か泥が着いていたし、床には泥の上にスーザーが投げた本で散らばつている。

「…………

部屋を見回した俺はスーザーへと視線を向けるとスーザーの顔は青ざめていた。

「…………二人とも、下へ来なさい」

二ツ口りと笑つた母親の言葉に俺は普通に、スーザーは顔が青ざめたまま従つた。

十五話（後書き）

「…………あの、た」

「ん？」

アルはつい先程まで読んでいた最新を見せながら言つ。

「悪戯好きになつたきつかけってもしかして……今回ので？」

今回？

今回、今回……あースーザーに真つ正面から泥団子ぶつけたやつか。

「あー……どうだらうな。まあきつかけ、か？」

あれからスーザーを仕留めるために幼いながら頭を使うようになつたし……

「…………きつかけだな。多分」

「…………純粹な「ゴド」が汚れたああああ

（…………は？）

俺はポカーンとアルを見る。

「アル、頭大丈夫か？」

「大丈夫。だつてあれが無かつたら……悪戯好きにならなかつたら
顔良くて頭良い、綺麗なままだつたのに！！」

悪戯好きにならなくて顔が良くて頭が良くても人を殺している時点
で綺麗じやないよな？

それともアルの頭では顔良くて頭が良い人間は人を殺してもそれが
無かつたようになるのだろうか。

「スーザー……ゴドが許しても俺は許さないからな」

(……)

……本当に俺はアルと双子？

(……俺、ここまで変じやない)

人を殺していても、馬鹿でも、ここまで変ではない。

俺はフルフルと頭を横に振る。

(……に、人間育つ環境が違うと双子でも性格違うって言つしなー)

気にしないでおこひ。こんな少しづれているのが双子の兄つて事は。

今だにスーザーに対して叫んでいるアルを横目にそう結論を出した
俺はお菓子へと手を伸ばした。

あの悪戯の後、母親から数時間に渡る説教を喰らつた俺とスーザーはピタリと家の中で悪戯をするのを止めた。

それから数日が立ち雪が積もつた今日、俺はスーザーと父親、母親の四人で外に出て雪合戦と言つ遊びをしていた。

「くそつ……！」

ゼーハーゼーハーと息を切らしながらスーザーは悔しそうに叫び。 「何で当たらないんだよ！」

雪合戦とは固めた雪を人に当てるという遊びらしい。凄く気分がスッキリとするし、人当ても前回みたいに説教が無いという実に素晴らしい遊びだ。

そこで意氣揚々と俺はスーザーを狙いバンバンと当てていく。当然、スーザーも俺を狙つて雪を放つがヒヨイヒヨイと避ける俺に雪を当てる事が出来ていなかった。

「それはスーザーよりあの子が素早いからでしょう？」

あー、やつぱり歳なのかしら？と言しながらも母親は雪を手に持つて固めていた。

「そういう母さんだつてあまり当たつて無いでしょ？」

父さんだつて母さんと同じくらに当たつて無いし、と言しながらスーザーは反対側に居る父親を見る。

「俺ばかり当たつてない？」

「スーザーが遅いからだろ？」

呆ながら言う父親も雪を投げる準備をしていく。

ゴソゴソといくつか固めた雪を足元に置き、俺は手に置いた雪玉の一つを取る。

「スーザー、覚悟！」

俺はスーザーに雪玉を見せながら叫び。

「……もう来やがった」

スーザーは嫌そうな顔をしながらも雪玉を持つ。

「一発くらいは当たらないとな」

ヒョイと俺の投げた雪玉を避けながらスーザーは言つ。

俺はスーザーの言葉を無視し、ドンドン雪玉を投げていく。スーザーは数発当たりながらも避け、俺に向かつて雪玉を投げてくる。

（簡単だね！）

今までずっと雪が積もるうが泥沼だらうが歩いて来たのだ。雪には慣れてるし、脚力だつてついている。

ヒョイと素早く左へと避け、五、六発の雪玉をスーザーに向けて放つ。

「ひつ……」

スーザーは悔しそうに舌打ちをしながらも避けていく。

（…………ん？）

チラリと視界に見えた白い何か。だが、それは何であるかはすぐに分かった。

（雪…………）

誰が投げたのかまでは分からなかつたが俺はすぐさまその場にしゃがみ込んだ。

俺がしゃがみ込んだ瞬間、雪玉が頭上を通り。

（危なかつた）

（隙あり！）

俺が立ち上がった瞬間にそう言ひながらスーザーが物凄い量の雪玉を俺目掛けて投げてきた。

「うわ…………」

運良く俺とスーザーとの距離が余り離れてなく、またスーザーが俺がしゃがみ込んでいる時に投げたので急いで後ろに下がるだけで雪玉に当たりはしなかつた。

「これで終わりではないからね？」

そうニヤリと笑いながらスーザーが先程の倍ある量の雪玉を投げて

きた。

(…………え?)

その多さに一瞬固まつたがすぐさま俺は避けながら玉が来な「うに後退していく。

(いつ作ったんだろう?)

先程といい、今といい、俺がしゃがみ込んでいる間に作ったにしては量が多くすぎる。

走りながら俺はチラリとスーザーの方へと顔を向ける。

(…………あんなのあり?)

そこには父親と母親がスーザーの近くで一人仲良く雪玉を作り、スーザーはそこから雪玉を奪っていた。

(二人がスーザーと組んだああ)

いや、あんなの反則だろう。三人で一人を狙うなら幾度となくあつたけれど、一人が雪玉を作り一人が投げる共同作業なんて最早こちらに雪玉を作る余裕は無い。勝つなんてものは当然無理だし、全ての雪玉に当たらないなんて事も無理だ。

(運良くまだ当たってはないけれど)

それも時間の問題だろう。

チラリとスーザーを見ると物凄く良い笑顔で雪玉を投げている。

(…………あれを見たら当たりたくないんだよね)

当たりたくないならば雪玉に当たりずにこれを終わらせる方法を考えなければいけない。

(うーん……相手に降参をさせずに終わらせる、か)

俺が降参をしても……確実に降参が伝わる前にかなりの雪玉に当たるだろ?。

(…………いや、あつた)

俺が降参を言葉に出さずに告げる方法が。

(家に入れば良い)

あそこは俺もスーザーも手は出せない。つまりあそこに入れば自然に雪合戦は俺の降参で終わる。

(他には……俺がこの雪合戦に勝つか)

この雪合戦は最早俺対スーザーになつてゐる。

スーザーを負かせば一人は雪玉を作らないだろ?。……多分。

(そこは……運だね)

後は……どちらを選び行動するか、だ。

(どうしよう……)

俺は走りながら、どちらを選択するか考えている時だつた。

俺はチラリと見えた物に反応し、駆け出す。

(あれは?

チラリと見ただけだつたが雪にまみれながらも僅かに見える棒があつた。

(あれは武器になる)

ザツと雪煙りを上げながらも落ちている場所で止まる。

そして俺は急いでそれを握り、掘り起こす。

(ほ……箒?)

掘り起こしたそれは古びて捨てられただらう箒だつた。

(……仕方がない)

俺はジクジクと刺さりながらも箒を括られてある藁のギリギリまで持ち、柄の部分を雪を投げるスーザーに合わせる。

(もう勝つしかない)

此処から家に行くにはもう無理があるし、それにこれを取つた時点で俺の頭に“降参”は無かつた。

(……行くか)

俺はビュンビュン飛んで来る雪玉の中、スーザー田掛けて駆け出す。

「……う、わつ」

バシイと俺に当たりそうだつた雪玉を箒で切る。

切られた雪玉はパララ……と雪みたいに崩れていつた。

「危なかつた」

「今にその危なかつたが沢山増えるよ」

「その前にスーザーに勝つてやる!—!

そう俺は叫び、一步駆け出した瞬間だった。

「ぶへつ！！」

ガクンと足を躊躇い、バターンと音をたて盛大にこける。

「…………」

「…………」

「…………」

（…………うう）

お、起きにくい。

今、この場所には先程とは違ひ静寂が広がっていた。

誰も話さないし、雪玉を投げる音も作る音も聞こえない。

（…………うううううう）

誰か、助けて下さい。

十六話（後書き）

「良いなー…」

「……どうした?」

最新を読みながらアルは言つ。

「俺も雪合戦やりたい」

「…………」

一人で?いや、そんな事アルは言わないだろ?。

(多分……)

「スーザーとあ……エスター・ジオも呼んで後は『ゴドに任せゆよ』

(やつぱり……)

四人では無理がある。

(だからって呼んでもなあ……)

ハリーにロン、ハーマイオニーに俺、ライル、ソーラスにアルにス
ーザー、エスター・ジオ……

(うん、九人しかいない)

後一人……誰か居たか？

「……アル、諦めろ」

「えーー？」

俺がそう告げると嫌そうに言つアル。

(.....)

正直、雪合戦はしたくない。人数を集めるのも面倒だし、年なのが体が動かしにくい。

……まあ、一番の理由はそんな気分じゃないから、だけ。

(まあ、それでも負ける気だけはしないがな)

だが残念ながら雪合戦は今度、だ。

俺は杖を取り出し、振るつ。

「うわー…雪だ」

残念ながら本物ではないけれどこれでも十分楽しめるはずだ。

(本物降らすには時間がいるしな……)

時間は沢山いるし、魔力も当然沢山いる。

疲れるだけなので出来れば一いちらで満足して欲しい。

(でも、多分本物の雪が降らせられるか聞くだらうか。……)

聞かれる前に退散するでしょう。

俺は喜んでいるアルに気づかれないように行った。

あの雪合戦は結局俺が父親に起こされ抱っこされた、といふ事で終わった。

俺自身は抱っこにも抵抗があつたのだが起き上がる精神力は既に無く、なされるがままスーパーの大爆笑を聞きながら家へと帰つた。それから数日は大人しくしていた。外に出てスーパーに仕掛けたり、家にて物や玩具で遊んだりせずにただ起きて飯食つて寝るの繰り返しだった。

（それだけだつたのに、なあ）

俺は現在、熱を出していた。

頭が痛いや頭が熱いよりも体中が凄く熱い。まるで体の中に炎があるみたいに頭から指先まで体温は上がつていた。

「大丈夫？」

薄い紫色の髪を揺らしながら母親が俺の顔を覗く。

「……う、ん」

生返事をし、ボンヤリと眺めていた俺にペタリと冷たい手が額に当たる。

「まだ熱いわね」

その手があまりにも冷たくて熱を出している俺には一度良かつた。（きもちいい……）

トロリと瞼が下がつてくる。

「……お休みなさい」

二口ひと微笑む母親を最後に俺はプリリと意識を失つた。

「…………ん？」

薄ぐ、目を開くとそこに見えたのはぼやけた緑色だった。

「あー…起きちゃったか」

そして聞こえてきた声。

（スーザーの……父親？）

何故、彼が部屋に？

俺はパチリとハツキリ目を覚ます。

すると目の前には緑色で円がありその中に変な模様がある不思議なものと父親の顔だった。

（…………あれ？）

父親の周りにある薄い赤い奴が緑色の所に行って色が変わっている。

「…………？」

キヨトン、と俺は首を傾げる。

それを見た父親が苦笑しながら告げた。

「明日、話すよ」

だから今はお休み、と囁つ言葉と共に俺は瞼が閉じていった。

スウと気持ち良く目を覚ました時にはもう暁で。

昨日みたいに熱は出ていなかつたから俺はベットから下り下へと向かつた。

「おはよう」

どうやら今日は仕事が無いのかニコニと微笑みながら父親がリビングに入るなり声をかけてきた。

「…………」

「…………昨夜の事だよね」

話すからまず座りなさい、と父親は告げる。

俺は素直に従い向かいの椅子に座る。

「まず……魔法使いを知っているかな?」

「……にくそに父親は言つ。

「……単語だけなら」

俺がそう言つとそつか、と言つて昨夜みたいな円を書いていく。

「魔法使いとは魔法が使えるものだよ。こうやってマグル……普通の人間には出来ない事をするんだ」

そう言つた瞬間にその円からボッと炎が現れた。

「……！」

いきなり現れた炎に俺は驚く。

（また……）

けれど驚いたのはそれだけではない。昨夜と同じような事が起こつていてた。ただ違うのは炎が出る前に赤い奴が緑の円に集中した事だけ。

「……その、赤い奴と緑の円が色が違うのは何で?」

分からぬならば聞けばいい。そう思った俺は父親に問う。しかしそれを聞いた父親は驚いていた。

「やつぱり見えるのか……」

そうポツリと言つて父親は話し始める。

「赤い奴は俺の魔力だよ。魔法の源とも言えれば良いかな?……これは普通、見えたりはしない」

見える以外にもいるかな?と父親は急に聞いてくる。

「……フンワリとする」

やつぱり、と言つて父親は話し出す。

「それは滅多にいない能力だ。魔力が分かる……視覚でも感覚でも。それを鍛えれば何処に誰がいるかすぐに分かってしまう」

魔力は一人一人違うからね。特に魔法生物とかとは違うが出来てゐるから、と父親は言う。

「……違う?」

俺はそう問うが父親は何も言わずにこう告げた。

「……それは誰にも話してはならない」

「…………何で？」

次々に変わりながらも進んでいく話しに混乱しつつも、俺は頭に入れていく。

「先程、滅多にいない能力、と言ったよね？鍛えれば何処に誰がいるかすぐに分かつてしまう、とも。それは魔法使いにとつてどれだけの金を払おうが欲しい能力だ」

それがあればマグルか魔法使いかすぐに分かるし、魔法使いの特定も出来て素早い魔法生物も見つけられるから、と父親は言つ。正直、魔法生物が何なのか分からぬ。

けれど見つけてはいけないものなのだろう。

真剣な顔で話す父親を見て俺は強くそう思った。

誰にも話してはならないよ、ともう一度言い父親は話しを戻した。

「話しが随分ズレてしまつたけれど……俺が魔法を使えるって事は魔法使いつて事は分かるかな？」

俺はコクンと頷く。

「昨夜、俺が君に使つていた魔法は……」

父親は途中で話しを切り、凄く言いにくそうな顔をする。

そして決意をしたような顔で口を開いた。

「昨夜、君に使つた魔法は君の中にいた悪い物を取り除く魔法なんだよ」

だから熱を出してないだろ？と父親は言つ。

「君が目を覚ますとは思わなかつたけれどね」

そう言つて父親は苦笑した。

「…………」

正直、よく分からなかつた。分かつた事と言えば魔法と魔法使い、普通の人間をマグルって言つた事と俺に魔力が分かる珍しい能力があるって事とそれを話してはいけないってだけ。

理由なんてよく分からなかつたし、昨夜の事についても何だかモヤモヤする。

けれど聞いてももう答えてはくれないだらう。父親は既にこの場を去ろうとしているのだから。

「はい、昼食よ」

時期を見計らつていたのだらう。母親はカタンと昼食を出してきた。モヤモヤモヤしながらも俺はその昼食に手を伸ばした。

十七話（後書き）

「……こんなものかな？」

カタンと羽ペンを机に置き、手を真上へと伸ばし筋力を解す。

「……そう言えれば静かだな」

アルが魔法を教えて教えて煩いから初めからなら、と魔法生物のテキストを作っていたのだが……

（初めの頃は周りをグルグル回つて側に居たんだが……）

何処へ行つたんだ？

「教えて、教えて言つていたのにな」

いざテキストが出来たら本人は行方が分からぬ。

（ま、そんなに広くは無いから良いけど）

ガダンと椅子から立ち上がりアルを探しに行く。

「…………あ

十分もせずにアルを見つけた。

「寝てたのか……」

毛布もかけずにアルは寝ている。

「たくつ……」

ヒョイと手を振り毛布を取り寄せる。

「寝るなら毛布くらいかけろ」

ま、俺はかけて寝ないけど。

ソッとアルに毛布をかけ、俺は机へと向かった。

十八話（前書き）

この中に有名な童話を取り上げました。

と、言つても冒頭や終わりしか出てませんし、そこは自分で考えた
ものです。

そのまま使つた単語もありますが丸々使用したのは題名くらいです
ね。

それでも色々と引っ掛からないか不安ですが……

だ、大丈夫かなあ……

季節はドンドン真冬へと入り、此処最近ずっと雪が降り続いている。俺は別にこのくらいの雪には慣れてるし、寒いのも平気なのだがスーザーは寒いのが苦手らしく部屋に籠つてばかりいる。スーザーやその両親以外の知り合いがない俺は必然的に家に居るしか無くなつた。

（暇だなー…）

なるべく家事などを手伝つて暇を潰しているのだがそれでも時間が空いてしまう。

「うー…………」

ペタリと机に手と顔をくつつけ、俺は呟く。

「本でも読む？」

ダラーと行儀が悪い俺を見て母親が声をかけてきた。

「…………本？」

本、という知らぬ単語を聞き俺は顔をあげる。

「ええ。本は政治、農業、天文学、ルーン文字学とか色々な勉強や物語とかが書かれてあるの」

魔法についての本も何処かにあるつてあの人に聞いたわ、と母親は洗濯物を整理しながら言う。

「此処には絵本とか……後はスーザーが読んでいるような難しい本しか無いけれど」

「…………絵本？」

「読んでみる？」

母親の問いに俺はコクリと頷く。

「分かったわ。ちょっと取つて来るわね」

そう言って母親はパタパタとリビングを出て行つた。

母親はすぐに水色と緑色が入つてている本を持って來た。

「あつた、あつた」

そう言いながらガタンと椅子を引き俺の隣に座る。

「懐かしいわね」

ドスン、と本を机の上に置く。

本の表紙には黄色で“Jack and the beanstalk”と書かれてあつた。

(
.....
?)

ヨミエ、と首を傾げた。

「よく読むのよ」と豆の木が答えた。

「アラミタルダベラ魔ソリナニテ新ニシテ」

新編 通鑑 卷之三

た。

「ジャックはお母さんと幸せに暮らしました」
パタンと母親は本を閉じる。

- 1 -

……どうした？ 面白がった？

1 それより 母親に

ジャックと豆の木……………だつたつけ?

面白い、という事が良く分からぬけれど集中して話しさ聞けた気

俺は口を開きゆっくりと話していく。

「……面白い、が分からぬいけど」

「集中して聞いた」
「良かつた」

安心したのかホッと息を漏らしながら母親は言った。

「読み聞かせなんて初めてだつたから、少し不安だつたけれど、夢中になれたのならば嬉しわ、と母親は嬉しそうに頬を上げ笑う。「でも他に絵本とか無いのよね……」

「あの人があしとか上手かつたから買つてなくて、と母親は言つ。「スーパーも絵本と言つよりかは児童書をすぐに読むよつになつたし……」

何冊か絵本を買おうかしら、と母親はため息をつきながら呟いていく。

俺は隣でぶつぶつと呟いている母親の服を恐る恐る掴み、引っ張る。「問題はお金よね。スーパーが良く……どうしたの？」

母親は呟く事を止め視線を合わせる。

「…………もう、一度」

「ん？」

「…………もう一度、読んで？」

そう言つて俺は絵本……ジャックと豆の木を指差す。

「…………ええ、分かったわ」

母親は二口りと笑いながら言い、絵本を俺が見えるように開いた。

「イングランドに住んでいるジャックは」

先程と同じ様に、文を指で追いながらゆづくりと読んでいく声が響いた。

十八話（後書き）

「まずは……ピクシーからやろうか」

俺はそうアルに告げて話し出す。

「ピクシーとは小妖精つも言う。ピクシーは悪戯好きで魔法使いだろうがマグルだろうが襲うためマグルでも知っている奴が多いな。最も……素早いからマグルが捕まえた事はないが。……ああ、素早さに困っているのはマグルだけではない。低脳な魔法使いならば魔法をかける前に杖を取られ魔法を使われたりする。そろそろ奴らは自身が思っているほどピクシーは賢い事を学ぶべきだな。そんな色々な事を起こしているピクシーだが先程も言ったように素早くて賢い。だが、それだけではなくて奴らは力もある。一匹で人一人なら余裕で持ち上げられるな。そのままシャンデリアやフックなどに引っ掛けたりする。後はこれはマグルでの事例だが」「あのさ、ゴド」「……何？」

怖ず怖ずとアルが言ひ。

「長くて覚えきれない」

「…………そつか」

カツカツと俺はアルに近づく。

「アル、知っていた？頭に刺激を送ると記憶力が上がりやすいんだよ」

だから頭に少しづつ刺激を『えて記憶したりするな、と俺は続ける。

「最も脳細胞はどんどん死ぬがな」

そこまで言つて俺はニヤリと笑つ。

「『』？」

「大丈夫。叩き過ぎたくらいでは死なないから」

そう笑顔で告げてアルの頭を叩く。

「だつ……」

何つ……とアルが言うのを俺は笑顔で遮る。

「一からやろうか?」

「…………はい」

何だかガクガク聞こえるけど……『氣のせいだな。

俺は深く息を吸い込んだ。

厳しい真冬を追加されて増えた絵本をひたすら読んでもらい、文字を読めるように時間をかけた。

おかげで綴りの長い奴はまだ自信がないけどリングゴ、とかなら自信を持って読めるようになつた。……書けないけれど。

絵本に夢中になっている間に気づいたら真冬ではなくなつていて、それに気づいた俺はスーザーを連れて外へと出たのだ。

「うわあ！！」

何処へ行こうか悩んでるいとスーザーが手を引っ張り俺を川へと連れて來た。

「此処、本当に川？」

段差があるにはあるが田の前には一面の銀世界で、とても川があるとは思えなかつた。

「あるよ。多分、この雪を掘り返したら凍つた川が出てくるよ」
クスクスと笑いながらもスーザーは段差を下りていく。

「あ、待つてよ！」

俺は滑るように段差を下りスーザーの後を追つ。

「じゃ……頑張ろうか」

ズザザ……と足から転びそうになりながらも俺がスーザーの元へと駆け付けた時にスーザーはヒクリと引き攣つたような笑いで農業とかで使うと聞いた……ス、スコップだけ？それを二つ持ちながら言つた。

「……頑張る？」

俺はキヨトンと首を傾げる。

「うん。凍つた川を見つける為にはこの雪を退かさないとね」

そつ言つてスーザーはスコップを一つ俺に向けてポイと放り投げた。
俺はドンッと腕に当たりながらもなんとか受け取る。

「さー、重労働だ」

スーザーはザクッと地面にスコップを差し入れ雪を搔き出していく。
(じゅわ……るつどいへ)

キヨトンと首を傾げながらも俺はスーザーの真似をする。

「…?……お、もつ」

ズシリと雪の重みがましたスコップを震える手で持ち上げ雪を放り出す。

「頑張って雪を搔き出すぞー」

棒読みなスーザーの言葉が虚しく響いた。

「お、終わった……」

ペタリと最後の雪を今までで放り出していた場所へ持つて行き放り出した後に座りこむ。

「やつと、終わったな

スーザーも息を切らしながら俺の隣に座る。

「長かった……」

俺とスーザーは朝早く家を出た。他の人が周りにいないくらい早く。けれど田はとつぐに真上を過ぎて、斜めの位置へと傾いていた。よつて今は夕方近くになる。

「あー…大分かかっちゃたね。これはあまり長くは滑れないやでも、せっかくだし滑つて帰ろうね、とスーザーは言つ。

「……滑る?」

意味が分からない俺はスーザーに再度問う。

「凍つた川に足を踏み入れたら分かるよ

そう言つてスーザーは立ち上がる。

俺も慌てて立ち上がり駆け足でスーザーよりも先に凍つた川へと近づく。

「…………」「…………」
そつと右足を川へと一步踏み入れ、もつ片方である左足を踏み入れる。

「…………スーザー？」

何も変わらないけど、とスーザーに向けて言つ為に振り返るとそこにはニヤリと笑うスーザーがいた。

「これが滑るだよ」

そう言つてスーザーはドンッと俺の背中を押した。

「うつ…………わつ」

普通ならば押されたら前へ転ぶ。けれど何故かスーザーに押されたのに前へ転ばずにスゥーと前へ進んだ。

「??????」

「これが滑るだよ」

川が凍つてツルツルな氷になつてゐるから出来るんだよ、と言ひながらもスゥーと滑りながらスーザーは隣へやつて來た。

「最も氷が薄いと割れて冷たい水の中へと落ちるから気をつけてね」ま、俺が居るから落ちても凍死とかはないから、と言つてスーザーは勝手に滑り出した。

スゥーと慣れたように綺麗に滑つて行くスーザー。

（す…………ごい）

この冬、ずっと引きこもつていたのにあんなに綺麗に滑るなんて。

（俺、も…………）

俺は自分の足元を見て、次にスーザーを見る。

（スーザーみたいに出来るかな？）

俺はスーザーがやつた様に足を交互に踏み出していく。

初めてはグラグラとしながら進んでいたのだが、スーザーを見ながら滑る間に一歩ずつ前に出すのではなくて少し外側から斜め内側に行くように滑れば良い事に気づき、実践してからはスーザー程綺麗ではないがスムーズに滑れるようになった。

「お、滑れるようになったね？早い早い

そう言いながらスーザーは俺に止まるよう仕種をした。

それを見た俺は止まる……いや、止まりたかったが、止まれずに入
ーザーにぶつかった。

「まだ止まれないか……まあいいや

「どうせもう帰るし、とスーザーが言ひ声が聞こえた。

「もう帰るから最後に勝負だ！」

スーザーはスコップを置いた場所を指差す。

「あそこまでなら氷が薄くないし、安全だからどちらが先にあそこ
に着くか競争だ！」

行くぞ、とスーザーは俺の返事を聞かずに進めていく。……多分、
俺が断らない事を知っているからだろうけど。

「一 二 三！」

俺はスーザーのカウントが終わると共に右足を右斜め前へ向かうよ
うに踏み出した。

十九話（後書き）

「スキー……良いなあ」

アルが休憩、休憩と煩いので少し休憩を取っている時だった。

「スキー？」

なんでもまた、と思いながらも俺は聞く。

「いや、だつて、ゴドスーザーと一緒に滑つてゐるから」

俺した事無いし、とアルは言つ。

（スキーなんてしたか？）

俺がスーザーとしたのはスケートに近いものだつた気が……

「アル、それスケートじゃないか？」

「スケート？……さつき俺何言つたつけ？」

「スキー」

「……」

「あ、そうそう、スキーだよ……」

「スケートだから」

あ、とアルは呟き、黙り込む。

(……記憶力大丈夫なのか?)

退行したりは……してないよな?

アハハハ、俺馬鹿だからと言つアルの笑いが虚しく響いた。

……馬鹿なのは同じなのか、と思ったのはこれから先でもアルに言う事はないだろう。

一一話（前書き）

現在、願書書きにワタワタ焦って混乱しています。主に志望動機とかを裏に書かなければいけない事で。

ぶつちやけて言つますと小説を書いている暇、ありません。

……いや、作ればあるかもしだれませんが頭がもう願書の事でいっぱい、先程無理矢理一話書きあげましたが上手く作れていません。

よつて願書が書き終えるまで更新出来ません。

最大で今月いつぱいは。

ただ、願書が早く書き終えたらすぐさま更新再開します。
私も早く終わるよつに努力はするので……

楽しみにしている方には申し訳ございません。

本気で早く終わるよつに無い脳みそで頑張りますので。

願書と言つ敵をやつつけから、また会いましょう（笑）

「お買い物に行かない？」
冬が終わりに向かっているのか、雪は溶け寒さが少し和らいできた
この時期にヒラヒラと俺の前に手を出し振つてはいる母親はこういつ
た。

「買い物？」

俺は絵本から母親へと顔を向ける。

「ええ。一緒に行かない？」

食材とか服とか色々買いたいし、と母親は言つ。

「…………行く」

パタンと絵本を閉じて机の上に置き、椅子から飛び降りる。

「じゃあ、行こうか」

母親は二ヶ口りと笑いながら手を差し出した。
俺は怖ず怖ずと差し出された手を掴み、言つ。

「うん」

キコツと手を握られながら俺は母親と一緒に家を出た。

食品や服や色々なお店がありザワザワと沢山の人がいる中で、俺は
母親と手を繋いだまま食品が集中しているお店に居た。

「…………うん、このくらいね」

行きと違ひドッサリと膨らんだ袋を抱えながら母親は言つ。
それを見た俺はクイクイと袖を引っ張り、告げる。

「荷物持つよ？」

母親は嬉しそうにフワフワと笑いながら言つ。

「大丈夫よ。いつもの事だから」

ガサリと荷物を持ち直しながら母親は続ける。

「それよりも、他を見て見ましょ？」

此処は広いから色々あるわよ？と母親は告げる。

「色々？」

「ええ。文具や家具……確かに絵本も置いてあつたわね」

絵本と聞いて俺は素早く母親へ顔を向ける。

それを見た母親はクスクス笑いながらまずは絵本ね、と言つて俺の手を少し強く握りしめ食材店から離れる。

ガヤガヤと騒がしい人々の間をぶつかりながらも絵本が置いてある店へと向かっている途中だつた。

「泥棒だああ

遙か後方から聞こえた声。けれどその声はハッキリと響いていた。

（泥棒……？）

俺は泥棒、という意味を聞こいつと母親に向けて口を開いた瞬間だつた。

ドンッと後ろから聞こえて来た何者かに押されたのだ。

「うわっ！」

俺は堪えきれずにベチャッと倒れたのだが、押した人物は何も言わずに人混みに紛れてしまい誰だか分からなくなつていた。後ろからだつたから余計に顔や髪型などは分からぬ。

「大丈夫？」

全く、ぶつかつたら謝りなさいよね、と怒った様な声色で母親は俺の心配をしつつもぼやく。

「捕まえたっ！…」

俺は立ち上がりうつと腕に力を入れようとしたら腕を誰かに捕まれこう言われた。

「…………え？」

俺と母親は同時に聞き返すが掴んだ人物は物凄い力を込めて俺を逃がさないようにする。

「……つう」

あまりの痛さに手先が痺れ始め涙目になり始めた頃、それを見たのか母親が眉を吊り上げ俺の腕を掴んでいる人物を睨む。

「痛がってるでしょ！！それに私の子供が何をしたって言つのよー！」

「……私の子供？」

俺の手を掴んでいる人物はジロリと俺を見る。

「そ、う、よ。早く離しなさい」

母親は毅然とした態度で言い放つ。

するとスルリと腕は離され痛みも無くなつた。

「すみませんでした！！」

すぐさまに頭を下げ謝り始める。

俺は少しだけ耳に入れながらも捕まっていた腕を見て摩つていた。

「先程の泥棒をした子供と似ていたのでつい……すみませんでした」「子供？」

「はい……両親が無くなつて孤児となつた子供なんです。良く店の物を盗むんですよ」

被害額も半端ないので……と申し訳なさそうに言つ。

そこからは右から左へ流したから何を話したのかは分からない。

俺はただ、青紫色々になつて鬱血している手を見るので精一杯だったから。

（青い！？）

今まで旅をしていてもこんな事になつた事がなかつたから顔から血が引きながらも必死に息を吹き掛けていた。

（青なんて飛んじゃえ！！）

ずっとフウフウ息を吹き掛けても一向に青い色は消えず困つた俺は顔を上げた瞬間だった。

心配そうに眉を潜めた母親の顔がすぐ側にあつたのだ。

「！？」

ビクリと肩を揺らし、俺は目の前にあつた顔に驚いた。

「……」

「……早く冷やした方が良いわね」

そう言って母親はスッと立ち上がり俺の手を握る。

「早く、帰ろ」

「ごめんね、絵本はまた今度ね、と言つて母親は来た道を戻つていく。

「痛かったよね……やっぱり、」

悲痛そうに言つた言葉。けれどこれより先は周りの音に強き消されてしまつて聞く事が出来なかつた。

一一話（後書き）

「んー……？」

現在、少し前に弾丸のよひに授業を行ったピクシーについてテストをしています。

勿論アルが俺の前で。

「うあ～…」

「分からぬなら諦めて出したら？」

「んー……そうする」

ペラリと羊皮紙を差し出す。

俺はそれを受け取り、解答を見ていいく。

（聞いてない、とかテスト中に聴つていたにしても……）

良く出来ている。

無解答の所と何問か間違えているくらいで後は全て合っている。

（大体八割……って事か）

「ヤコと歯を上げる。

「ハ割くらご合つてゐよ

「え、本当に？」

パツと笑顔になり問い合わせてくるアル。

「ん

俺は短く同意し、間違い部分を訂正していく。

「はい」

訂正をし終わった羊皮紙をアルに返す。

「うわ、本当にハ割取れてるー。」

キヤイキヤイと嬉しい声を上げるアル。

(……女子?)

その様子はまるで試験結果を発表した時の女子と同じだ。

「俺、こんな点数を取ったの初めてだー！」

田をキラキラと解答を見ながら言つ。

俺はそれを見てため息をつきながらも微笑む。

「「ゴド、また魔法の勉強教えてよーー。」

期待したよつた田で見上げてくるアル。

「また、な

俺はへしゃへしゃヒアルの頭を撫でた。

一一一話（前書き）

願書の下書きを提出し、担任からそれが返って来てから少し放置しているカイラです。

まあ、余裕があつての行動だったのですが……

その余裕が無くなりました。

テストが願書提出日と近かつたんです。

再来週には面接ないのに面接練習……

現在涙目です。

これ、絶対にイジメですよ。

確実に受験生の首を取りに来ますよーーー！

先生方が問題を優しくしてくれないかなあ……

……話しがズレましたね。

テストを知る前まではまあ、長くても今月だけ更新出来ないだけだし……と思っていたのですがテストが入るとそれが十月半ばまで出来なくなります。

そんな期間放置するのもなあ、と思い小説をあげました。

時間を見つけては執筆し、載せてこいつと思つています。

ですが前程、定期的にはならないと思ひます。

少し、更新落ちます。

楽しみにしている方には申し訳ございません。

主婦の一日は早い。

大分寒くなくなり、時々暑さを感じてしまう朝を早く起床して、最初に朝食を作らなければいけない。

「おはよう……」

まず、一番に寝ぼけながらも商人である夫が下りてくる。

「おはよう」

夫は寝ぼけたままガタンと席に座りカクリカクリと頭を揺らしながら睡魔と戦う。それが日常……と言うか、ただ朝に弱いだけなんだけれど。

（絶対ラクが朝弱かつたのってこの人からよね……）

それを見て苦笑しながら朝食を作るのが私の日常。

ある程度朝食を作り終えたらそれを机に持つて行く。

その頃には睡魔に勝ち、ハツキリと起きている夫が手伝ってくれるから結構助かってる。

「「いただきます」」

机に料理を並べ終え、二人一緒に食べる。

時々会話をしながらも朝食を食べ終え夫は仕事に、私は食器を洗いに厨房へと入る。

力チャガチャと二人分の食器を洗い終えると同時にタイミング良く下りて来るのは息子のスーパー。

「母さん、朝食なにー？」

こう言いながらパタパタとリビングに入る音が聞こえる。

「今、出すわ」

スーパーに返事を返し、残っているスーパーの分をリビングの机へと持つて行く。

「いただきまーす」

スーパーは何処かの一人みたいに寝起きは悪い方ではない。むしろ

良い方だと……思つ。

ただ、寝相だけは悪いみたいで今日も髪があちこちぱんぱん跳ねていた。

（まあ、すぐに直せるから良いのだろうけど……）
寝癖がすぐに直せるなんて、羨ましい限りだわ。

「じちそうさま」

俺、今日は約束があるからあの子頼むね、と言いながらスーパーはすぐさま家を出て行つた。

私は慌ただしく出て行つたスーパーを見送り、食器を下げる。

一人分しかない食器はさほど時間がからずに終わる。
我が家朝食（食器洗い済み）が終わつた私は次に洗濯へと向かう。
四人分の洗濯は以外と重労働だけれども、やんちゃな双子が居たからかそんなに苦では無い。

あの子達が居た頃は大変だつた。

洋服を汚す事は無いけれど、最早トラブル製造機と言えるくらいにトラブルを起こす兄に巻き込まれる弟。

私が家事をしていようが兄は良くトラブルを起こしては弟が巻き込まれていた。

おかげで家事なんてスムーズに進まないし、時には家事をしている側で食器を割つたり置んで積んでいた洋服を崩したり……わざとでは無いけれど、そのたんびに家事の量も時間も何倍にも膨れ上がつた。

（……あがわざとならキック怒れるんだけれど）
何度ため息をついたどううか。

（…………それでも）

双子の笑顔や寝顔を見れば癒されだし、双子が滅多にない他人から褒められれば嬉しい。……楽しい時間があつたのだ。

私はフルフルと頭を振る。

思い返す事は悪い事ではないかもしれない。けれど、ずっとつらつら思い返せば自分が辛いだけだ。

(今は今!—)

昔には戻れないし、今はしょんぼり落ち込む日ではない。

そんな日は……一日だけあればいい。

……実際には一日くらいあるけれど。

(今日は……今洗濯を終わらせて、掃除をして……)

それから昼食を作り朝に起ききれなかつたあの子と一緒に食べる。後は……また絵本を読むなり一緒に遊んだりをするだけ。

……それが一番疲れるのだけれど、仕方がない。

読んで欲しいとあの子が言うのだ。

あの子の申し訳なさそうに言う姿を見れば……

(どうしても聞いちやうのよねー)

手を離してしまつたから、もあるのかもしれないけれど。

「おは……み……う」

「シ「シ」と眠そうに田を擦りながら息子が下りて来て、洗い場に顔を出した。

「……起きたのね。昼食（朝食）は洗濯が終わるまで我慢しなきゃいけない、け……ど」

息子はペタリと座つたかと思つと私に寄り掛かりスウスウ寝てしまつた。

(寝ぼけただけ……?)

ようやく出来るようになつた先程の挨拶を含めて、どうやら寝ぼけただけみたい。

私はため息をつきながらなるべく息子が起きない様にコックリと洗う。

チラリ、と横顔を覗くとまだまだあどけない息子の寝顔。

(かわいい……)

クシャリと頭を撫でたいところだけれど、残念ながら今私の手は泡だらけ。

(仕方ないわね)

今はこの寝顔を眺めるだけが。

「早く終わらせましょうか」

そして息子を起こして昼食を食べさせないと。

私は、パシャリと泡だつた洋服を持ちながら手を水の中に入れた。

一一一話（後書き）

（あー……）

スヤスヤと寝ているアル。

時刻はとつぐに深夜を過ぎ少しだら朝日が昇る時間だ。

アルはいつも通りに俺より先に寝ていたはずだった。

（なのに、何で）

俺が寝る場所でアルは寝ている？

（俺が寝れないじゃないか）

……何処で寝よう？

ハア、と俺はため息をつく。

（わざわざ起き出すのもな……）

熟睡しているみたいだし、出来るなら起きていたくはない。

「…………ラク」

ポツリと呴かれた名に俺はピクリと肩を揺らす。

だが、呴いた本人……アルはスヤスヤと気持ち良さそうに寝ている。

(心臓に悪いな、これば)

俺は思わず苦笑する。

(今夜はもう、徹夜だな)

こんな心臓に悪い寝言を聞きながら寝れる程、精神図太くない。

「……良い夢を」

俺はパタリと扉を閉めて出て行つた。

「恐る恐る、後ろを振り返るとそこには

「晚御飯出来たよーーー！」

「つぎやああああああああ

夏にも入つて來たし、夜せつかく皆が居るから怖い話してもしてやつてたんだが……

（邪魔されたな）

晚御飯を告げる妻の声に遮られてしまった。

（スーザーには十分きいたみたいだけど……）

俺は苦笑しながら叫び声を上げ、フルフル震えているスーザーを見る。

その近くには話しを始めた時と表情が変わらない息子……ラクが座っている。

（……誰に似たんだろうな？）

普通、怖い話しだとたら子供は叫んだり泣いたりするんだが……スーザーとは違ひ全く物怖じをしないラクはスッと立ち上がりリビングへと向かつた。

俺も晚御飯を食べる為に立ち上がりリビングへと向かつ。

「あ……ちょっと待つ……て」

フラフラと立ち上がり覚束ない……いや、ものすごく震えながらスーザーは歩いてくる。

（……スーザーは物怖じしそうなよな）

そこまで怖くなる程の話しあは無かつたのだが。

俺はため息をつきながらもフラフラとやって来るスーザーと共にリビングへ向かつた。

「遅かったわね」

「はい、と妻は言いながらもそれぞの前に料理を置いていく。
「怖い話をしていてね」

「スーザーには効果があつたけれど、あの子にはそうでも無かった、
と俺は告げる。

「そうしたら妻はクスクスと笑い始める。

「でしょうね。あの子は怖い絵本でも物怖じしないから
スーザーとは違つて、と妻は言つ。

「スーザーは前に一度、幽霊の話しこそだけ泣き喚いて……
宥めるのが大変だった、と妻は言つ。

「……だつて、怖い」

「ポソリとスーザーは言つ。

「幽霊なんていないわよ」

「クスクス笑いながら妻は言つ。

「なら、試すか？」

「「……は？」

「俺が言い出した言葉に一人は驚いたように言つた。

「ちょうど夏始めだし、涼しくするにはちょうどいいだろ？？」

「い……嫌だ嫌だ」

「ブンブンと首を横に振るスーザー。

「な、夏始めるからそんなに暑くないし……別にしなくて良いわよ
？」

「口が引き攣りながら言う妻。

「俺はそんな二人を見ながらニヤリと笑い、一人平然と食事をしてい
る子に聞く。

「皆で外に出掛けないか？」

「始めは声をかけられた事が分からぬのかひたすら食べていたが食
事を止めフツと顔を上げて俺を見つめてきた。

俺はもう一度、聞く。

「皆で外に出掛けないか？」

するとあの子はパッと笑顔になる。

「…………うん！」

「「狡い……」」

すぐさま一人からこう言われるが……そんなものやつたもの勝ちだ。

「じゃあ食べ終わったら行こうな」

フツと笑いながら俺はそう告げた。

「「はーい……」」

ションボリと言つ一人の声がリビングに響いた。

「……此処で良いかな？」

夕食を終え、皆で外に出てきた。

この村の近くには森だとか墓場だとか……そういう肝試しにピッタシな場所がない。

だから俺は村の入り口に来ていた。

「二人一組で、村を一周な？」

「ふ……二人？」

皆で行くんじゃないの?とスーパーは言つ。

「皆で行つたらつまらないだろ?」

仕掛けも何もしていいからただ、暗い夜道を歩くだけになる。

「つ……つまらぬない」

どうしても行きたくないのか、スーパーはそう言つ。

「なら……楽しくなるように怖い話しをしようか」

俺はスウと息をすい、話し出す。

「ちょうどこんな暗い夜の日だった。友人宅から帰る途中で、酒を

飲んでいたからほろ酔い気分でスキップしながらの帰宅だった。そんな彼が帰宅路の七割も過ぎた頃に急に後ろから人間の足音ではない、ヒタヒタと歩く足音が耳に入ってきた。その足音はだんだんと大きくなつていき彼はほろ酔い気分から焦り始める。一体自分に近づいて来ている者は何なのか？河童？水魔？それとも……幽霊？彼は四六時中、気になつた。そして無意識に早歩きで家へと向かう。そのおかげか、自宅まで後少しというところでヒタヒタと言つ足音も消えた。彼がホッと胸を下ろし一步足を踏み出した時だった。『ねえ……私の「トイレ」知らない』つて……トイレ？』

これからだつて時にあの子がクイクイ袖を引きながら言つていた。（あー……我慢出来ないのか）

家に戻つている時間は顔を見る限り無理だらう。

（仕方がない……）

「んじや、そこら辺ですか」

俺はポンポンと頭を撫でながら近くで俺が人が来ないか立つてゐるかと告げる。

するとガシッと反対側の腕を捕まる。

「い……行かないで」

スーザーが涙目になりながら縋りついてきた。

「大丈夫、母さんもいる……」

そこで妻を見るがフイツと顔を逸らされ、僅かに震えていた。

（…………ダメか）

何だかんだ言いながらも妻もこいつのことはダメだ。

「…………トイレ」

再びクイクイ引かれて催促される。

（…………むやみやたらに虐めるんじやなかつた）

後悔しつつも、体が一つに別れないかなあと俺は本気で願う。

（…………仕方がない）

妻は大人だし、スーザーだつてもうそろそろ一人立ちしなければならない時期に入る。

（残しても大丈夫だろう）

恐怖に襲われている一人には悪いがこの子を一人でトイレには行かせられない。

「……トイレに行つてくるな」

ええ～と叫ぶスーパーの声を背後で聞きながら俺はあの子の手を握り一人からこちらが見えない場所へと向かつた。

一一十一話（後書き）

チュンチュン、と雀が鳴いたりコケコツ コーと煩く朝を告げる鶏の声が鳴く声で俺は机から頭を上げた。

（あー… そつか）

徹夜しようつと机に座つたのは良いけれど流石に睡魔には勝てず、そのまま仮眠したんだつけ？

ヒヨイと体を伸ばすとバキバキバキと音が鳴る。

（……年、かなあ）

昔は何日間か寝なくとも平氣だつたんだけど。

（今はそれが出来るかどうか怪しいな）

ギシリと音を立てながら俺は椅子から立ち上がる。

「さて、アルを起さないと……いや、その前に朝食を作るか

朝食は … 軽めのスコッチで良いか。

アルはそんなに食べる方ではないし。

アルがいる部屋 … 正しくは俺の部屋へと向かおつとした足を俺は厨房へ向けた。

ギラギラと暑い太陽の光りが射している部屋で一人の男性が黙々と書類を見ていた。

金髪の長髪だが揉み上げ辺りからは何故か黒い髪が伸びている個性的な彼は魔法大臣と言う職についている。

魔法界で実質上、魔法大臣はトップである。それは魔法使いや魔法生物を生かしたり殺したり出来てしまう地位。

そんな地位にいる彼が行ってきた事 役に立たないから障害者は即、死刑と言う法律やスクイプでも役立てるようにと奴隸と言う地位を作り上げた。

最近では魔法大臣専属奴隸が欲しい為に暗殺戦闘奴隸と言う、奴隸の中でも一番下の階級を作った。

“奴隸の中で一番下”それは魔法界にて一番下だと言う事を示していた。

だがその彼専属の奴隸は苦戦していた。暗殺は勿論、戦闘、料理、毒味、労働、そして 彼が望むなら時には夜の相手もしなければいけない、と何にでも想定して育て上げなければ彼の機嫌を損ね奴隸商工の首が空を飛んでしまう。

それにそんな完璧に近いような人間はそうそういない。いや 出来ないだろう。

だが、出来ないと進言すればその瞬間に首が空を飛ぶ。

奴隸商工は日々、頭を悩ませていた。

そんな横暴な彼が何故魔法大臣の職につけているか。

それは彼が凄く人を操るのが上手いから。

役人を見事に操り障害者が死ぬような法律を通せば一方国民や役人にとって有利な法律も通す。

飴と鞭 …しかも、人間というものは自分に害がなければどうでもいい、と言つ性質が少なからずある。

自分は障害者でもなければスクイプでも無い……よつて自分は死刑や奴隸にはならないから別に法律が出来ても問題ない。むしろ、これを通せば労働の最低金額量を決めると言うならば通した方が利益がある、と。

こいつやつて彼は現在も魔法大臣の席に座り続けている。

コンコンと彼がいる部屋の扉をノックし、部下だらう人間が書類を持ちながら失礼します、と言つて入つて来た。

「出来上りました」

そう言つて部下は彼に持つていた書類を渡す。彼はそれを見て僅かに唇を上げる。

「やつと出来たか」

あいつのせいでの豊作年を探すのに時間がかかってしまった、と彼は言つ。

「しかも予言しただけで自殺しやがるし」

でも俺は豊作年を見つけるまでは諦めないがな、と言つて彼はペラペラと書類をめくつていく。

彼が言つていた豊作年とはその年に素晴らしい才能を持つた子供が八割または九割生まれる事を指す。

昔から代々予言者が豊作年を予言をし、その予言をされた世代の人間は色んな職業で活躍したと言われている。

ただ、それは上に立つ人間によつて変わる。才能ある人間を受け入れられる魔法大臣もいればそれを私利私欲の為に人間を使う魔法大臣もいたのだ。

だが今回は、彼が豊作年の子を見つけて何をするのかは誰も知らない。彼自身が何も言わないのだ。言わないからと言つて問い合わせても自らの首が飛んでしまう。

だから皆何も言わずに彼に従うしかないのだ。

「……おい」

読み終えた書類を置き彼はニヤリと笑いながら告げた。

「この赤髪スクイプの家族はマグルに情報を渡して奴らに殺しても

らえ。残つたこのスクイプは暗殺戦闘奴隸行きだ。ああ、勿論ちやんと“見せろ”よ

「それから我々は地下へ潜る。正し、後で渡すリストに乗つてゐるやつだけだがな。リストに乗つていない豊作年はすぐに親から引き離し地上に置け」

「地下へは時期を見て潜る。準備をするよつに伝える」

それだけだ、と彼は言って机の引き出しを開ける。

部下は分かりましたと言い部屋を出していく。

残つた彼は怪しく笑いながら引き出しから大臣用の日記と羽ペンを取り出す。

「精々俺を楽しませて踊られてろよ?」

お前らは俺の玩具なんだからな、といながら羽ペンにインクをつけ、彼は日記を書きはじめた。

一一二話（後書き）

「……ずっとと思ってたんだけどさ」

アルが朝食を食べながら言つ。

「「ゴドつてイギリス料理ばかりだよね」

「イギリス料理ばかり？」

「他にも……ほら、エスカルゴ使つたり、パスタ使つたり……色々あるよね？」

モグモグと食べながらアルは話す。

「美味しいけどイギリス料理ばかりとメニュー少ないから同じ料理ばかりになるし……」

「…………アル」

んー?と言いながらアルは俺を見る。

「エスカルゴつて何?」

「え……」

アルは目を見開き、信じられないような顔をする。

「フランス料理にある食べ物だよ。エスカルゴを食べる……」

そこまで言つてアルは言葉を切る。

「……フランス料理、知つてる?」

「いや、知らない」

俺が生きてた頃は外国との交流は少なかつた。

それはもう、外国人が居たら警戒するくらい。

「んー……あ、じゃあ」

カタリとフォークを置くアル。

「昼食は俺がフランス料理を作るよ」

少ししか作れないけど……頑張るね、とアルは言つ。

「……楽しみにしてる」

俺はニヤリと微笑む。

(……ん?待てよ?)

エスカルゴつて蝸牛じゃなかつたつけ?

(……まさか、な)

あんな殻がある奴を……食べたりはしないよな。

食べれるかどうかも怪しいし。

まだ見ぬフランス料理に不安を抱きながら俺はアルに作り笑いを向けた。

夏終わりに入る前に海に行ひ、とスーパーからの発言で俺達は今、海に向かつて歩いていた。

「つ……疲れたー」

フラフラと歩きながらスーパーが言ひ。

「後少しだから」

それに苦笑しながら言ひ父親。

「あの子を見習つたら?」

ため息をつきながら母親が俺を見る。

「スーパーみたいにフラフラしてなくてキチンと歩いているわよ

「あいつは慣れてるだろー?」

チラリとスーパーは俺を見る。

「…………?」

はあ、とため息をつくスーパー。

「今からそれじゃ、海までもたないわね

まあ、静かになるから良いけど、と母親は付け加えながら言ひ。

「しばらく休んだら体力回復するから平氣」

母さんと違つてまだ若いから、とスーパーが言ひた瞬間スーパーは母親から頭を殴られた。

ゴツンツと痛そうな音が辺りに響く。

(うわー…痛そう)

俺が顔を引き攣らせながらスーパーを見ていると突然、俺の前にいた父親が振り返り告げる。

「海に着いたぞ?」

「えつ?」

母親とスーパーが同時に声を上げる中、俺は少し左へ移動する。

「う……わあ!」

俺の前には、空よりも少し青い色をし所々白い線がある大きな水。

そして青い空にはボンボンボンと浮いていた白い鳥に僅かにある雲が広がっていた。

(これが、海)

スーザーが海の水を飲んだらじょっぱいって言っていたのは本当かな？

「あ、本当ね」

ヒヨイと俺の右隣りに立ちながら母親が言つ。

「早いもん勝ちだああああああ」

スーザーは海を確認した瞬間にこう叫び一人爆走する。

(……勝ち？)

何が勝ちなのだろうか？

俺はクイクイと母親の袖を引っ張り聞く。

「何が勝ちなの？」

「……私にも分からないわ

何が勝ちのかしら？」と言つて「テントと母親は首を傾げる。

「……あんな時期もあるんだよ」

俺達も行こうか、と父親は苦笑しながら言つ。

「そうね」

そう言つて母親はキュッと俺の手を握り歩き出した。

「うわあ！」

砂浜に着くと、あそこで見た景色とはまた少し違い、正面から波が来る海を見た俺は思わず海へと駆け出す。

しかし俺はヒヨイと襟首を捕まれ、止められる。

「水着と体操が終わってから……ね？」

「…………分かった」

上から聞こえた母親の低い声に俺は素直に応じる。

「じゃ、頼むわね」

「ああ、分かつてる」

そう一人でやり取りした後に俺は父親へと渡された。

ヒヨイと父親は渡された俺を抱き抱える。

「スーパーは……勝手に着替えてるか」

そう言って父親は草が茂っている場所へと向かった。

「此処なら……見えないか」

まあ、別に見られても困る事は無いけど、と言いながら父親は俺を地面へ下ろす。

「じゃあ着替えるか」

そう言って父親は服を脱ぎ始める。

それを見た俺は慌てて服を脱ぎ始めた。

水着に着替え、体操と言つ奇妙な踊り……変な動きをした後に海に入つてもいい、と言われたので俺はすぐさま海へと駆け出す。

「浅瀬だけだからねー！」

そう言う母親の声が聞こえたけれど、俺は半分以上聞き流して海へと近づく。

海へ入ろうとした瞬間にザバアと高い波が押し寄せてきて俺は使つても無いのに全身濡れて浜へ打ち上げられる。

打ち上げられた状態からムクリと起き上がるとザラザラと体に砂がついてしまったが、早く海に入りたかった俺は口の周りだけを拭い海へと入った。

チヤポンと足を入れ、高い波が来る前に前へ歩く。

足が届かなくなる所には行かない、と事前に父親からも言われてい

た俺は届かなくなる一歩手前で足を止まる。

ザザーと音を立てながら緩やかな波が浜に向かつて押し寄せてくる。

それに合わせて俺の体も上下にコラコラと動いた。

（凄い！）

初めての体験にバタバタと手を動かし海面に叩きつける。

（あ、そうだ）

スーパーがしょっぱいって言つたのは正しいのかな？

俺はチヨンと指先を海に入れて、出す。

そしてその指をパクリと口に入れた。

「う、え～～」

その味は、母親が塩を入れすぎて少し失敗した料理よりもしょっぱかった。

（これ、沢山飲んだらどうなるんだろう？）

きっと、あまりのしょっぱさに舌が痛くなつて動かなくなるんだ。

（……それは嫌だ）

ブルリと体が震えながら俺はザブリザブリと歩き浜へと向かつた。すぐさま浜へと上がつて来た俺を見て一緒にいた二人は驚いていた。

「どうしたの？」

楽しみにしてたよね？と母親はしゃがみ込み俺と同じ目線になつてから言つ。

「海の水を飲んだら……」

「ああ……しょっぱかったよね？」

それで驚いたんだ？と母親は言つ。

しかし俺はブンブンと首を横に振つて言つ。

「舌が動かなくなつちやつー！」

「…………え？」

も、もう一回言つてくれる？と母親は言つ。

「舌が動かなくなつちやつ……」

シユンと顔を俯せ、涙目になりながら告げる。

「…………どうしてそうなつたのかしら？」「

「…………どうしてだろうな？」

子供は大人と違つて純粹だから、と父親は続ける。

「考えとか全然読めないんだよな」

そう言つてポンツと俯いている俺の頭に手が乗る。

「また海に入るか？」

それとも、もう入らない？と父親は聞いてくる。

俺は小さく入らない、と告げる。

「なら、一緒に浜で遊ぶか」

行こう？と言つて父親は頭に乗せていた手を離し俺の手を優しく握る。

「クン、と俺は頷いて手を握り返す。

「よし、スーザーも誘うか」

そう言つて父親はコックリと俺の手を引きながら歩き始めた。

スーザーも誘い、浜で色んな遊びをした。

誰が綺麗な貝殻を見つけるか、とか砂を深く掘つたりとか海の水近くの砂で泥団子を作りスーザーに当てるたりとか。

それから遅めの昼食を取つて、帰る前にもう一遊びしようとなつて現在砂の山に穴を掘つていた。

スーザーが言つにはこの穴を四方から山が崩れないように掘り進めれば中央で繋がるらしい。

手が当たるから繋がったかどうかはすぐ分かるよ、と言つてスーザーが一番に掘り出したのだ。

ガリガリと砂の山が崩れないように掘り進んで行く。

「感覚的にもう少しなんだけどなー」

腕を突つ込みながらスーザーがそう言つた瞬間に今までの砂ではな

くてポツツと穴が空き僅かに手が触れ合ひ。

「「「「あ」」」

「繋がつたみたいね」

結構時間がかかつたなー、と言いながら母親は手を抜き始める。

「それは母さん達が遅いからでしょ」

ステーザーが手を抜きながら言い返す。

「早く掘つていた貴方が何故同時に穴が空いたの?」

普通、先にそこは通じているでしょ?と母親は言い返す。

「それは俺が遅かったからじゃない」

どうみても向こうだ、とステーザーは言い返す。

「あの子が遅いのは当然よ。腕も短いし」

その分貴方がフォローするのが当たり前でしょ?と母親が言い返す。それにたいしてステーザーがまた言い返して……と言い争いになつていつた。

「……楽しかつたか?」

ポンッと頭に手を乗せながら、けれど顔は母親とステーザーを見ながら言ひ。

「……うん!」

俺は父親と顔を合わせてなくとも、ニッコリと笑顔でそう告げた。

「あ、つだあああ

ガツシャーンと物がひっくり返る様な音とアルの声が響く。

「…………てめえ」

何があつたのかは分からないが相当痛かったのだろう。

普段のアルの性格は消え、静かに攻撃的になつていた。

「アル、落ち着け？」

そう声をかけながら俺は料理を作つているアルの元へと向かつ。

……内心やっぱり双子だな、と思つたのは秘密だ。

「…………」「？」

ヒヨイとアルを見れば手にはふくろひつを締めていた。

「…………こつ、殺つても良い？」

「…………動物愛護団体に捕まるから」

俺はパツとアルからふくろひつを取り上げ、巻き付けられている羊皮紙を外す。

(……さて、誰からなんだ？)

滅多に来ない羊皮紙の差出人は

：

(ダンブルドア……?)

先程アルが言つたばかりだけれど……

こいつ殺つてもいい？

残暑で昼はまだ暑いけれど朝と夜はわりと涼しくなってきたこの頃。
おかげで最近俺はベットから出る時間が遅れていた。
……まあ、今日は珍しく寝坊したからなんだけど。

（朝食まだ食べてると良いな……）

モゾモゾとベットから下り部屋を出る。

トントンと廊下に出て階段を下りていく。

（…………静かだな）

誰かいるならばそんなに広い家ではないから話しそうとかが聞こえる。
(父親もスーザーも家を出たのかな?)

なら、家にいるのは母親だけ。

これなら朝遅くても咎められない。

……最も煩いのはスーザーだけだけど。

トンツと階段を下り終えリビングへと入る。

「…………え?」「

リビングには誰一人として居なかつた。

（…………洗い場かな?）

ペタペタと足音を出しながら洗い場へと向かつ。

「…………居ない」

朝から昼まで母親は大抵リビングか洗い場にいる。

買い物に行くとしても今までずっと俺が起きてから一緒に行つてた
んだけど……

（…………何か、あつたのかな?）

キヨロキヨロと家中を見回している時だつた。

リーンと来訪者が来たことを知らせる鈴が鳴つた。

（…………どうじょう）

今まで来訪者には母親かスーザーが対応していた。

俺はまだ来たばかりで知り合いが居ないから、と。

（でも、今俺しか居ないみたいだし……）

俺が出るしかない……よな。

俺がユックリと玄関に向かい、扉を開けるまで嫌がらせの様に鈴は鳴つた。

この行為にプチリと頭にきながらもガチャリと扉を開くと漆黒の髪の女性がニヤリと笑いながら告げた。

「やっぱり、居た」

まるで闇じゃないかと思う程に深い黒の目をした珍しい女性はそう言ってガシリと俺の腕を掴む。

「来い」

そう言ってグイグイ俺を引っ張つて行く。

「誰なんだよ、お前！」

先程の行為と言い今の行為と言い、プチリと何かが切れた俺は声を荒げながら言う。

「……ああ、邪魔だな」

そう言って女性は杖を出し振る。

俺は何が邪魔？ とか何したんだ？ とか何が目的？ とか言いたい事はあつたけれどまるで口を縫つたかの様にピッタリと口を閉じ、開く事が出来ない。

「これから“お前”の終わりを見に行くんだ」

女性は意味が分からぬ言葉を言って口を開かなくなつた。

ただ、グイグイ引っ張つて行くだけ。

（何がしたいんだ？）

無理矢理人を連れ出して……俺の終わりを見に行く？

頭がおかしいんじゃないか、と俺が思いながらも女性は広場に入つた。当然、俺も連れられて広場に入る。そこで目に入った光景で俺は今までの思考が止まつた。

（……な、んで？）

そこに居たのは、俺が探していた人物……母親にスーパー、そして

父親も居た。

三人は逃げられない様になのか縄で手足を縛られている。

「今からあるのはマグル達による公開死刑だ」

(……しょ……けい?)

処刑、とは何か痛い事をされるのだろうか?

カツカツと、一人の肥えた男と大きな鎌を持った筋肉質な男性が三人の近くへと立つ。

「皆の衆、『荒れ果てた荒野』のあの田からついに魔法使いを捕まえる事が出来た!」

ザワザワと周りが騒ぎ出す。

「あの日、我々の同胞は奴らに無残に殺された! それ以来我々が奴ら必死に探しても既にものぬけの殻だつたり目の前で姿を消すばかり」

「だが、とある情報よりこいつが魔法使いである事を知つた」

そう言つて太く、ブヨブヨに下がつている肉を揺らしながら男性は父親を指差す。

「よつてこいつと……魔法使いを匿つていたとしてこの一人を公開死刑にする」

そう告げると周りはうおおおおお、と歓喜に似た声を上げる。

チヤツキンと鎌を持ち替え音が嫌に耳に響く。

「皆の衆、臆する事はない。確かに我々は彼等の言う……魔法が使えない。だからと言つて我々が奴らを殺せないわけではないのだ!」

「！」

今からそれを証明しよう……そう男性が告げると周りは一瞬にて静まり返る。

「……では、やれ」

そう告げて男性は四人から離れる。

その場に残つた鎌を持つた男性はユックリと鎌を構えながら三人の後ろに回る。

「……サラバ」

そう言つて一人に狙いをつけ鎌を振り下ろした。

ザンツと鎌が振り下ろされた音と共に赤い血が空に舞い、その中心には先程まで繋がつていた父親の顔。

(…………つ)

死刑が何なのか分かつた瞬間、俺は三人がいる場所へと駆け出す。けれど後ろからガシリと捕まれ、行かないように持ち上げられる。

「そんな事はさせないよ」

それは俺を此処へ連れてきたあの女性の声だった。

(…………そ、いえば)

一緒に……いや、無理矢理連れて来られた事を俺は思い出す。

『は・な・せ』

俺は口パクでそう告げよつとして、口が開かない事を思い出し言葉の代わりにキツと女性を睨む。

「…………睨む暇があるのか？」

そつ告げられた瞬間、ザンツと一度田の音が響く。

パツと急いで目を向けると母親の首は離れており、奴はスーザーへ向かって鎌を振り下ろそうとしていたところだった。

「~~~~~!!」

一生懸命に口を開こうとするがー?たりとも開かずに声は出ない。手足をバタつかせても女性には当たらないし、地面から離れている為空を切るだけで意味もない。

ザンツと三度田の音が響き、周りの歓声と共に赤い血が舞いスーザーの首が飛ぶ。

「…………これでお前の日常は、家族はもう無い」

そして、と女性は続けるが俺は何も聞いていなかつた。

「…………お前”は此処で終わるんだ」

俺が覚えているのは女性の言葉よりただ、ただ、周りの歓声だった。

一一五話（後書き）

（……お茶会い？）

眉をこれでもか、と潛めながら俺はダンブルドアからの手紙に目を通していく。

（……行きたくない）

「……「」？」

ジーと読み終えた手紙の下から顔を覗かせながら呼ぶアル。

「……どんな手紙？」

嫌な事だつた？と心配そうにアルは言つ。

「……糞狸からお茶会の誘い」

アル、行きたい？と俺は不機嫌をさらけ出しながら問つ。

「……うん、悪いけど行きたい」

不機嫌な俺の態度で嫌つてているのが分かつたんだろう。

アルは謝りながらもそう言つた。

「「」」の知り合いなんだよね？」

会ってみたい、とアルは言ひ。

「俺の知らないゴドを聞けるかもしないし」

俺はため息をつきながらもリビングへと足を向ける。

「行くつて返事しておへや

ヒラヒラと羊皮紙を揺らしながら俺は厨房を去った。

（……ダンブルドアかあ）

……アルに変な事を言つたら瞬殺しちやう。

パツと杖を取り出し、魔法で手紙の内容を上手く返事になるよう書き換えながら俺はダンブルドアの瞬殺方法について思案を始めた。

一十六話（前書き）

願書もテストも終わりました！！

……少々小説の書きたい気力も落ちちゃいましたが。

それでもあまり日が開かないように頑張ります！！

俺が事態を受け入れ、現実世界へと意識を向けたころには全然知らない場所へと居た。

そんな俺の目の前には全体的に白く、周りのどんな家よりも大きい家。

今だに俺を逃げないように抱えている女性はその家へとカツカツ歩いていく。

その入り口へと着くとアンドール孤児院の文字。

(……アンドール?)

孤児院が読めない俺は、アンドールと言う人物が住んでいる家なのだろう、と思っていた。

女性はベルを鳴らさずにカツカツと家中へと入っていく。

「私は此処までだ」

そう言って女性はある扉の前で俺を下ろす。

「お前はこの中へ入るんだ」

そう告げてカツカツと女性は去つて行く。

「……」

声を出そうとして、口が開かない事を思い出した。

(……治らないのかな?)

口を開けようと動かすが、ピタリと動かない。

(……行くしか、ないかな?)

チラリとあの女性が去つた同じ方向で俺から数メートル先に逃げないよう、なのが大人が一人俺を睨んでいた。俺はゴクリ、と唾を飲み込み扉へと視線を戻す。

(……多分、逃げたら殺されるかもしね)

そう考へるとゾワリと鳥肌が立つ。

(手を……縛られ)

スーザー達みたいに 首を飛ばされ、血を流し曝されるなんて……

俺はガタガタと震え出す。

（い……や、だ）

俺は、まだ死にたくない。

奮える手で、そつと扉に手をかける。

ガチャリと音を立てながら俺は扉を開いた。

「やつと来たか」

扉を開くと真ん丸な頭で目が潰れているんじゃないかと思う程にデップリと太っている男性に黒いフードを被りジユウジユウ音を立てる変な物を持つてている性別な人間に青い髪に切れ長の青い目をした男性が立っていた。

「やつと来たんだ。さつさと始める」

イライラした口調でデップリが言う。

「あー、はいはい

それに面倒くさそうに青髪の男性が言い、俺の方へと向かって来た。思わず、一步後ろへ下がろうとして足が動かない事に気づく。

（なんでっ！）

「抵抗されちゃ困るからな」

魔法をかけさせて貰つた、と青い髪の男性は言う。

「まあ、これが終われば“此処に来るまで”にかけた魔法は解かれ

る」

そう言つて男性は俺の両腕を後ろへと動かし、抑える。

それを確認してからカツーン、カツーンと嫌な音を立てながら俺の前にフードの人間が立つ。

「さあさあ……いい声で鳴いてくれよ？」

そう言つてクルンと器用にジユウジユウ音を立てる何かを回し、ジユウジユウ言い変な模様がある形を俺へと向ける。

バツと、それを持っていない左手を俺の額へと持つて行き前髪を上へと上げた。

次の瞬間、ジユウと額が焼かれる音と共に俺が叫ぶ。

「う、あ、ああああああああああああ

「良い、良いぞ！もつと鳴け、叫べ！」

そつ言つてグリグリとそれを額へと押してくる。

俺はあまりの痛さに涙を流しながら叫ぶしかなかつた。

「う、あ、あ……」

ジユウジユウ熱かつた原因の物がそつとのかされる。

ドサリ、と手を離され俺は床へと倒れる。

「……貴様は今日から暗殺戦闘奴隸だ」

精々、我々の役に立つようにな、と意識が薄れしていくなか俺の頭に響いた。

一十六話（後書き）

「…………」

パチンと現れた先には一つの家。

「…………多分」

ダンブルードアからの返信に記されていた場所は此処だつた。

「…………行こう」

アルの腕を掴み俺は手始めに入り口の扉を蹴り飛ばした。

「…………ゴドっ」

サッと顔を青くしたアルが恐る恐る言つ。

「これ…………弁償だよね？」

「あの爺がするだろ」

俺は扉を気にせずに中をズンズン進んでいく。

「ダンブルードアー」

死んでるー？と声をかけながら俺はリビングだらう扉を蹴り飛ばした。

パチリと田を覚ますと周りは真っ暗闇だった。

（…………夜？）

どうやら氣絶している間に夜になつていていたらしい。

（明かりがないな……）

俺は目が暗闇に慣れるまでぼんやりとしていた。

（…………あ、見えてきた）

目が暗闇に慣れてきて少しずつ周りが見えてくる。

（…………何処？）

少なくとも、先程の部屋ではない。

今俺が居る所から左右と後ろは壁になつて囲まれており前方は鉄格子。

窓やベットなんて物はなく、ガランとしている部屋。ブルリと俺は震える。

「寒い…………」

まだ冬は來ていないといつこの部屋は妙に冷えていた。

（…………足音？）

カツーン、カツーンと暗闇から足音が響く。

その足音はどんどんと近づいてきて大きな影が俺の前にある鉄格子の前で止まる。

ガチャガチャと音が響いた後にギィィと音を立て、中へと入つて来た。

（…………何？）

部屋での出来事といい、今の状況といい、全く何が起つているのか分からぬ俺は戸惑いながらズルズルと後ろへ下がる。

「…………起きたのか」

初日から随分優秀な事だ、と低い声が響く。

「だからと言ってお前だけしないわけにはいかないけどな

そう低い声が告げた後にドンッと俺は腹辺りを蹴られ吹っ飛んでいく。

(つう……)

バンッと音を立て後ろの壁にぶつかる。

「これで終わりじゃないからな?」「

声はそう告げ、俺の髪を掴む。

そのままバキイと顔を殴られる。

その後も、腹や腕、足や顔……何処だろうと殴られ続けた。

……どれくらいの時間が経ったのかは分からないが、さほど長くはなかつたはずだ。

俺をボコボコにしていた人物は腹を一蹴りした後にギィイと鉄格子を開ける音と共に去つて行つた。

ズルリと冷たい床に座り込んだ俺だがすぐさまギィイと鉄格子は開かれ俺は係だらう人間に無理矢理連れ出された。

連れていかれた場所は今いる部屋 ガヤガヤと賑わう沢山の子供達の近くにその場所には似つかわない沢山の武器がある部屋だった。

「武器を拾つてガキ共を殺れ」

バタンと連れて来られた時に使つた背後の扉が閉じる音と共に告げられる。

「項目は“適切検査”らしいが……よつは扱い方も知らないお前が人を多く殺せる武器探しだな」

そこいら辺にあるのを拾つて殺せ、と説明の後に再度告げられる。

(……こ、うす?)

「おり、さつさと武器を取れっ」

そう言われドンッと背後を押され武器がある場所へと飛んだ。

ガツシャーンと音を立てながら俺は武器に埋もれ視界が暗くなる。

(…………殺す?)

誰が?

(俺が…………?)

同じ年の子を?

(…………何で?)

何で殺さなきやいけない?

《なら、俺を呼べ》

誰?

《お前だ》

俺?

《ああ。俺はお前。お前の“闇”の部分。お前が俺を呼べば俺は消え、お前となる》

…………消え、る?

《消えるとは言つても、元々…………いや、今もお前だ。少し離されているだけで》

お、れ……

《ああ、呼べ。俺は…………》

お前が強く呼び、望めば元に戻れる。

ドクン、と心臓が波を打ち俺の耳に響いた。

「へえ…………お前、あの一族なんだな。しかも運よく黒か」
俺が武器の山から立ち上がると微かにそんな声が耳に入る。
俺は特に気にかけず、近場にあつた剣と短剣の半ばくらいな長さである双剣を手に取る。

(これは……)

思わずニヤリと笑い、子供達の元へと駆け出した。

右手で剣を振るい血に染めながらも、左手に握っている剣についてある鋼糸を引っ張りだし、握る。

そのまま剣を投げ、上手く鋼糸を操り飛び道具の様にビュンビュン飛ばす。

あちらーこちらで悲鳴が上がるが少し遠方は左手の剣で、近場は右手の剣で斬つて血に染めていく。

暫くすると最初に俺の背後に居たあいつ以外の生きている皆は逃げだせたのか床に転がっている死体に赤黒い血、そして血に塗れた俺が立っていた。

「……双剣か。だがそれでは田立つな」

そう言つてドカドカ歩いていく。

チラリとそいつを見ると金髪に黒い田をし、少し頬が瘦せこけてはいたが背の高い男だった。

「これを使え

ポイっと渡されたのはやけに細い鋼糸。

「これから暗殺出来るし、何より……」

“黒”である今、沢山殺せる方が良いだろ？と気持ち悪い笑顔で男は言う。

それにたいして俺はただ、ニヤリと笑つただけだった。

「……扉は押して開くものであつて決して蹴り飛ばすものではないのよ」

優雅に紅茶を飲みながら告げるダンブルドア。

（この魔力……）

……いや、正しくは彼ではないだらう。

「別に良いよ。直すのダンブルドアだから」

「……そしてわしに後始末をせるゝと。相変わらずじやの」

俺はアルをグイグイ引っ張りながらテーブルへと近づく。

テーブルへと着くと手を離し勝手に椅子に腰掛ける。

「し、失礼します」

恐る恐るアルはこう言つながら座る。

「つむ、お座り。紅茶やお菓子には遠慮をせずに食べて構わんよ」

「別に畏まらなくともただの爺だから」

「……君でも彼くらいの対応は出来ぬのかの？」

「出来るよ、それくらい。でもそれを爺にする必要はない」

「年長者は敬うるものじゃねえ」

「歳の順だと俺やアルがダンブルドアより上だし、例えダンブルドアが俺より上でも俺は年長者を敬つたりはしない」

俺にだつて膝を屈する相手はちゃんと決める、と叫こながら俺はお菓子へと手を伸ばす。

手を伸ばし、お菓子を取ろうとして止めた。

「……………流石、じやの」

「どうしたの？」

お菓子を取らなかつた俺に対しダンブルドアはそう言い、アルはキヨトンとしながら言つた。

「アル、何にも手をつひるな。…………さて、茶番はこのくらいで良いだろう？」

俺はスッと手を引きダンブルドアを見る。

「…………何の用だ？ わざわざ手紙にしる性格こしり手を込んだ事をしてまで俺を呼んで」

アルは今だに訳が分からぬのかキヨトンとしている。

「いっぽはダンブルドアではない。俺の主だった
：」

「なあ、魔法大臣殿？」

あの時代の魔法大臣だ。

あの日はあの後も視力検査から検査と思えない検査で一日が終わった。

検査の後は地下のあの独房と言える部屋にぶち込まれ、夜には別の女性が回つて来てあいつと同じ事をする。

……どうやら時間はバラバラだけれど、これは毎日あるらしい。そして翌日である今、検査的にも何が大丈夫なのかは分からぬが大丈夫だったらしく俺は厨房へと連れて来られた。

「……こいつか？」

目の前には白髪が混じつている老齢に近いだろう男性。彼は老齢に近いだろうに筋肉はついているし、目はギラリと光つていて正直すぐさま射殺されそうなくらいの眼力だ。

「……こいつに仕込めば良いんだな？」

「はい、よろしくお願ひします」

そう言つて引率者はパタリと厨房から出て行つた。

「さて……」

ギロリ、と俺は鋭い目で見下ろされる。

「上もよくやるな」

ポツリと呟かれた言葉。しかしその瞬間には先程とは打つて変わつた。

「お前に料理を教えるように言われた。名前は……チーフだとでも呼べ」

お前に名前を教える価値無いからな、と地を這つよつた低い声で言われる。

「手始めにまずは……ポリッジでも作つてもうつか」

そつ告げて俺に鍋を渡して逃げないよつになのか扉の前へと立つ。

（……ポリッジ？）

ポリッジつて何？

俺は振り返りチーフへと助けを求めるが、チーフは助けるつもりが無いのかただ俺を見るだけ。

俺は手にある鍋へと視線を落とし、それから用意されてある材料へと皿を向ける。

スッと手を伸ばし、俺は手についた材料を持ちながら包丁へと手を伸ばした。

適当に切つた大きさが疎らな野菜をこれまた適当に煮込んだだけの料理をチーフへと持つて行く。

「……これが料理か？」

チーフは一口もつけずにパツと手を離し、料理を落とす。

「作り直しだな」

ガツシャーンと皿が割れる音が響く。

「そうだな……チャレンジは三回だ」

それ以上は、とチーフは続けていく。

「“お仕置き”があるからな」

容赦なんてしない、と告げた後にチーフは俺に向かつて手で戻れと仕種をした。

俺はそれに従い、厨房へと戻る。

それからは作つては捨てられる、の繰り返しでとうとうチーフが言った三回目。

チーフは何も言わずに厨房へと戻つて行つた。

（合格なのかな？）

密かに淡い気持ちを抱きながら俺はチーフが戻つて来るのを待つ。やがてノソリと厨房から出てきたチーフはジュウジュウ音を立てる鍋を持って出て来た。

（ま、さか……）

それを見た俺は、昨日の事が頭に過ぎる。

同じ様にジュウジュウ音を立てた物を押し付けられた昨日。熱くて、熱くて頭が割れる様な痛みがあつた昨日。

俺の顔は血の気が引いていく。

（昨日と同じ事を……？）

するのだろうか、チーフは。

俺は昨日と同じ事をされたくない思いから手をクロスして頭へと持つて行きガードをする。

けれどチーフのした行動は俺の予想とは違っていた。

ブンッと空気を切る音とともに、お腹へ熱い物を押し付けられる感覚と鍋の分の重さが直撃する。

チーフは、熱い鍋を俺のお腹目掛けて投げたのだ。

予想外なところに攻撃された俺はペタリと手を床につけて崩れる。その際に頭から床へとつけた手が鍋を掠っていた。

「う、あ、ああああああああああああああああああああああああ」

俺は叫びながらも手が焼けるのも構わずに鍋を掴みお腹から床へと放り投げる。

それからお腹を抱えて丸くなる。

そんな俺に構わずにチーフは歩き鍋を掴む。

それから丸くなつた俺の背中向けて熱い鍋を振り下ろす。

何度も熱い鍋を振り下ろされた背中はまるで火の中にいるかのようにな熱かつた。

俺はそれにただ、泣き叫ぶしか出来なかつた。

数十分に及んだその行為は次の訓練の為に迎えに来た案内人が来る

まで続いた。

それから俺は引きずられる様に連れて行かれて、来させられた場所には机と本が置いてあつた。

ドサリと俺は自分の席だろう場所に放り出される。

「……今からは勉強の時間だ」

案内人が去り、ガタンと教壇に立つた女性はそう告げた。

彼女は金髪に緑の目、整つた顔で平均的な身長がある女性。

そこら辺の男性からモテていただろう。……胸があれば。

「奴隸の癖にイギリス」、頭が良い私から教えて貰えるのよ？馬鹿だなんて許さない」

ダーンと女性は教卓を叩く。

彼女は性格も悪かつた。

「貴方は実験中の暗殺戦闘奴隸らしいわね？先に生物を教える様に指示が来ているわ」

女性はペラリと本をめくる。

「そうね。私の事は フィルで良いわ」

ああ、先生と敬語は必ずだから、とフィル先生は言つ。

「今日は人体について学びましょうか？」

バタンと本を閉じる音が響く。

「 … 実体験でね」

そう言つてフィル先生は消えた。
俺が消えたフィル先生に気づいたのは自分の首が絞められた時だつた。

「分からなかつたでしちう？」

ニヤリとフィル先生は笑う。

「人間には死角があるの。それを庇う様に左右の目が働いているのだけれどそれでも限界がある」

そこから近づけば誰でも近づける、とギリイと力を入れながら言つ

フィル先生。

俺は苦しくなつてきて、先生の腕を搔きむしる。

「苦しい？これも人を殺す一つの方法ね。まあ……跡が残るから才
ススメはしないけれど」

スッとフィル先生は手の力を抜く。

俺はその隙にフィル先生の手を払い、俺の首から離す。

「さて……授業の続きをしましようか？」

そう言いながらフィル先生は教壇へと戻つて行く。

「底辺にいる貴方でも分かりやすく教えてあげるわ

ニヤリと怪しく笑いながら告げるフィル先生。

俺の地獄へのカウントダウンはすでに始まつていた。

一十八話（後書き）

「……良く分かつたな？」

バサリと音を立て、目の前にいたのは苛立つ老人ではなく俺の主だつた人物 ： 魔法大臣だった。

「今日は無理矢理にでも俺の元で働いて貰おつかと呼んだんだが：」

「……」

魔法大臣はチラリとアルを見る。

俺の過去を少し知っているアルは老人があの魔法大臣だと分かり戸惑つてはいるが、手には俺が渡した緊急時用の防災グッズを握つていた。

「どうやら無理矢理だとそれを使われそうだな」

ギュッとアルは手をグッズと共に握る。

「……ゴドが危ないなら、遠慮なく使う」

アルが握っているグッズは使用すると大声で叫び回り、叫び終わつた後は大量の煙りとなつて俺達の身を守る、と言う代物。

俺が作った物だから何処までそうなるかは分からないが、少なくとも魔法大臣はこの効果を知らない。

チラチラとアルの握つている物を警戒する魔法大臣。

俺はニヤリと笑う。

「アル、使え」

アルは疑いもせずに頷き、それを床に叩きつけた。

一十九話（前書き）

……今気づきましたが前話の後書きに出てた魔法大臣。

彼、この話しから出てましたね。

下書き感覚で書いていたのでウツカリしていました。

少々ネタばれにはなつてしまい申し訳ございません。

俺が此処に来てから随分多くの年月を過ごした。殴られ、蹴られ、斬られたり、毒を盛られたり……これら以外にも多くの暗殺と戦闘、奴隸に関する訓練をした。

それは人体に関する事だつたり、毒草の種類、料理に掃除……色々な事を実践で学んだ。

そんな事をしていたのだから此処に来る前の自分と比べると俺は確実に成長していた。力もついたし、一人で生きていける知識も頭に入っている。

けれど、得る物があれば失う物もあって、俺は人間に必要な“心”が欠落していった。

「おい、01出ろ」

ギイイと鉄格子が開き案内人が現れる。

俺は黙つて立ち上がり、案内人に続いて此処を出る。

先程呼ばれた01とは此処に来て数年後から呼ばれる様になつた俺の名だ。

此処へ来た当初は実験中の暗殺戦闘奴隸へ振り分けられたのは俺一人だけだつた。

それから数ヶ月経つとポツリポツリと暗殺戦闘奴隸へ子供が振り分けられるようになり、人数がそこそこ増えて來たので此処に振り分けられた順番に番号を与え管理しやすい様にされたのが始まり。

……最も、訓練が厳しすぎて現在生き残つているのは俺一人だけ。

「今日から01、お前は主付き“奴隸”となる」

カツカツと歩きながら移動中に初めて口を開いた案内人。

「よつて、お前にも渡さなければならない物がある」

そう言つてこちらを見ずにポイッと珍しく鞘付きの短刀が渡される。

(……これは?)

俺は渡された短刀を見ながら首を傾げる。

（俺の暗器は鋼糸つて決まつていいんだけど……）

それに鞘なんてついていたらいくら短刀でも抜く時間もいるし、暗殺には向かないはずだ。

ただでさえ、一番得意な剣や双剣も武器には大きく暗殺にならないから、と鋼糸へと暗器を変えさせられたのに。

（なら、何故？）

「そいつは暗殺用ではない」

その言葉に俺は短刀から案内人へと顔を向ける。

「そいつは小鬼に作らせてある、切れ味抜群の短刀だ。そしてそいつを使う時は奴隸が自殺する時のみ」

何時からか分からぬが主付きになつたらそいつを渡す事になつている、と案内人は告げる。

それを最後に案内人は話さなくなり、やがて主がいるだらう部屋の前までやつてきた。

「……精々我々の役に立つ様に」

そう言って案内人は去つて行く。

俺は今だ持つていた短刀をそつと隠し目の前にある扉へと手をかける。

ギイイと音を立て扉が開いた先には一人の男性。

彼は長い金髪なのに揉み上げは黒い髪という個性的な髪型に碧色の目をしていた。

「やつと来たか」

スッと碧色な目を細めながら彼は言つ。

「今日から〇一、お前は俺の奴隸だ」

ニヤリと頬を上げながら彼は言つ。

「底辺にいるお前が魔法大臣である俺の奴隸になれるんだ。失敗は許さない」

（……魔法、大臣？）

魔法大臣つて確か偉い人、だつたよな？

（そんな人の、奴隸？）

俺はそちら辺に住んでいる人間の奴隸になるのだと、ずっと思つていた。

「早速だが、お前にやつてもうつ事がある」

カツンと魔法大臣は机を軽く叩いた。

「今日の真夜中、首都ロンドン近くに住むグリースター家を“消して”いい

そう告げる彼……いや、主の顔は真剣だつた。

「分かりました」

俺は膝をおり、了承の意を表した。

「……………行け」

それは出て行け、と言つ意味なんだろう。

そう受けとつた俺はスッと立ち上がる。

「失礼しました」

俺は頭を下げて告げてからパタンと扉を閉める。

（真夜中、か）

多分暗殺が終わつた後に報告をしに行かなければならないだろう。それまでにはロンドンに向かいまた外で仮眠出来るような場所を探しておかなければならない。

（此処からロンドンか）

主みたいな魔法使いならばすぐさまロンドンに行けるのだろうが、魔法使いではない俺は歩かなければいけない。

（此処から半日少しあかかるから……）

今すぐこの地を立たないと間に合わないだろう。

俺は数年いた馴染みあるこの孤児院の地下ではなく、孤児院の外へと足を向けた。

一一九話（後書き）

ボフンとアルが叩きつけて床に接した瞬間大量の煙りと同時に大声の叫び声が響く。

（今だ！）

俺はアルを引っ張りすぐさま“姿くらまし”を行ひこの場を離れる。

その際にグエと苦しそうな声は聞かなかつた事にじよつ。

「……此処は？」

パチンと現れた先は鬱蒼とした森。

「禁じられた森」

キヨロキヨロと辺りを見回しているアルに俺はそう答える。

「禁じられた森？そこいつて……ホグワーツ敷地内の森だよね？」

何でこんな所に！？とアルはオーバーリアクションをしながら聞いてくる。

「……咄嗟に思いついたのが此処だったから」

「…………」

ジーと白い目でアルは俺を見てくる。

「……アル、戻るよ」

その地味な攻撃に堪えられず俺はアルを引き寄せていつもいるあの場所へと“姿くらまし”をした。

パチパチと上がる炎の前で俺は空を仰ぐ。

夜空は三田丸がボンヤリと真つ暗闇の中に浮かんでいた。

（曇りか……）

いつもは見える星が見えない。

カンカンカンと異常を知らせる警報が暗い辺りに鳴り響く。

（……これで、いい）

俺はそつと、闇に紛れた。

「……以上です」

膝を付き礼をしながらも俺は先程始末してきた報告を主へと告げる。

「……そうか」

そう主は言い、ペラリと机に置いてある紙を一枚取り出す。

「お前に、護衛任務だ」

その言葉に俺はキヨトンとする。

（護衛……任務？）

意味が、分からぬ。俺には主がついた。それは即ち主の命令以外は聞けない事になる。

（そんな任務は施設に行くはずなんだけど……）

表向きは孤児院だが、奴隸育成をしている施設。

俺が入っていた所以外にもそれは沢山あって、時々奴隸育成の為に護衛とか物探しとかの依頼を育成中の奴隸にさせる。

俺もしたことがあるし、奴隸である子供は一度でもしているはずだ。

「今日は季節折にあるパーティーだ。いつもなら施設の奴隸に行か

せるが……これはそうもいかない

そう言つて主は俺を見下ろす。

「Jのパーティーにはハツフルパフにレイブンクロー、スリザリン……あの三家が来る。表面上、我々より地位のある彼らをパーティーがある最中に何かあつてはいけない」

だから俺はこれを施設に送らなかつた、と主は言つ。

「これをお前に任せる。……パーティーを失敗させるなよ。そうなればドラゴンの巣やら南極やらに“吊す”からな」

そう告げて主は出て行け、と仕種をして俺を追い払う。

俺は表面上何ともないよう取り繕い、部屋から出て行こうとした。

「ああ、パーティーは三日後。この魔法省の広間で行つと思つ出したように主は告げる。

「……分かりました」

俺はそう告げ、頭を下げてから部屋を退出する。

人の気が一つもない廊下をズンズン歩いて俺は魔法省を出る。外に出た瞬間、俺はペタリと地面に座り込む。

「護衛……任務か」

まさか、暗殺の次に護衛が来るとは思わなかつた。

だが……護衛とは言つても堂々と人前に立つたりする奴ではないだろう。

本職が暗殺の俺を護衛に回す……それは人前に見つからぬ様に護衛をし、かつ敵を殺せつて事かな？

（……そこまで分かつてゐるなら襲われる前に暗殺すれば良いのに）
多分、主は敵が誰だかまで知つてゐるに違ひない。

魔法大臣なんだし。

（とりあえず、三日）

その間何も命令が無ければ暇になる。

（暗器調整にでも狩るかなー…）

久々に獣でも狩つて捌いて……焼く。

（後は、会場の下見かな）

退路や秘密通路を確認しておかないと。

「 い、おい！」

ビクリとその大声で俺は意識を戻す。

「 大丈夫か？」

心配そうに俺を覗く少し癖のある黒髪で黒目の中の男性。

「 あ……大丈夫、です」

「 本当か？」

そう言いながら男性は俺の額を触ろうと手を伸ばして来た。

……奴隸の烙印を見られれば、きっと殴られる。

俺はパシリと男性の手を払う。

今、此処で殴られれば任務に支障が出るかもしれない。

それだけは避けたかった。

「 ……」

男性は驚いたように俺を見たが、触ろうとはしなかった。

「 わりい、なんか嫌だつたみたいだな」

そう告げてニッカリと何か隠しているように笑つ。

「 少し尋ねたいんだが …」

言いにくそうに男性はキヨロキヨロ暗闇に目線を動かしながら問つ。

「 此処は何処だ？」

……此処、ロンドンと言つたら誰でも知つている。

知らぬままに来るのは孤児の子供くらいで大人が問うなんて … 余所の國の者としか考えられない。

「 ……ロンドン」

俺は男性に警戒しながらも答える。

「 ロンドンか …… そこまで来たのか」

男性はそう言つて東の空を見上げる。

ジー……と警戒しながら見つめている俺に気づいたのか男性は慌てて告げる。

「 いや、俺は余所の國じやないんだ。少し追いかけっこをしていてね

それでも、俺の警戒は揺らがない。

そんな事を言いながらも情報を盗みに来た奴らを今まで見たことがあるから。

「晴れないみたいだね。……俺の名前はイグノタス。イグノタス・ペベレルだ」

ペベレル家を調べると良い、昔からイギリスにいるから、と男性イグノタスは言つ。

「兄貴達は少し連絡が取れないけれど……記録があるはずだ」

そう言つてイグノタスは立ち上がる。

「しばらくは此処、ロンドンにいる。その後は分からぬいが……また、会えたら良いな」

そう言つてイグノタスはマントを被る。

するとイグノタスは消えた。……否、見えなくなつたのだ。

彼の魔力は依然、彼が居た場所から感じる。

だが、しばらくすると音も立てずに彼はこの場から去つて行つた。
(……見えなかつた)

魔力を探知出来たからこそ、分かつたが視界では最後までマントを被つた彼を見ることは出来なかつた。

(気配も、音も消している)

：一体、彼は何者だろうか？

(調べてみるか)

最も、それが出来るのは護衛任務が終わつてからだろうけど。
冷たい風が吹き始める中、俺はイグノタスが去つて言つた方向を見ながら立ち上がる。

「ペベレル家、か」

俺はポツリと呟き、イグノタスとは逆の方向へと足を踏み出した。

パチン、と音を出しながら俺は“姿現し”をする。

「あ、気持ち悪い……」

禁じられた森では普通だったから激しい揺れとかには平気な体質かと思つたんだけど……

ビリやら違つたらしい。

「アル、ソファーで横に寝ておいて」

何か作つてぐるから、と俺はアルに告げる。

「んー……」

アルは短く返事をし、フランフランとソファーへと向かつて行く。

（姿現しに酔つたなら寝かせておくのが一番だしな）

飲み物は……ホットミルクくらいで良いかな？

グテエと倒れるアルを見届けてから俺は厨房へに入る。

（ミルクは確か……あ、あつた）

カタンとミルクを取り出し鍋に注ぐ。

ミルクを注いだ鍋は魔法を使って出した火の上へと置く。

ブツブツとミルクが沸騰するのになまり時間はかからず俺は杖無しの無言術と言つ荒業で火を消した。

「コラブに注いだら……持つて行くだけか

ホコホコ湯気を立てながらまだまだ熱いだろうホットミルクを持つてアルのいるソファーへと向かう。

「アルー、出来た……あー、寝ちゃったか

ひょっこりとソファーを覗くと顔が青いアルが眠っていた。

俺は魔法にてパツと引き寄せた毛布をアルにかける。

(無茶、させたかな?)

アルから魔力がしない訳ではない。

ただ、無意識に押さえているのか魔法使いとは感じ方が違う。これは魔法を使った事のない魔法使いと同じ感じ方だ。

……つまり彼は一度も魔法を使った事がない。

多分、彼は今もずっとマグルだと思つてゐるはずだ。

「なのこゝきなり姿現しや姿くらましだもんな

やつぱ、無茶だったかな、と俺は苦笑しながら言つ。

「でも……いつまでもマグルではいられない」

自分でコントロール出来ないと“酷い事”になってしまつ。

「やるやう……本格的に教えないダメかな？」

でも、その前にアルに魔法使いだと告げないとね。

アルに渡すはずだったホットミルクを飲みながら俺は今後の予定（勉強）を頭の中で作つていつた。

ガヤガヤと煩い会場。

あら、お元気？ええ、そちらこそお元気かしら？オホホホみたいな会話からどうしてあんなに騒げるのだろう？

（……それなりの人数がいるからか）

今日はかなりの人数……ざつと一、三百人は来ている。

この中から、見たこともない三家を護らなければならぬ。

（敵が何処から来るか、だよな）

それによつて避難させる通路も変えなければいけない。

（……慣れている魔法省だけれど念には念を入れて隠し通路とかは確認した）

後は……やつぱり三家を見つけないといけないか。

チヨロチヨロと、人目に着かない様に薄暗い場所で会場の近くを三家を探すためにうろついていた時だつた。

「……なんだ、この餓鬼」

ヒヨイと襟首を取られ、持ち上げられる。

「つ……」

（う……そ……）

会場に近いけれど薄暗いから気配は出していた。敵に分かるように。

（でも、足音は消していたのに……）

確實に出していたのは気配だけで、俺の存在感は出しても場所が分からぬように足音を消した。

「……何で餓鬼が此処にいる？」

ギロリ、と紅い目が俺に向けられる。

（う……わつ……）

黒い……魔力を纏いながらも女？と間違えるくらいに見事に顔が整い体が細い、男。

流石に筋肉の作りが違うのが唯一の見分け方だった。

「ス、スリザリン様！」

ガヤガヤと煩い中、俺の主が声を張りながらこひらへ駆けて来る。

（この人がスリザリン……）

「そいつは奴隸です。スリザリン様のお手が汚れますゆえ、お離し下さい」

チラリと汚い物を見るかのように横目で俺を見る主。

「奴隸、か……」

今だ俺を睨みつけながら咳く、スリザリン。

「はい」

早く離せ、と言わんばかりの笑顔で主は答える。

「なら、俺が一時期貰つてもいいな」

「…………はい？」

ピシリと張り付けた主の笑顔が凍るがスリザリンは気にせずに俺を掴んだまま、立ち去った。

スリザリン……様はどんどん会場から離れて行き、暗闇へと歩いていく。

「あ、スリザリン殿」

こっち、空いていますよ、とヘラヘラ笑いながら薄い水色に藍色の瞳をした男性が現れた。

……いや、彼が現れたと言うよりスリザリンが彼等の場所へと来たと言つのが正しいのかもしない。

不釣り合いな俺を掴んだまま。

「？…………その子供は？」

キヨトン、と彼は首を傾げる。

「…………奴隸だそうだ」

スリザリン様がそう告げると彼はジッと俺を見つめる。

「へ……え……奴隸、ねえ」

あいつらも落ちちゃたかな? と言いながらも彼はポンッと俺の頭へ手を乗せる。

「僕はラステル。ラステル・ハツフルパフだよ」

その名前に俺は固まる。

（ハツフルパフ! ?）

こう、ヘラヘラしていて軟弱そうな彼がハツフルパフ、……（でも、ハツフルパフならば俺は護衛をしなければならない……よな?）

運が良い事に彼等が一緒にいる。

バラバラで居られるよりかは護りやすい。

「ハツフルパフ家はお前か。……レイブンクロー家は誰が来た?」

ヘラヘラと俺へ笑いかけているハツフルパフ様へとスリザリン様は問う。

「この面子なら分かるでしょ?」

僕に君なんだならレイブンクローもあいつでしょ、とハツフルパフ様は俺から目を離しスリザリン様へと目を向ける。

「あいつか

「……たまには華が欲しいよねー」

「なら、お前達のどちらかが変われば良かつただろう?」

スッと暗闇からボサボサの金髪に薄い緑色の目の男性が現れる。男性はハアとため息をつきながら言う。

「どうせ押し付けられたんだろう?」

「……」

なら、諦める、と沈黙を肯定と受け取った男性は言つ。

「さて……スリザリンはこの子供をどうしたか? たんだ?」

離してやれ、と言いながらもチラリとレイブンクロー様の薄い緑色の目が俺を見る。

（レイブンクロー、か……）

レイブンクローの言葉を聞いたスリザリン桜は離されても地面に激突しない距離でいきなりパツとスリザリン様は俺を離す。

「……特にない」

「「……え？」」

俺が着地し、立ち上ると同時に一人の間抜けな声が重なる。

「……あいつと一緒にいるよりかはマシだろ？？」

ボソリと告げたスリザリン様。

俺にはあいつが誰だか分からなかつたが一人には分かつたのだろう。

あー、とか声を上げながら一人は首を縦に振る。

「確かに……あいつといるよりかはマシだねー」

「となれば、少々時間をかけた方が良いだろうな」

ブンブン首を縦に振振りながら言うハツフルパフ様に続きレイブンクロー様がニヤリと嬉しそうに……いや、怪しげに笑いながら言った。

「……………そうだな」

怪しげに笑うレイブンクロー様を見て、同意はしているものの口元は激しく引き攣っているスリザリン様。

「じゃあ、僕からね！！」

身を乗り出しながら元気良く言うハツフルパフ様。

「最近さ、ヘルガが特に可愛いの！！いや、勿論ヘルガ以外の子も可愛いんだけどさ。あ、ヘルガは調度君と同じ歳くらいの娘ね。そのヘルガがな、最近よく二階へと上がる様になつたんだ。それで二階へ上がるには階段があるだろう？いつもは上手く上り下りするんだけど昨日は下りの時に一段踏み外したみたいで「ゴロ」「ロ転がつて落ちたんだ。それで僕は心配してすぐさま駆け付けたんだけど、その時に涙目になりながら見上げたあのヘルガの顔！！すつごつつく可愛いんだよ！！他にもさ」

……レイブンクロー様や時々スリザリン様も交えたハツフルパフ様の三人の親馬鹿自慢話しさは口付が変わつても終わらずに、俺が解放されたのは日が昇り辺りが明るくなつてからだつた。

三十一話（後書き）

「アル、良くな聞いて？」

帰ってきた翌日の朝。

何故昼かと言うとアルが大爆睡で先程やつと起きたから、だ。

「ん？ 何？」

モグモグと昼食兼朝食を食べながらアルは答える。

「アル、君は魔法使いだ」

「…………〔冗談にしてはおもふうよくないほ？」

「……昼食をまず飲み込もうか」

ムギュムギュ、ゴクンと飲み込んだアルは再度言つ。

「……冗談にしては面白くないよ？」

「冗談ではない。アルには魔力がある。ただ、無意識に押さえているのか使われた事が無いだけだ」

「…………本当に？」

アルは信じられないよつと言つ。

「うん」

俺はそれに即答し、話し始める。

「だから魔法を教える、と言いたいけれど魔力がないから教えられるのは知識だけ。……それでも、する？」

「……うん。いや、はい！やります！」

その言葉に俺はニヤリと笑う。

「じゃ、今日から一時間から三時間くらい。毎日ね」

「うん……」

アルはこれでもかと嬉しそうな顔で頷いた。

散々三人……特にハツフルパフ様の自慢話しを聞いた後に解放された俺はフラフラと主が居るだろつ魔法大臣室へと入る。

「失礼、します……」

コンコンとノックをし、一じう告げてから俺は扉を開く。ガチャリと扉を開いた瞬間にダンッとその場に相応しくない音が響く。

（…………え？）

ズキリと鈍い痛みと共に、右頬からヌルリと何が流れ伝う感覚がする。

グイと右手で痛む右頬を拭い、見てみると右手には血。

（…………まさか）

俺は首を少し後ろへ捻り壁を見てみると壁には突き刺さっている短剣。

先程の音は多分、短剣が壁に突き刺さる音だったのだ。

俺はユツクリと顔を戻し、短剣を投げた本人だろう主を見る。

「…………隨分と遅い帰還だな？ さぞやあの三家と仲良くなつたのだろう？」

ピキリと顔に青筋が入りながら低い声で告げる主。

「見つかりやがつて。何の為にお前にさせたと思つている？」

その言葉に俺は俯く。

敵襲は無かつたものの、隠密にと考えていた主の意思を実行出来なかつた。

暗殺には致命的になる“人に見つかる”という事をして。

「それなりの処罰は考へてある」

カツン、カツンと足音が部屋に響く。

足音が止まつたと共にガシッと頭を捕まれた。

主に捕まれたまま、パチンと音とと共に部屋の景色が遠ざかつた。

パチンと次に見えた景色は火山だった。

「…………え？」

（先程まで部屋に居たよね…………？）

ポカンと口を開けながら周りを見渡す。辺りは岩だけで凄く熱い。

「此処は巨大で凶暴な火トカゲがいる所で有名な通称ファイヤー・デッドだ」

主はそう言つて俺を離す。

「レビコーパス」

主は俺に木の棒を向け、そう言つた。

次の瞬間、俺は見えないものに足を取られ逆さまになりながら宙へぶら下がる。

「…………このくらいか」

主は杖を振りスウと少し高度を下げた。

「今日から三日、宙吊りだ」

逆さまになつた主が口を開き話す。

「迎えは三日後だ」

ザクッと音を立て主はグルグルと回り、消えた。

ジワジワと蒸し暑い中逆さまの宙吊り。

（…………あ、つ）

ダラダラと出てくる汗は逆さまなので自然と顔まで垂れ、額からポタポタと地面へ流れ落ちる。

もう、何時間経ったのだろうか？

吊された当時は血が逆流しているのか頭が痛く、そして気持ち悪かつた。

今では頭が痛いや気持ち悪いを通り越し何も考えられない。

そんなボンヤリとした頭で逆さまになつた景色に見慣れない生き物がノソリと現ってきた。

その生き物は全長一メートルはとうに越えているだろう大きさだったが姿形はどことなくトカゲとソックリだった。

ただ、トカゲとは違い背中には鋭い刺があつたし、尻尾にもそれはついていた。

足には太く鋭い爪に口には鋭く尖つた牙。オマケにボウと小さくだが火を吐いている。

そいつはノシリ、ノシリとユックリ歩いていたのだが俺の近くで足を止め見上げて來た。

黄色の目がギロリと俺を捉える。

……そいつが何を思ったのかは分からない。ただ、食料を見つけたとでも思ったのか俺を見上げ離れなかつた。

（…………ああ）

このまま、焼かれるのかもしれない。

あいつは先程見た時以外、火を吐いていないのに漠然と俺はそう思つた。

（もし、そうなつた……ら……）

動けない俺は焼かれるしかないだろうな、と俺はボンヤリとしながらそう思つた。

しかし俺が思つていた様にはならず、暫くは膠着状態が続いた。

膠着状態が破れたのは日が傾き、もうそろそろ沈むんじゃないかつて思う程のギリギリな夕方。

俺が食われた訳ではない。焼かれた訳でもない。あいつが動いた訳

でもない。

なら、何故膠着状態が破れたのか。

それは … 増えたのだ。

あいつと同じ生物だろう奴らが今ではウヨウヨ沢山集まり、揃いも揃つて、ギロリと全員俺を見上げている。

奴らは俺を襲う気配も、焼く気配も見えない。

ただ何故か見上げいる。

そして … また膠着状態へと入つていった。

それからも奴らは微動だにせず見上げ続け、俺はそれに汗を垂らしながらも二日間吊される事となつた。

三十一話（後書き）

「「」」

俺が羊皮紙に羽根ペンにインクに教材にと用意をしている最中にアルが話し掛けてきた。

「んー？」

俺は準備をしながら返事をする。

「「」Q、出てきた生き物は何？」

アルはペラリと紙を見せて指を置く。

「あー……そいつは火トカゲだ。火トカゲは……」

ふつと思い浮かんだ考え。

(…………どうせならこいつを授業にするか?)

アルが興味あるみたいだし、どうせアルだけだから興味がある物から始めてても良いだろう。

「「」」

急に口を紡いだ俺にアルは声をかける。

「授業で教えるよ。後少しで準備が終わるから待っててくれる?」

「はーい」

アルは返事をした後に本へと視線を落とした。

俺はそれを見た後に教材へと手を伸ばした。

三日間、吊された俺はフランフランで下ろされた。
その日は意識がボンヤリとしていて記憶があまり無い。
だから何をしたのか分からない。
……下手な事をしていいないといいけど。

「……大丈夫でしょうか？」

甲高い声でひょっこりとクリクリした大きなブルー色の目が目の前に現れる。

「……はい、お気遣い構いなく」

彼はルルーシュ様。

この魔法省へと雇われている屋敷しもべ妖精と言われる種族の者だ。
その雇われている屋敷しもべ妖精の中でも彼は総大将みたいな偉い地位にいるお偉い様。

……最も俺ら奴隸にとつては、だけれども。

「そう、でしたか」

ルルーシュ様は少し顔を歪ませたが何も言わず隣に戻りトントン材料を切っていく。

（だから……あまり好きじゃない）

今日は夕食を手伝うように、と言われ彼らと一緒に厨房に居るが俺はあまり彼らを好きじゃない。

……彼らは俺らを自分達より下である奴隸として見ない。
そして、自分より下が居ないかの様に俺達奴隸にも“人間”として扱う。

（敬語なんて、慣れないし……）

何より奴隸を認めていないと言つのは奴隸である俺達を認めていいと感じてしまう。
……奴隸である俺達なんてこの世に居ないと、錯覚してしまうのだ。

「……気楽に、作つて下さい」

失敗しても我々がいますから!とルルーシク様は明るく言つ。それに対して俺は頭を下げ、分かりましたと告げる。顔を上げ、調理に戻る際チラリとルルーシク様が悲しそうに顔を歪めていたのが見えたが俺は見なかつた事にした。

量が多いからか数時間かかつてしまつたが後少しで料理が完成する、という段階に来ていた。

いきなりドゴンッと爆発するような、また何か殴られて壁に叩きつけられた様な感じの音が響く。

「……何があつたんですか!?」

いち早く隣にいたルルーシク様がこう叫びながら現場へと走つて行く。

俺はまず先に料理を落ちない、そして何か投げられて来ても大丈夫に作られた棚に入れ現場へと向かう。

「お、落ち着いて下さい!」

大声で焦つた様なルルーシク様の声が響く。

(……ああ、あの人か)

現場へと着いた俺の目の前に広がる光景。

それはワタワタ焦るルルーシク様に数人の屋敷しもべ妖精が沈没した中に立つてゐる女性。

「ふんつ、お前か」

この人は確か呪文に関する部署……新しい呪文を作つたり取り込んだり広めたりだつたつけ?そこのお偉い様だ。

「相変わらず、穢わらしい」

フンツと鼻を鳴らしながらも見下した目で彼女は言う。

……彼女は俺達奴隸は元より屋敷しもべ妖精をかなり嫌っている。きっと今回もストレス解消を伴つた暴挙に出たのだろう。

ドンッと音が聞こえそうなくらいに彼女は屋敷しもべ妖精の腹を力いっぱい蹴る。

「あ、の……悪いのですがどうか……落ち着いてください……」

ピヨコピヨコとジャンプをしながらルルーシク様は彼女を止めようと必死に言葉を紡ぐ。

「……貴様にも見飽きたな」

スウと細められた目は妙な雰囲気をさらけ出していた。

(…………このままじゃ)

ルルーシク様が殺られるだろつ。

そう思う程、彼女の雰囲気は危ない。

ルルーシク様が殺られる前に俺はスッと彼女の元へと進み出る。

……身分が強い現代、俺からしたらお偉い様を殺される訳にはいかない

「失礼します」

すっと膝を床につけ頭を下げる。

「ルルーシク様は俺より上のお方、……」

「楽しむならお前、か？薄汚い奴隸」

「…………」

ギスギスと刺さるような視線に俺は手を握る。

「私なら何をしても構いません！！ですから私を……」

ルルーシク様がピヨンと跳ねながら話していたがそれは最後まで続かなかつた。

何故なら彼女がルルーシク様を蹴り飛ばし壁へとぶつけたから。

「貴様よりは楽しめるだろつ」

「ヤリと笑いながら彼女は言つ。

「なあ？血まみれの奴隸？」

ついて來い、と言い彼女は去つていく。

(…………とりあえず急所は底おう)

彼女が何をするかは分からぬが主みたいに吊しではなくで今まで
も殴るだけの暴力だつたから多分、殴られたり蹴られたりするだけ
だろう。

「……い、けませ……ん」

小さく聞こえたルルーシク様の声。

俺は振り返りルルーシク様を見るが彼はグダリと倒れている。

起き上がる気力がないのだろう。

「……後は、頼みました」

俺はルルーシク様に向けて言つた後に背中を向ける。
そして振り返らずに彼女を追うために駆け出した。

三十二話（後書き）

「さて……授業を始めようか」

「はーい！」

早く、と言わんばかりにアルは体を揺らす。

（……そんなに揺らさなくとも）

授業は逃げないよ？

「……今日は前回アルが気になっていた火とかけについてだ」

「火とかけは大概火の中にはいる。例えば……暖炉の中とかだね。現在の火とかけは先程言ったように暖炉の中に居るくらい小さい物しかない。だが、前回読んでいたから知っているだろうけど俺の生きていた時代は普通に大きい火とかけはいた。それこそ横たわった大木と同じくらいはあつたんじゃないかな？」

「あ、そうだ。勘違いしないように告げるけど火とかけは炎を吐かないから。俺が子供の頃に吐かれた炎はただ単に火から出てきた火とかけの口に残っていた残り火だよ。だからあの火とかけは一度しか火を吐かなかつた」

知識が無かつたあの頃は本当に恐怖だつたけれどね、と俺は話す。

「「「」」」

ビシッと手を真っ直ぐに天井へと挙げる。

「うん、生徒に見習わせたいな。

「火とかげって何にも使われないの？」

「ドラゴンとか色々使われているんだよね？」アルは言つ。

「何処で知つたんだろう？」

（俺の書物かな？）

そう思いながらも俺は口を開く。

「現在は魔法薬に使われるか暖炉に入れるかしかないな。昔は大きかつたから皮を剥いで手袋や鞄や色々作れたり、魔法薬にも使われてた」

肉だつて食べられてたな、と俺は告げる。

「……食べてたの？」

アルは恐る恐る聞く。

「普通に食べてたよ？」

食べ物だつて今みたいに豊富では無かつたしな。

「飼育は……まあとりあえず火の中に入れとけば死ない」

時折何かを放れば生き延びるよ、と俺は言つ。

「……隨分、適當なんだね」

「そんなものだよ」

目も向けてない、と言つのもあるけど生物なんて未知なるもんだから、と俺は言つ。

「それに全てを知つたらつまらないだろ?」

ニヤリと笑いながら俺はアルに言つ。

「……そうだね!」

アルもニヤリと笑いながら告げ、羽根ペンを持ち羊皮紙へと走らせた。

「ぐつうう……」

ギリギリと食い込む手を俺は引っ搔く。

「奴隸のくせに、よくも俺にぶつかつたな！」

俺の首を絞めている本人は鬼の形相で俺を睨みつける。

こうなつたのはただ単に俺の不注意。

ルルーシク様から頼まれた材料を何度も頭の中で繰り返し、前方への注意が切れていて男性とぶつかつた。

男性も初めはすぐに謝つた俺に気にしていないよ、と言つていたの

だが俺が奴隸と分かると態度は一辺、180度変わつた。

穏やかそうに笑つていた顔から眉をこれでもかと吊り上げ顔を真つ赤にし怒鳴り始めた。

最終的には先程の状態……窒息死しそうなくらいキック首を絞め始めたのだ。

始めこそは抵抗して良いのかな?とか考えていたけれど現在はただ、空気を求めて男性の手を引っ搔く続けている。

「そろそろ死ぬか?」

呻きながらも男性の手を引っ搔く力が弱まつていつた俺に対し男性はニヤリと笑いながら言つた。

（も、う……）

頭はボンヤリとしはじめ俺は内心死ぬのか、と思った瞬間だつた。

ザシューと音が響いたかと思うとボトリと俺の首を絞めていた手が落ちた。

「ゲホッ……」

涙目になりつつもスウと空気を沢山すいながら俺は男性を見る。

男性は肘あたりをもう片方の手で覆い隠しながら叫んでいた。

スツと地面を見れば肘辺りから先程首を絞めていた指先までが落ちている。

（ああ……成る程）

誰かは分からぬが俺の首を絞めていた腕の肘から下を切つたのだ。
「子供を叱るにしてはやり過ぎでは？」

「バサツと放つたマントから男性……ペベレルが現れた。
どうやらまた姿を消し、気配を殺していたようだ。」

「……そいつは、奴隸だ。しかも……暗殺戦闘、だ」

「男性は苦しそうに、しかし勝ち誇つたように告げる。

……まるで自分のしている行動が正しいかのようだ。

「だから？」

周りは男性の言葉に当たり前だ、と言わんばかりの視線を寄越した
にも関わらずペベレルだけは違つた。

「奴隸だからどうした？ 奴隸とはただ親がいな子供を我々がそつ
位置付けただけだ」

貴様はその子供を殺そうとしたんだが？ とペベレルは汚物を見るか
の様な目で男性を見る。

「そいつは……子供ではなく奴隸だ」「
「奴隸ではなく子供だらう」

意見が違つて一人は睨み合つ。

「……貴様と話す時間はどうやら勿体ないみたいだな
暫く睨み合つていたペベレルはこう言つた。

「行こう」

そう言つて俺の手を掴みその場から離れていく。
手を繋がれた俺はされるがままにペベレルについて行くしかなかつ
た。

「こ」のあたりなら大丈夫かな

そう告げてペベレルは手を離す。

「また会つたね」

俺と向かい合いながらペベレルは言つ。

「……まだ居たのか」

俺はてっきりもう去つてゐると思つていたんだけど。

そう思いつつも言つとペベレルは笑つた。

「今日去ろうと思つていたんだよ。でも外に向かつて歩いてると君が居てね」

あのままじゃ死にそうだったから助けてあげた、とペベレルは言つ。

「この前のお礼にね」

ほら、此処が何処だか教えてくれたでしょ?とペベレルは言つ。

「別にいらない」

奴隸にとつては人助けは当たり前だし。

フイと俺はペベレルから視線を外す。

「……早く行つた方が良い」

奴隸を助けたとなると外聞が悪くなる。

例えば宿泊出来なくなつたり、商品を販売されなくなつたり、場合によつてはその土地のお偉い様から呼び出され殺されたり。だから広まる前に此処を去つた方がペベレルにとつては良い。

「……そうだね」

そう言いながら寂しそうにペベレルは笑う。

「また……また会えたら今度は何か頼み事をしても良いかな?」

縋るような目で俺にそう問う。

「……その時によるな」

どうしてそんな目をしているかは分からない。

ただ、こいつが子供……それも奴隸に縋る程追い詰められている事だけは何となく分かつた。

「生きてなければ願いも何もない」

そう、俺は告げた。

奴隸に縋る男性に。

「……それは君も同じだよ。必ず願うから生きてよ

スッヒ、田に意志が灯った田でペベレルは俺に囁つ。

それを俺は何も表情を変えずに見る。

「……じゃあね

バサツとマントを被り気配を消したペベレルを俺は見送る。

(……変な奴)

俺を子供と見、縋る男性。

おかげで普段の対応をせずに少し、数年振りの素が出てしまった。

(でも……初めもあんなんだったからね)

別に良いだろ。う。

ペベレルの魔力がロンドンを出ると共に俺は市場へと向かった。

三十四話（後書き）

「今日は……何にしようか

昨日は火トカゲをしたからな……

「あ、じゃあドラゴンが良い……」

「ドラゴン、かあ……

「『ドラゴン』って狂暴だけれどカッコイイよね……」

田をキラキラしながらアルは言つ。

「ハンガリー・ホーンテールやノルウェー・リッチバックとか狂暴だけれどカッコイイし、火の玉とかもカッコイイ」

後はねーとアルは次々ドラゴンの品種を話していく。

（……ドラゴンにするかな）

憧れも良いけれど……ドラゴンの対処方法とか教えてくおないと何だか今の勢いで本物にも突つ込んで行きそうだ。

（腕がないのにそれは自殺行為だしな）

あいつらは火は吐くし、鋭い牙に爪。

尻尾だつて危険だし皮膚は硬い。

そしてあいつらは飛ぶ。

ドラゴン相手には普通、数人の魔法使いがつくのが定石。

（や）ら辺も言い聞かせないと……）

俺はため息をつきながら手を呂く。

「分かった。授業はドラゴンにしようつ

だから静かに、と言つとマルは一瞬にて静かになる。

……人間、好きな物に対する態度つてのは打つて変わるよな。

そう思いながら俺は口を開いた。

ペベレルがロンドンを去つてから幾つかの年が過ぎた。

その間も俺は変わらずに主に仕え、暗殺をしたり料理や掃除や材料調達など色々な仕事（命令）をこなしていた。

最近は特に暗殺の命令が多く、昨日も処理をしたくらいだ。

「……これまた溜まりましたね」

ちなみに今日の命令はトイレ掃除。

しかしだたのトイレ掃除ではなく今日掃除する所は外の共通トイレ。この外の共通トイレと言つるのは文字通りに外に掘られているだけの共通トイレである。

その上外にある共通トイレは主に身分が低い者と……人間ではない生物が使用する。

人間ですら出る物は臭いと言つのにそれが生物となると臭さは倍増してしまつ。

……まあ、一人じゃなかつたから運が良い。

「……本当、運が悪かつた」

今日は戦闘奴隸の人と二人で掃除だ。

残念ながら振り分けられた番号を教えて貰えなかつたから呼びようがないけど……まあ、必要ないだろう。

「……掃除を始めましょうか」

「…………ああ」

スッと配分された布で鼻を覆い、掃除道具を手にする。

「…………逝くぞ！！」

俺と隣の戦闘奴隸は汚い物で溢れているトイレへと足を踏み入れた。

(お……わった)

日が暮れて来た頃に掃除は終わった。

緑やら青やら少しカラフルな物もあつたが結局は同じ物。

それを掃除するのは凄く勇気が必要だった。

(…………臭い)

クンクンと匂いを嗅ぐとあの中に居たせいが自分の匂いが果てしなく臭い。

(報告より先に体を洗おう)

洗わなければきっと店や魔法省なんて入れないだろう。

(…………うん?)

気配が薄いから……賞金稼ぎだろう人間が三人、俺達の近くにいる。

「……俺は先に行ってるな」

そう告げ、スッと立ち上がり去っていく戦闘奴隸。

(…………つまり俺一人で相手をしろって事か)

まあ、彼の仕事は人を必ず殺すという事ではない。所詮お偉い様の暇潰し程度の見世物殺り合いだ。

殺す事もあれば怪我だけの時もある。

(さて……殺りますか)

スゥー……と意思を沈め感情を消す。

クルリと敵に向かい会う様に体の向きを変え、主要暗器である糸に手をかける。

暗器の綱糸を手に絡め、俺はゆっくりと走り出す。

だが、走り出した先は敵ではない。一見ジョギングをしているかのようすに俺の周りから少しずつ距離を伸ばし敵の近くまで走り、元の場所に戻る。

初めこそはいきなり動いた俺に警戒したような気配だったが徐々にその警戒が緩み元の場所に居る現在は警戒などなかつた。あるのは殺気のみ。

ザワリザワリと動かない俺に対し徐々に殺気が鋭くなつてくる。

既に辺りには殺氣が充満し、緊張感が最高峰になつたのを見計らい敵は飛び出してきた。

その数、三人。

俺はスツと綱糸を絡めてある右手を差し出し、ニヤリと笑う。差し出した右手をギュツ力を入れ綱糸を持ったまま音もなく握りしめる。

ブシャアアアアアと水が勢いよつ流れ出すかの様に三人分の赤い血が流れ、三人の肉体は張り巡らされた綱糸によつて粉々になつてボトボト地面に落ちた。

ポタポタと三人の体がないにも関わらず綱糸に残つていた血が地面に落ちるが地面は既に肉塊の集まりで血に染まつていた。

「トイレには……ああ、ないな」

一応、肉塊がトイレに落ちない様に氣をつけてはいたが再度遠田で確認をする。

もし、あつたなら一人でまた掃除をしなければならなかつただろう。ホツと安心した俺は肉塊をそのままにしてこのトイレ手前にあつた川へと向かう為に背を向けた。

「さて、先程様々な名前のドラゴンが出ていたが、ドラゴンは様々なことに使われている。現在なら革手袋や魔法薬の材料、狂暴さを買って金庫の番をさせたりな。俺達の頃は血を飲んだら不老不死になれると言えられていてな、それを知ったマグルがドラゴンを倒そうとして食われた事件が沢山あった。……先程も言つたが、ドラゴンは狂暴だ。尻尾には棘がある。爪や牙は肉を切り裂くのに最適なほど鋭いし、火は吐く。オマケに呪文を跳ね返すほど皮膚が固くて厚いから魔法使いですら数人係で一匹の対応をするのがやつと。それをマグルが倒すなんて無理だ」

ジッとアルを見つめ、言つ。

「……だから、現在では飼育禁止になつてゐるし、野生のドラゴンですら常に見張つてゐる

好きなのは良いけれど、危険性も知ることだ、と俺は告げる。

「……一人では無理？絶対に？」

ジッと俺を見ながらアルは問う。

「……そんな芸当が出来るのは数人くらいだ。だが、その数人に…自らが入るとは思わない方が良い」

「……なら、その数人に入る」

アルは何かを決めた、そんな目をしてゐる。

「一度……見てみたい。触つてみたい。そつするこはドラゴンを少なくとも気絶させないとダメでしょ？なら、そうなればいい。俺が、数人に入れば」

「ダメだ！！」

俺は声を荒げ言葉を遮る。

「それならば、俺は教えない」

アルの言つている事は分かる。

見たい、触りたい。それは当たり前の欲求。

だが、その対象のドラゴンを一人で倒す それはとても難しい事だし、力もいる。

だから一人で倒せばアルは新聞に乗るだろうし、本人の意思とは違つても有名になるだろう。

そうなれば一見、華やかしく見える。

けれど現実は……ドラゴンを倒した力を恐れられ一人になるだけだ。又はその力目的に利用される。

（……それだけはさせない）

アルがドラゴンを倒す氣なら俺はこれ以上魔法を教えない。

「なら、自分で学ぶ」

アルは今だ真っすぐな田のまま叫げる。

「……そつか」

俺は一回アルを見、部屋から出て行った。

二十六話（前書き）

初めてハリポタを読む方に分かるように用語解説っぽい物を後書きに書き始めて大体、三十五話。

いつの間にか用語解説風から脱線し、itech物語り風に成りはじめました。

……「ん、頑張って解説風にしていたんですけどね。

ネタが無い その場を何とか乗り切る 何故か物語り風に……

自分の首を苦しみ始めました（苦笑）

今や本編よりも考えるの大変です。

読まれて無くとも、最後までやると決めていたので止めはしませんけど。

物語り風だと最後まで行かずに終わりを作ってしまいそなんですよね……

用語解説って難しい……

あ、読んでいて分かるでしょうが一応後書きの設定は死んだ世界です。

死後の世界とも言いますかね？

だから頑張れば色々なキャラが出せる……あ、その手があつたな。

因みに、ゴドリックの目が見えているのは単に後書きまで見えてなかつたり書きあずら……ゴホン、不便だなと思ったからです。

バササ……と鳥の羽ばたく音で俺は田を覚ます。

(…………ん?)

スウと暗闇の中、目を開く。

ホウホウと鳴き声が近くから聞こえる為入ってきた鳥はふくろうなんだろう。

ボンヤリと田が暗闇に慣れてきたのか周りが見えてきた頃にはふくろうはバタバタ羽を動かし怒つてこようやうだった。

「…………主からか」

ふくろうの足には羊皮紙と呼ばれる紙が括りつけてある。

俺はふくろうへと手を伸ばすとふくろうは不機嫌そうに足を差し出す。

ガサガサと音を立て羊皮紙をふくろうから外すとふくろうは一田散に飛び去った。

俺はシワシワな羊皮紙を広げる。

今すぐ来い

(…………今すぐ?)

書かれていた内容は一言。

(…………急な命令でも出来たかな?)

そう思いながらも羊皮紙を丸め捨てる。

俺はスッと立ち上がり暗器と短刀を持ちこの場所を離れた。

外は空が明るみ始めたくらいでまだ田は昇つておらず若干薄暗かつた。

（……随分早いね）

ヒュウヒュウ冷たい風に体が冷えながらも俺は魔法省へと向かう。數十分くらい歩いただろうか？

目の前に見慣れた建物が見えてきた。

「……もひ、少し」

冷たい風に当たり体はガチガチに冷えていたが目的の魔法省は後少し。

俺は震える足を無理矢理一本前へと動かした。

魔法省へついてホツとしたのもつかの間、俺は急いで魔法大臣室へと向かう。

「失礼します」

ノックをし、こう告げてから中へと入る。

「……………来たか」

見ていた書類を机に置き、カタンと主は席を立つ。カツカツと主の足音が部屋に響く。

「……………行くぞ」

ガシッと頭を捕まれたかと思つとグルッと回り視界から部屋が消えた。

パチンと現れた場所は見慣れぬ土地。

薄暗く、周りに木々があるから森……だとは思つけどどの地方かす

ら分からぬ。

「さて……今日こんなに早くお前を呼んだのには理由がある」

スツと主は俺の頭から手を話し俺を睨みつける。

「俺は昨日知ったんだがな、最近ロンドンでとある尊が流れている「何でも……金色と見間違うくらいの髪色の子供が最近魔法省をよく思つていない人達を暗殺している、と」

スツと主は目を細める。

「現在、奴隸の中では暗殺をしているのはお前しかいない。……お前以外の子供の可能性も考えたが、確認を取ると此処最近、全員家族の元に居たそうだ」

つまり、と主は話を続ける。

「特徴とか合つてはいないが、お前は確実に誰かに見られていた、と言つ事だ」

その言葉に俺はサツと血の気が引いていく。

（見られて……た？）

でも……暗殺の時に他の人の気配なんて感じなかつた。

「この尊が広まつたおかげでただ今魔法省への印象は思わしくない」

暗殺時に魔力だつて感じなかつた。

「つまり、お前のせいで俺達は尊を揉み消すのに労力を割いている。……たかが奴隸であるお前のせいで、だ」

だから誰も居なかつたはずなのに。

「……処分の一つとして今日からお前を俺専属から外す。意味……分かるな？」

スウと主は息を吸う。

「お前は俺が呼び出すまで二度と俺の前には現れるな」

その言葉は解雇に近かつた。

……だが、解雇ではなかつたと言つのは運が良かつた。解雇は……奴隸の自殺を命じられたのと同じだから。

「後……もう一つ」

スツと主は左手を俺に近づける。

「お前の両手、貰つて行くぞ」

そつとて主はグッと俺の両手に手を食い込ませる。

「つ……！？」

右田にズキリと電流を浴びたように痛みが走る。

真つ暗になつた右田からズチュと言ひ音が聞こえたと共に主はニヤリと笑つた。

次の瞬間、ブチブチブチと言ひきちぎられる音が響いたと同時に先程とは比べものにならないくらいの激痛が俺を襲う。

「う、あ、ああああああああああああああああああああ」

俺はギュッと右田をつぶり両手で覆いながら森中に響いていのうくらいいの音量で叫び落ちる。

右田を覆い隠した両手にはヌルリと慣れている血が手につきやつからポタリポタリと地面に滴り落ちる。

「……これが今回の処罰だ」

ブシュと握り潰したような音を聞きながら主の声が響く。

「う、あ、あ……」

ズキズキする痛みにドロリと溢れる血で頭が真つ白な俺はボンヤリとそれを聞いていた。

フンッと鼻で笑う様な音の後にパチリと音が響いた。

（去つた……の……か、な……）

ジワリと赤黒く染み込んだ地面の上にまだ明るい赤いがポタリと落ちる。

スウと血の匂いがしながらも吸い込んだ森の空気が、やけに冷たい気がした。

三十六話（後書き）

アルの個人授業を辞めてから一週間。

アルは一人で学んでいた。

俺はと違うとアルの様子を見つつ、少し後悔していた。

確かに、俺の考えた事は間違っていない。

力を持てば人は一人になる。

だが、だからと書いて授業を辞めるべきではなかつた。

一人で学ぶ……それは悪く無いが一人だからこそ間違えたら間違えたまま。

俺は独学だつたけれども一人ではない。

俺より頭が良いロウェナやサラザール、ヘルガが居てくれた。

だから間違えたらその場で討論なり指摘を貰えた。

（やつぱり謝るしか無いかなあ）

あの日以外アルは俺を避けている。

コツソリと羊皮紙を見たり出来ないからアルが何を勉強しているか分からない。

(間違えたままじゃ、アルが危険だしな)

安全が前提なマグル用品ではないのだ。

魔法はあるか分からぬ。

学校を建てた理由の一つだつたんだけど……

(それを忘れて感情的になるなんて……まだまだ未熟者だな)

ハアとため息をつく。

(とりあえず、アルと接觸をして謝るのが先か)

スッとアルのいるリビングへと足を踏み出した瞬間にゴシンと頭に激痛が走った。

二十七話（前書き）

気づいたらお気に入りが増えている浮かれてるカイラです。

前回に続き前書きを書いていますが、今回をお知らせです。

まだ一週間前ではありませんがもうそろそろ期末テストが始まります。

私の高校、体育祭などが一学期に無いため範囲が広いです（泣）

ボチボチ勉強を…

あ、いやいやそんな事ではなくて、小説ですが一応登下校や昼休みなどの空き時間で執筆はしますが、更新が今よりかなり遅れる又は止まります。

楽しみにしている方には申し訳ありませんが頑張って登下校などに執筆し出来上がり次第載せていきますね。

これ入れて後一回のテスト、頑張って乗り切るぞー！

ダラダラと血が垂れている右目を覆い隠しながら地面と仲良くしているといつの間にか俺は気を失っていた。

目が覚めた頃には仲良しにしていた地面ですら見えない程に暗くなつていて、覆い隠していた手から血の乾いた感触はするけど血の独特な感触は無くなつていた。

（止まつた……かな？）

ペタリと右目に手を当ててみると目玉は無く少し押すだけで指がグニコと空いた空間に食い込んだ。

（…………）

その感触に眉を潜めながらも俺は手を離す。

そしてユックリと右目を開く。

初めて両目で周りの景色を見よつとしたけれど一面真っ暗で違いが分からぬ。

「…………夜、かあ」

……とりあえずこのパリパリした血をどうにかしたい。

落としたい。

「川……あるかな？」

目が暗闇に慣れるまでは動くべきではないだろうけど僅かなら気配で分かるし……後は、勘で行けるだろう。

スツと立ち上がり俺は足を一步踏み出す。

すると地面はサクッと軽い音を出した。

（…………とりあえず人が通る道つて事か）

人が通つていな道は踏み固められていないからこんな音は立てない。

そして人が通ると言つことは……その道に川がある確率は低い。

（森に入るつて事は当然水も持つている）

結果、川に寄る必要がなくなる。

（獣道を探さないと）

獣の足跡があれば後を追うだけで川に着く確率が高いんだけど……
「 そう上手くはいかないよなー 」

少しづつ周りが見えるようになつてきた左目で地面を見していくが獣の足跡どころか俺の近くは踏み鳴らされた地面ばかりだった。

「 …… 小さい森でありますよー 」

俺は祈る様に目をつぶり暫く時間を置いた後に駆け出した。

…… あちこちの木々にぶつかつたりしたれど運良く獣道を見つける事が出来た。

川の音も僅かだけれど聞こえる。

ただ……木々にはぶつかつただけではなく、擦つたり刺さつたりしてから川に着く前に少々流血したけれど。

「 まだ音が小さいね…… 」

でも辿つては行けるだろう。

サラサラと小さく聞こえる耳を頼りに木を避けながら森の中を歩く。川に近づいて来たのか、段々と音がサラサラからザアザアと迫力ある音へと変わつて来た時だった。

（もうそろそろ……）

近づいて来ている川へと意識を集中していく足元なんか気をつけていなかつた。

ミギュと何やら地面とは違う、けれど人間みたいなある程度固い生き物を踏んだ感触とは違う物を踏んだ。

「 ん? …… あー …… 」

違和感に俺は視線を足元へと向けるとそこには俺に踏まれている結構大きい鳥。

「……足を退かした方が良いかな？」

俺は怖ず怖ずと足を退かすが体力がないのか嗚く気配も、また踏まれたからと突くような気配も無かつた。

「…………」

別に、このままにしていても良かつた。

否、そうしていただきだう。

でも俺は考えるよりも先に大きい鳥を抱え川へと走っていた。

「着いたっ

日頃……と言うか奴隸の訓練でかなりの重量を背負う又は抱えて走り込み、と言うのをしていたからかさほど息も切れずに川へ着く事が出来た。

俺はすぐさま川近くに大きな鳥を下ろし、川へと向かう。チャップリと手を川の中へと入れるとヒンヤリと冷たくて俺は思わず手を抜きそうになつた。

それを何とか留めて水の中で両手を隙間無くピッタリとくつつけ水を救い上げる。

大抵はポタポタと落ちていつたのだけれどピッタリ合わせた両手の奥に少しだけ残つていた。

それを零さないように鳥の元へと戻つて行く。

「ほら、飲め」

俺は鳥の嘴近くへと持つて行くけれど鳥はグッタリとしていた。

「…………」

俺は一先ず先程踏んでしまつただの箇所へと水をかける。ずっと覆いでいる靴だから少なからず汚くなつてゐるだろうし。

パシャリと冷たい水がかかつたにも関わらず鳥は目が覚めない。

（……まず、血を落としてから薬草を探そう）

このまま居ても多分まだ鳥は目を覚まさない。

ならその時間を有効に使うべく俺は立ち上がった。

スッと鳥の元を離れ先程の川へと向かう。

さほど距離が無い川へ着いた俺はすぐさま顔を洗い手を洗い、ついでに体を洗つた。

……凄く寒かつたけれど。

そんな寒い思いをしながら洗い終えた俺はバジヤアと川から上がり濡れたまま体を震わせ出来るだけ水分を飛ばしてから洋服を着た。それから薬草を取りに行く為に予防運動としてグツグツと筋肉を少しほぐしてから俺は森へと駆けて行つた。

あの、大きな鳥を救う為に。

後ろへ振り返り、ぶつかった相手を見るとそれはふくろうで、立腹そうピィピィと鳴いている。

（……俺が悪いのか？）

一見、避けなかつた俺が悪いように見えるがふくろうは普通人にぶつからない様に避ける。

だから悪い……と言うか避けなかつたこのふくろうが鈍臭いだけで、俺が悪いわけでは……ないはず。

「『』苦勞様？」

キョトンとしながらそつそつと早く取れと言わんばかりに羊皮紙を近づけ俺の体を足に食い込ませる。

「い、でえ……取れば良いんだろ？」

手を差し出せばポイッとふくろうは羊皮紙を置きバササと飛び去つて行つた。

（あのふくろうを寄越した奴は誰……？）

元生徒とかじやないよね、と思しながら羊皮紙を開く。

（名前は……）

セブルス？

月光草が無くなつた。持つてないか？

(……月光草、か)

……無くなつていた氣がする。

(……無いで良いや)

今はセブルスよりアルの方が先だ。

そう思い俺は杖を抜こうとした。

「……あ、れ？」

……何処か行つちゃたな。

(何処に置いたっけ?)

……まあ、気づいたら二つものように戻つて来ているだろ？。

(……久々だな。『アクシオ』)

羊皮紙に、羽根ペンを浮かべ無言術で呼び寄せるヒュッと手に羽根ペンと羊皮紙が収まつた。

カリカリとセブルスへの返事を書き、羊皮紙を折る。

「いづすればつ、と

セブルスへ届く様に羊皮紙に魔法をかけ飛ばす。

(さて、これでセブルスのは終わった)

次はアルとの話し合いだ。

立ち上がり、俺は部屋へと足を踏み入れる。

「アル、話しがある」

勉強をしているアルへと、声をかけた。

あちらへこちら歩き回って薬草を見つけた。

薬草を見つけるだけでもかなりの時間が経つたはずなんだけど……問題はこの後だった。

「……川、何処だっけ？」

あちらこちら歩き回ったから何処に川があつたのか分からなくなってしまったのだ。

「…………何とかなるか」

最悪でも森の端から端……隅々まで行けば見つかるだらう、と考えついた俺は歩き出した。

それが……どれくらい前だらう?

気がついたら空は明るみ始めていた。

「……今日中に辿り着けるかな?」

依然、俺は森の中を歩き回っている。

一応、薬草を見つけるまでに踏み固められている道は通らなかつたからそこから先には行つていなければ……

「見つからないな……」

血は流して無かつたけれどあの鳥は意識が無かつた。
あんまり長く放つては置けないんだけど……

気持ちばかり先に行き次第に俺は焦燥感に駆られる。

(…………落ち着こい)

初めてあの川にたどり着いた時も、あまり道を逸らしては無かつた。多分曲がったのは五回以内、だ。

だから多分あの川はあまり複雑な位置にはない。

……ただ今、俺がいる位置は分からなければ川には行けない。

(…………あ、そうだ)

パツと頭を過ぎる昨夜の出来事。

主は……昨夜、俺の右田をえぐり取った。

俺はその痛みに叫び両手は血に濡れていた。

……地面に血が滴る程に。

（だからあの血を探せば……）

血があつた場所は昨夜のあの場所、という事だ。

（先に踏み固められている道に行こう）

あの場所から川を探した方が早いだろうしね。

ズボツと柔らかい地面を踏みながら俺は踏み固められている道へと向かった。

（あつた！）

踏み固められてくる道へと出てからずつと地面を睨みつけながら歩

き、やつと一部血濡れた地面を見つける事が出来た。

「此処から……何とか川に行かなきゃいけないんだよな」

既に日は真上近く。

このままだと日が暮れてしまいそうなスピードだ。

「少し急がないと……」

俺は目の前の獣道へと駆け足で突っ込んで行つた。

「見つけた！…」

昨夜と同じようにラカラと聞こえ始め、次第にザザアアアと重い音

に変わりすぐさまスピードを上げた俺の目の前に川が見えたのだ。

「この辺なはずなんだけど……」

キヨロキヨロと辺りを見回す。

（……大きいから見つけやすいはず）

「…………あ」

川から少し離れた場所に、赤い鳥がギロギロ威嚇しながら俺を見ていた。

「大きさからしてこれだよな…………？」

目も覚めたみたいだし、良かつた。

ただ……俺を敵として認識しているとは思わなかつたけど。

「でも……まあ、手当てるだけだから良いか」

あの時、何も考えずに抱え連れて来たけれど元々この子は野生。あんまり色々するべきでは無いだろう。

「終わつたら……放さないと、な

うん、そつしないとな。

スウと息を吸い、足を一步踏み出す。

赤い鳥はギロギロギロ警戒音を増していく。

俺はそれに怯む事もせずに近づいて行く。

直ぐに手が触れられる、そんな近くにまで近づいてから俺はピタリと足を止める。

「…………」

俺は薬草を持つてない方の手を、そつと差し出す。

赤い鳥はギュワァと今までに一番大きい警戒音で威嚇をし、ブシリと嘴を突っ込んで来た。

「つ…………」

ズキリと走つた痛みに耐え、俺は引っ込みそうな手を抑える。

此処で引っ込んだら多分、この子は治療をさせてくれない。

ギロギロ威嚇しながら赤い鳥はグリグリ嘴を動かし俺の手をえぐる。

「ぐつ…………つ…………」

今のうちに、怪我用の薬草を怪我してそうな箇所に塗り込めば良

いのだがそれは無理そうだ。

(…… どひ、 しょひ) (ひよじ、 しょひ)

痛みで何も思いつかない。

いや、痛みが無くても思いついていいだろ。

(…… つ～) (つ～)

眉を潜め俺は考える。

…… どうしたら、 ここの鳥は安心してくれる?

「 分かんない 」

ダラダラと流れていく血なんか気にせずに俺は一生懸命考える。

「 う、 う～～ 」

呻き声しか出てないけれどちゃんと考えた。

一生懸命、 考えた結果は何とかなる!

『 ギュウウ 』

そう考えついたら後は実行、 そう思つて怪我をしていない手を何とか伸ばそつとした時だつた。

急に威嚇が止み、 血に塗れた嘴がソッと俺の手から離れたのだ。

『 キュウ 』

鳥は諦めた様に鳴きソッポを向いた。

「 …… ？」

俺には急に攻撃をしなくなつた理由が分からなかつたけれど治療するなら今のうちが良いだろうと思い、 鳥の体を診ていく。

鳥は矢で打ち抜かれた傷や野生生物に喰われたのか、 かさぶたになつた傷痕が沢山あつた。

「 んー 」

矢で打たれた傷はまだ薬草を塗り込めるけれどかさぶたにはじつじようもない。

「 出来るだけで良いか 」

俺は薬草を取りギュツと傷の上で絞る。

ボタボタと僅かな汁が傷へと当たり、 鳥は痛いのかギュルル……と鳴き始める。

「……………」

俺はポンポンと鳥を優しく叩き、絞り切ったシワシワの薬草を傷へと当てた。

上手くいけば汁がカラカラの薬草をくつづけてくれるはずだ。

上手くいけば。

「よし、終わった」

後はどうしようもない。かさぶたは放つて置いた方が良いし、もし薬草が取れても……まあ自然に回復していくだろう。所詮、薬草は傷を治す際の補助でしかないんだから。

（さて……俺も行かないと）

何時までも此処には居られない。

俺は残った薬草を持ちスッと立ち上がる。

『キュウ！』

バサリと赤い鳥が羽を広げ空に浮かぶ。

「…………？」

俺はキヨトンと首を傾げると赤い鳥は俺の怪我をした手に頭を垂れ、泣いた。

ポタリポタリと数滴俺の傷へと当たる。

「…………うわっ！」

涙が当たると同時に凄い勢いで傷が塞がり今では傷があつたことですから分からなかつた。

「凄い…………」

俺はヒラヒラと手を動かし再度確認する。

「傷が無い…………」

『キュウ！』

赤い鳥はまるで俺の言葉に相槌を打つように鳴き、そしてバサリと羽ばたいた。

次の瞬間、ズシリと頭が重くなる。

『キュー…………』

流石に頭上まで見えないからよく分からぬけれど、声からしてあ

の鳥が俺の頭に乗つた、と思つ。

「……帰らないの？」

頭上からゴソゴソと聞こえ、すっかり落ち着いているだらう鳥に俺は聞く。

するとゴツンと鳥から突かれた。

……地味に痛い。

（帰らないのかな？）

それとも、まだ帰れる程の体力が無いのかもしれない。

「帰りたくなつたら帰つて良いから」

俺がそう告げると、もう一度ゴツンと突かれた。

その痛さに眉を潜めながら俺は此処から出る為に足を一步踏み出した。

三十八話（後書き）

「…………何？」

勉強を遮ったからなのか不機嫌そうに言つマル。

「…………う、あの、な」

…………やつぱり、謝ると言つ行為は何回しても慣れない。

「…………あんな事、言つて悪かつた」

俺は視線があちらこちら泳ぎながらも言葉を紡ぐ。

「ドラゴンを倒すと言つ事は力を……強い力を得ると言つ事だ。強い力を得れば人々は恐れ、離れていく

…………時には、殺そとも、する。

「そうなるなら俺は教えたくなかった。だが……」

俺の時だつて、一人ではなかつたよ。

「一人で学ぶには限界がある。独学が悪い訳でもないが間違えても指摘が無くそのままだ」

一人になるかもしれないが、逆にアルが一人になるとは限らない。

「そうならないように、子供が間違えないように

力や見かけ、育ちや……噂なんでもので計り嫌うんじゃなくて。

「だから俺は学校を建てた。それを……忘れていて、」

中身を知り、友となり何があつても見捨てないような親友と出合ふるよつて。

「…………悪い」

俺達みたいな子供を出さないよつて。

(……本当、馬鹿だよな)

忘れちやいけない事をフツと忘れて、な。

(あこづらに殴られそうだな)

願わくは会わない事を……いや、知られない事を祈ろつ。

ハアとため息が聞こえる。

「別に……あまり怒つてはない。ゴドが一人でした事だし」

「…………」

「…………それに俺は一人にならないよ。ゴドが居るでしょ?」

アルはフワリと微笑む。

その笑みは、俺の友を思い浮かばせた。

「…………ああ」

そうこえは……どうしているんだうつな?

この事を知られたくは無いし会つたらちょっとと騒動になる話しあるから会わない方が良いんだろうけど……

(元氣に……してゐのかな?)

もつ、随分会つていない親友達は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4002v/>

英雄伝説

2011年11月21日06時58分発行